
神に殺された少年

紅 智識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神に殺された少年

【Nコード】

N8382L

【作者名】

紅 智識

【あらすじ】

これは神に事故で殺された少年の物語・・・。
今は魔法先生ネギま！の世界に滞在中。

又、1から書き直しています。書き直し終わりました。
ですがまた書き直すかもしれません

更新がかなり不定期になると思いますが宜しくお願いします

ぶるーぐ

side:nobody

ここは真つ白な空間。

此処にいるのはただ一つだけ『神』と呼ばれるモノだけ。

今、その『神』は飲み物と食べ物らしきものを両手に持ちながら、何かを見ているようだ。

「ほうほう面白い事をする奴じゃな。

自分が罪を犯したからその償いに偽善と解つていても、人を助け続けるとは……。

真に面白い奴じゃあ……手から酒が滑り落ちてしまあ……あ……あ……
「……わしの酒が……」

観察対象にかかってしまったわい。だが……うん。まあなんとかなるじやろう」

かなりいい加減な『神』である。

それから暫くして今回の事件の被害者である偽善を続けていた少年が此処に送られてきた。

「わしは神だからじゃー!」

あまり読まなかったが、漫画で言うならばドンッ!

という効果音がつきそうな感じでイタタタな事を言っている。

んゝひょっとしてあれか?

『僕は新世界の神になる』とかなんとか言ってた人か?

「違うわい! アイム ア リアルゴッド。 ドウユー アンダア
スタアン?」

えゝゝゝ 本物っすかゝゝゝ

「すみません。」

自分がしていた事柄のせいで他人を信じれなくなってましてゝゝ
」

「解っておるわい。 お主のことなんぞ」

えゝとゝゝ ストーカー?

「違う違う。 話が進まんから簡単に説明するぞ!」

いはるなや

「まず此処はわしが創った特殊な空間で、

お主が此処にいる理由は手が滑って酒がお主にかかってしまったのじゃ」

へへ。 てことはアンタが俺を殺したのか……。 フフフハハハハハハハハハハ

憎い悪い憎い悪い憎い悪い！！

「わしでも、それはちときついのもう……。」

黙れ。

「冗談だろう……。」

「お主には悪いが冗談じゃないぞ。 先ほどの続きじゃがな

罪滅ぼしになるかもしれないが、お主のその生き様を見込んで世界を旅して欲しいのじゃ

だからその準備として、今から適当に創る世界に行ってもらう。

能力をを4つ付けておくからの。 ついでに不老不死にしておくからさ。

このとおりお願いじゃ」

いや適当って……

「神とやらが俺なんかには土下座するなよ。」

「まったく笑えない冗談だぜ」

「お主に旅をしてもらうのは漫画の世界もあるし、

お主のような理想を持った者達がいる世界じゃ」

「へへ面白そうだな」

「そうじゃろっ」

「少し黙っててくれないか爺。考えれないだろうっ?」

「すまんの」

「うん。よし願いはこれだよ」

1つ全並行世界の知識

2つ全並行世界の力（無限）

3つ想像具現化

4つ一回お前を殴りたい」

「よく考えたな・・・最後の1つ以外は」

「復讐したいんだよ!!」

「それもそうじゃな・・・。　　そうそうお主の行く世界は神話の怪物がいる世界だ」

逃げたな！

「話を変えるな。神話か・・・例えばどんな？」

「キマイラやサイクロプスじゃよ　そして能力があるからって油断するなよ？」

「理解してるさハゲ爺」

「呼び名が・・・　まあいい。　じゃあの・・・（ニヤリ）」

「はい？　どっいついm『パカッ』え？」

俺の下に突如黒い穴が出来た。

俺はそれに重力に従って飲み込まれた

s a i d e : 件の少年 e n d

s i d e : n o b o d y

「わしをハゲ呼ばわりしたおかえしじゃ」

「アンタにあつたら、今回の分ぜってー2倍にして返してやる!!」

覚えてろy『ガタンッ』・・・」

彼の少年の叫びは閉じられた蓋のようなものにより遮られた。

「忘れられるわけないじゃろうに。　　わしは神なんじゃから・・・」

哀愁を漂わせた『神』の呟きを聞いたものはいない。

s i d e : n o b o d y e n d

ぶろろーぐ（後書き）

書き直し第1号つす

第1話：召喚された少年

side:nobody

ヒーロー――

- - - - -少年絶賛落下中- - - - -

side:nobody end

side:件の少年

なぜこうなった・・・

確か俺の下に黒い穴が出来て

落ちる時にハゲが

「わしをハゲ呼ばわりしたおかえしじゃ」

って言ってたな・・・

チツ あの時黙って殴っておけばよかったな・・・

しかもそのあとに真っ暗な空間に送られてポケットの中に、

紙が入っていて、書いてあったのが『ヒーロー』だけって・・・

「え？何コレ？俺への厭味ですかコノヤロー！！！」

って思った瞬間に変な声が聞こえて・・・

コレだよ。

ん？コレってなにかってそりゃ落下してい・・・

あー！！！！！！　　そういえば今落下中じゃん・・・

思い出している場合じゃない！！
せつめいしている

えっと・・・えと・・・　ダメだ良い案が浮かばない・・・。

こうなったら早速使うか・・・

ぶっつけ本番で。

『想像を具現化して

造り出すは

某マフィアのボスが使いし武器

×グロ○ブ』

次に覚悟を炎に・・・って俺にどんな覚悟があるんだろう？

まあいいか何とかなるだろう多分。

うん。なんとかなるよ絶対。

え〜と・・・まあ大丈夫だろう。

「行くぜ、覚悟を炎に！！！」

何となく言ってみた。・・・ではなくて。

『ボウッ』

うん。上々だね

ここをこうしてこんな風に意識して、炎を制御して・・・

『スタッ』

ハイ着地っ

炎の制御に夢中で気づかなかったが

魔方阵が自分の下にあって、前に人がいた。

この事から導き出せる真実は1つ！！（薬を飲まされて、高校生から小学生になった人みたいに）

それは召喚だ！！ ナ、ナンダッテエエエエ！！???・・・では

なく、

「サーヴァント：ヒーロー、召喚に応じて参上した。問おう・・・
貴様がマスターか？」

うん。やっぱり召喚されたらこうでしょ？

前から、言ってみたかったんだよね。この言葉。

side：件の少年改めサーヴァント：ヒーロー改めヒーローend

side：召喚師

もうそろそろ時間かな・・・

さて、魔方阵をかいてと・・・

「我、エリナ・A・マガティアが命じる。

我が名、エリナ・A・マガティアにおいて、

我に仕えるものを此処に呼び出さん。」

『キイイイインッ』

成功でしょうか・・・

『 &% # \$ 〃 一 ¥ ● × ! ! ! ! 』

はいいいいい？ な、何なんですか一体！？

上から声がしたので見上げようとした瞬間・

『 スタツ 』

金髪でマントを羽織って額と両手に炎を灯している人が落ちてきました・・・

「サーヴァント：ヒーロー、召喚に応じて参上した。問おう・・・
貴様がマスターか？」

やさしそうな目つきなのですが・・・。 なのですが・・・

なんですかその幸福感たつぷりの顔はッ！！！！ イラッときますね
ッ！！

side：召喚師改めエリナend

第1話：召喚された少年（後書き）

書き直し第2弾！

第2話：キレる、召喚師

エリナside：

「えと・・・さーうゝぁんと？」

とやらを召喚するつもりでは無かったんですが」

「えゝ・・・そんな・・・ナンテコッタイ。orz」

なんか絶望していますけど・・・

「あの・・・」

本当にこの人なのかな？

「ん？ 今、ちょっと取り込み・・・まあいいか

で、何のようだ？」

何をしていたんだ？ この人？は・・・

「あの、召喚に応じて来てくれたんですね？」

「ん？ んん？ あゝアレかー・・・多分そうだよ。

俺があんたの召喚に応じたモノだ。めいびー」

本当にこの人？だろうか・・・。本当に大丈夫なのだろうか・・・。

それにめいびーって・・・。

こんなんでも洞窟を探検できるかな・・・

「失礼な事を考えていますね・・・酷いですね。」

「心を勝手に読まないでください!!」

「元気だねえ。何か良い事でも有ったのかい？ 召喚師のお嬢さん？」

コイツッ!!

「あんたが勝手に人の心を読むからでしょッ!？」

「それもそうだね!。 だけど怒ってばかりだと皺が増えるよ」

だからカルシウムを取ったほうが良いよ?」

『ブチッ』

「え? 今の音って何のおt『ヒュンッ』おわっ!

危ないじゃないですか・・・ どうして・・・」

「どうしたんです? ヒーローさん。顔が真っ青ですよ? キヤハハハ」

「こ、殺されるッ!!!!」

「何で逃げるんですか　待ってくださいよー」

「なんで追いつけるんだよー！」

「コレでも俺『ちーとぼでい』だよ？　なんでさー！」

「それは、私のこの行為が、愛の無い鞭と同じだからです」

「そりゃそうだー！！　初対面に愛とかあつたら色々と大変だわー！！」

「全く、もう・・・　逃げ回る貴方が悪いんですからね？」

「は？　な、何を・・・」

「我が名エリ二ナの下に

契約した火の精霊よ我に力を」『ボルケーノ』

「なんかそれなりに強そうな呪文キターー！！！」『死ぬ気の零地点突破・ファーストエディション』

ドオオンピキピキッパキンッ

「ふう・・・成功だな。　かなり強かったんだろうなー。

うん。　そうだ、強いんだよきつと。

でもどうしよう・・・。」

「なにをどうするんですかー？」

「ヒイヒイイツ！！で、でたー！！」

なんか又・・・

「人を幽霊扱いしないで下さい。

大丈夫です。冷めたので。」

「そ、そう・・・な、なら良かった。

うんとても良いね・・・助かったぜ（ボソッ）」

「全く・・・。一先ず近くに私の親戚が経営している宿がありますから

そこへ行きますよ」

「了解した・・・えっと・・・えと・・・。なんて呼べば？」

そうですねえ・・・

「エリナと呼んでください」

「エリナですか。へえ、いい名前ですね？」

「ッ！！／／／／あ、ありがとう／／／」

「顔が真っ赤ですよ　アハハハハ」

クウ　絶対に仕返ししてやるんだから！！！！

side: エリナ　　end

第2話：キレる、召喚師（後書き）

書き直し第3弾

少し遅い主人公紹介 + α

クラス名：ヒーロー

真名：ジョット＝ル＝アルカディア

英語表記：Giottoll＝Arcadia

性別：男

体重：65kg

性格：毒舌、めんどくさがりや、偽善者、やさしい

好きなもの：他人の不幸。甘いもの。他人の夢。夢をかなえるために頑張る奴

嫌いなもの：自分の不幸。他人の幸せ。自分と似たような存在。夢を壊す奴

能力：その1：全並行世界の知識。早い話がアカシックレコード。

その2：全並行世界の力（無限）。（死ぬ気の炎や霊力、魔力など）

その3：想像具現化。読んで字のごとく。イメージ次第だが何でも出来てしまう

備考：転生する前に偽善者であつた事が伺える。

そのせいか、あまり物事を知らなかった為このような願い事をしたらしい。

神について、

一応最高神らしい。しかし立ち居振る舞いが・・・

主人公にハゲ爺と呼ばれる。また、意図せずこの物語を創ったモノ

世界観について

ギリシア神話、ローマ神話と適当な世界が合体したような感じ

少し遅い主人公紹介 + α (後書き)

書き直し第4弾

各種設定

名前：エリナ・A・マガティア

英語表記：Ellinia・A・Magatia

性別：女

体重：破滅させられました。

性格：比較のおっとり。

好きなもの：甘いもの全般

嫌いなもの：苦いもの、辛いもの全般

能力：その1；一応大空の波動を持っている。

その2：召喚術などの魔法

その3：????????

備考：ジョットが創った『指輪』に炎を灯す事が出来るほど強い覚悟がある模様。

また、戦闘にはまだ慣れてない様子。

ヒーローを何故召喚できたか解っていない。

各種設定（後書き）

書き直し第6弾

第3話：異形なものとの初戦闘。

side：ヒーロー

いやあ助かった助かった。うん。

これからはエリナさんをからかうのは止そう。

だけどさ・・・

はあ・・・

まったくなんの冗談だよ・・・

俺が英雄？ふざけてるとしか言いようがない

俺は偽善者なんだ。

正義の味方にあこがれて、

正義の味方の真似をして、

自己満足に浸っていた偽善者なんだ。

ただそれだけ。

それぞれの頭を持つとする説もある。

口からは火炎を吐く。

リュキアに住み、カーリア王アミソーダロスに育てられたが、

ペーガソスに乗る英雄ベレロポーンにより

火炎を吐く際に先端に鉛の塊を付けた槍を口に放り込まれ、

火炎の熱で溶けた鉛で喉を塞がれて窒息死させられ退治された怪物だ。

w o k i p e d i aより引用」

ん？電波か？

どうでもいいこと気にしている場合じゃないや

エリナさんは・・・『キュッ』

気絶しちゃったよ・・・

この人本当に召喚師か？

まあいいか。

え〜と・・・こうか？

「『包囲・定礎・結』」

強度がいまいちわからないな。

ためにノックしてみるか？

『コンコンコンコン』

うん。大丈夫だろう。

『G y a a a a a a A A A A A A』
『ボ————ウツ』

ええええええええ！！！！

咆哮と同時に火炎放射ですか・・・。

「そうですね。そっちがそのような・・・って意味無いですね」

炎には炎だぜ

想像して造り出すはXを名前に二つ冠する者の武器

『D e s s e r t E a g l e v e r ・ X A N X U S』

普通の銃を死ぬ気の炎を打ち出せるように改造したものでス

「さてと・・・俺は今怒っている。

だから・・・いやこれは詭弁か。

じゃあなキマイラ。哀れな複合生物」

『キユイイイイン』

「コルボ・ダッティオ
決別の一撃」

『ズドオオオオン』

煙が晴れてきましたねえ。

おや？アレ？アレレ？アレレレ？

キマイラが跡形も無く消えちゃったよ。

オーバーキルかよ・・・

はしゃぎ過ぎたな。

エリニナさん起きたらどう説明しようかなこの状況。

面倒くさいなあー。ハア・・・。

第3話：異形なものとの初戦闘。（後書き）

書き直し第5弾

第4話（1／2）：説明する少年（前書き）

今回は二つに分けます

第4話（1／2）：説明する少年

エリナside

あれ何故空が横になってるのでしょうか？

・
目の前には、しゃがんでなんか書いてるジヨットさんがいますし・・

何があっただんでしょうか？

「あゝお、気がついたか？」ええ、何があっただんですか」

「えゝと、貴女が経営している宿に行こうとしたら
キマイラが出て（ry」

ジヨットさん曰く

私はどうやらキマイラをみて、気絶していたみたいです。

そしてジヨットさんが倒したそうなんですが・・・

どうやってあんな大きいクレーターが出来るのでしょうか？

「言いたくないんだけど・・・」

「口に出てましたか？」

「んにゃ全く。でもわかった。」

「では説明してください」

「言わなければ良かったな……。ハア……。」

side:リナ end

side:ジヨット

「あ、お、気がついたか？」ええ、何があったんですか」

「えーと、貴女が経営している宿に行こうとしたら

キマイラが出て（ry」

死ぬ気の炎などは、ぼかして説明したんだが納得するかな。

なんか考えているな」「キュピイン」

ん？ニュータイプになったのか俺……

なんか納得してない気がする

「言いたくないんだけど……」

「口に出てましたか？」

「んにゃ全く。でもわかった」

「では説明してください」

「言わなければよかった・・・ハア・・・」

第4話（1／2）：説明する少年（後書き）

書き直し第・・・えと・・・

気を取り直して、

書き直し第7弾！！

第4話（2 / 2）：説明する少年（前書き）

後編です

第4話(2/2)：説明する少年

side: ジョット

何でいったんだ俺・・・

ちょっとタイムスリップして

少し前の俺を殺そうかな・・・

あーでもタイムパラドックスがおきるか。

いやその前に俺って死ねなかったk「何があっただんですか」

現実逃避ぐらいさせてよ・・・

「まずどこから説明す」「空から降りてきたところから」「見てただ」

「ええ、みてました」

「ハア・・・」

では、説明する前にひとつ言っておきますが全て実話ですからね。

「

まあいいや信じるはずがない滑稽な話なんだから

「解りました。では、説明をお願いします」

「まず、空から降りてきた時に使っていた炎は、死ぬ気の炎といってオーラより密度の濃いエネルギーでそれは、指紋や声紋と同じで一人一人炎が異なるんだ。そして炎の使い方次第では、炎の推進力によって宙に浮き自由に飛び回ることができるんだ。」

→これ一息で言った俺はすごい。

「次にキマイラを倒した『力』は憤怒の炎といって、死ぬ気の炎から派生したもので、光球に近い性質を持っている。また、死ぬ気の炎より圧倒的に強力で、自分はそれを銃の弾に込めて使ってる。」

→連続一息はキツイっす

「はあはあはあ・・・
コホンッ
質問は？」

「えっと・・・どんな銃を使っているの？」

「これだよ」

と、いいながら先ほどの『D e s s e r t E a g l e v e r .
X A N X U S 』をみせる

「一回撃ってみて」

「後悔しても知らないぞ？」

この顔は・・・なんだっけ？

「いいから早く、早く。」

「らじゃ（＞＜）ゞ」

『キュイイイイン』

「本当に炎が銃に吸収されてる」

こんなもんか？

「Fire」

かっこつけてみました・・・

後悔してます

『ズドオオオオン』

またやっちまったZE・・・OTL

「（ΦДΦ）！？」

どんな驚き方っ？！

「信じてくれた？」

「し、信じます、信じます。」

だからや、宿に行きましょう」

どんな繋げ方だよ……

「あいよ」

まあ……悪くない……かな？

あるえ？俺誰に尋ねたんだろう……

さてとこの世界の宿ってどんなのだろう……

第4話(2/2) : 説明する少年(後書き)

書き直し第8弾!

書き直したけどggggdですいません

第5話：宿への長き道程

ジョットside

やあどうも皆さん。

エリナさんの経営している宿に、現在進行形で向かっているんだがとても気まずい状態に陥っている。

なぜなら憤怒の炎をみせてから、エリナさんに話しかけても

「ええ」とか「はあ」といったような生返事しか返ってこなくて、

終いには返事もしてくれなくなったからである。

本当にどうしよう・・・。

「宿はもうそろそろですか？」

「ええ」

「解りました」

ね？

side：ジョットend

side：エリナ

ジョットさんに見せてもらった『憤怒の炎』

とやらの破壊力が強すぎ驚きました。

彼は、死ぬ気の炎の亜種とか言っていましたね・・・

死ぬ気の炎は人それぞれの種類が有るって言うたので、
使い方次第で冒険が楽になりそうですね。

とこんな事考えていたら

「宿はもうそろそろですか？」と聞かれました。

「ええ」

「解りました」

さてさて、どうやればあの炎は出せるのかな？

他にも種類があるのかな？

sideエリナ end

第5話：宿への長き道程（後書き）

書き直し第9弾！！

でも短い・・・

第6話：ハイ?? 宿〃城？

side：ジヨット

えと・・・一先ず

やあ、みなさん

今、過去進行形でかなり驚いていた偽善者なジヨットです

何に驚いたかつて？

それはな・・・つとその前に聞いて驚くなよ??

この世界の宿が城なんだぜ!!

驚いたけど仕方ないよね？答えは聞いてない！「古ッ!!」

ん？誰だ今ケチつけた奴

「その少年。メタな発言は控えるようにッ!!」

あゝ電波ですか。

まあいいや。

そして、この宿を経営している親戚の方々は俺を見て

「やっとエリ二ナにも春が来たわ（な）」

て言ってた。

しかもその後、

「じゃあ、私達は別館にいきますから

後はご両人ごゆるりと」

と、なにやら企んでいる顔で消えた。

マツタク、ナンノコトヤラ？

おふぎはコレぐらいにして

探索するかー

ん？何でかって？

風呂や台所の場所知らないからSA

あるえ？

真面目に手抜き無く手を抜いて、不真面目にシリアスになると
思ったのになあ・・・

つーことでLet's Go!!もしくはHere We GO!
!!ってか? ハハツw

あーちなみに、親戚の方と話してたときエリ二ナさんが
顔を真っ赤にしていた事を此处に記しておく。

side:ジョット end

side:エリ二ナ

ジョットさんが横で驚いていたのを見ていたエリ二ナです
此処の宿を経営しているおばさん達に

「やっとエリ二ナにも春が来たわ(な)」や

「じゃあ、私達は別館にいきますから

後はご兩人ごゆるりと」

なんて言われましたノノノノノ

もうおばさん達ったら気が早いんだからノノノノ

でも、ジョットさんだったら良いかもしれないな……

あんな事やこんな事してもらったり／／／／／

エヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘ

side:エリ二ナ end

「え」とエリ二ナさんが壊れたので今回はここまでで。

ん?「ふざけるな!!作者は引っ込んでろ!!!!!!」だって?

またまたーそんな事言つて

冗談がきついなー

え?「冗談じゃない」だと・・・

えーと、スイマセンでした。

だけど続けるには色々かねえ?

「しょうがないから許す」?

ありがとうございます」

第6話：ハイ?? 宿〓城? (後書き)

書き直し第10弾!!

でもグチャグチャですね

ggggとは似て非なるものですね

第7話：炎を灯す召喚師（前書き）

このような駄作にも感想やレビューを書いてください。
お願いします

side：エリナを加えました

第7話：炎を灯す召喚師

Side: ジョット

いや／＼うん気持ちよかったよ。

ん？何がってそりやベッドの事さ

何故肩を落とすのさ……

それでね俺は借りている部屋で悩んでいる

理由はエリナさんに尋ねられたから。

しかし、どうやって『アレ』の出し方を説明しようかな……。

覚悟つてもあの時は適當だったし……。

.....

・
・
・
・
・
・
・
そうだ

おゝいハゲ爺いゝ

「わしを呼んだのh……ってお主か……。」

わしに何のようじゃ？」

「この世界ってどんな感じの世界なんだ？」

「ちよつとまっておれよ。今、調べるで」

・・・・・・・・2分経過・・・・・・・・

「ギリシア神話、ローマ神話と適当な世界が合体したような感じで

魔術や魔法などの神秘やキセキが許された世界じゃよ」

「時間かかりすぎじゃね？」

「いったいどうしたんじゃ？」

「オイオイ無視かよ」

「この世界の人に聞かれてしまつてな・・・・。」

「何をじゃ？」

「死ぬ気の炎」

「そうか・・・・。用件は終わったようじゃし、それじゃあの。」

「ああ。又何かあったら呼び出すぜ？」

「かまわんよ」

——ロビーにて——

「エリナさん。今から貴女に出し方を教えます。

しかし出せるかどうかは分かりません。

そして出せてもばくの言う事を守ってもらいます。

それでもいいですか？」

「はい、分かりました」

「ではまずこの『指輪』を利き手の中指にはめてください。

次にあなたの成し遂げたい事を思い、

それを何があっても叶えるという強い『覚悟』をしてください。

そうすれば灯るはずです。」

「分かりました。」

と、言つてエリナさんは右手の中指に『指輪』をはめた。

そして『ボウッ』という音と共に橙色の『死ぬ気の炎』が灯った。

・・・なんでさ

いやいくらなんでも早いだろ!!!

おかしすぎる

此処の人たちは・・・

side:ジョットend

side:エリナ

あの炎について考えているとジョットさんから声をかけられた。

「エリナさん。今から貴女に出し方を教えます。

しかし出せるかどうかは分かりません。

そして出せてもばくの言っ事を守ってもらいます。

それでもいいですか？」

やはり難しいのでしょうか・・・

「はい、分かりました」

「ではまずこの『指輪』を利き手の中指にはめてください。

次にあなたの成し遂げたい事を想い、

それを何があっても叶えるという強い『覚悟』をしてください。

そうすれば灯るはずです。」

『強い覚悟』か……

「分かりました。」

私の覚悟。私の成し遂げたい事は……………

『ボウッ』

やった灯りました！！やったー！！

side：エリナend

side：nobody

女の人がうれしそうな顔をしているが、

その前にいる少年が失意体前屈をしていた。

side：nobody end

第7話：炎を灯す召喚師（後書き）

〵〵作中で出てきた『指輪』についての説明〵〵

『指輪』：主人公が創った精製度S以上のリング。

このリングひとつで全種類の炎が灯せる。

又、生半可な『覚悟』では炎を灯す事は出来ない。

書き直し第11弾!!

第8話：炎を武器に纏わせる召喚師（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

第8話：炎を武器に纏わせる召喚師

side：ジヨット

おいおいおいアレに炎を灯すのかよ・・・。

ま、まあ第一段階は終わったし次は武k・・・ってエリニナさんはどんな武器使うんだ？」

「私は槍と双剣とサーベルを使いますよ」

「へえーそうなんだー・・・って、ハ？ 何で解ったんだ？」

「口に出てましたよ」

「そうですか・・・。今、武器ありますか？」

「ありますよ、もちろん」

「では武器を手持って構えてくださいそしてその『指輪』の炎を武器に移すというか、纏まとわせるというか・・・とにかくこんな感じで」

そう言いつつ適当に創ったサーベルに纏わせてみせた

「わかりました」

・・・女性試行錯誤中・・・

「こうですかね？」彼女はそういつて『大空の炎』をサーベルに纏わせて見せくれた。

「そうですね、そんな感じです。」

それにしてもすごいですね、教えてから20分で出来るなんて」

この人はリアルチートなのか・・・

「ジョットさん今、失礼な事考えなかった？」

「イイエ、メッソウモゴザイマセン。ホントウデスヨ？」

「では、なんで片言で聞くんですか？」

「きのしえいですよ・・・噛んだorz

「ならいいですが・・・。どうしたんです？顔が赤いですよ？」

「イイエ、ナンデモゴザイマセン。」

「変なジョットさんですね」

「アハハハハ 気にしないでくれ・・・

そういえば、何のために俺を召喚したんだ？」

「洞窟探検には使い魔が居ると楽ですから・・・

だから召喚したら・・・」

あーイレギュラーなのか・・・

「ふうん。そうか・・・わかった」

まあ洞窟探検も一興かな

side: ジョットend

第8話：炎を武器に纏わせる召喚師（後書き）

皆様、お節介かもしれませんが、夏バテにはオクラやゴーヤが効くそうです。

なのでそれらを食べてたのしい夏休みを乗り切ってください。

書き直し12弾！！

書き直してもグチャグチャです。間違ってもggggdでは無いです。

第9話：It's Show Time!!・・・言ってみただけさ

PVが10,000越えてました。またユニークも2000越えていました。

このような作品を呼んでくださる方に感謝を。

第9話：It's Show Time!!・・・言ってみたかっただけさ

side：ショット

俺がエリニナさんに炎を出させてついでに武器にも纏わせてから数日たって・・・

正直言つて、出来るとは思わなかった

だって漫画とアニメのどちらも大空属性のやつが武器に纏わせているのを見たことが無い

グローブと銃以外だが・・・

まあ為るようになるかな・・・

サーベルが『調和』によって変化していなければいいのだが・・・

さてエリニナさんはどこかな・・・

いまから探検するのに・・・

入る前から迷子か？

「エリニナさんどこにいますか？」

・・・少年探索中・・・

マジでどこ行っかし・・・

「エリニナさんどこにいますか」

これは本格的にやべーぞ！！！！

「こっちです」。　　こっちに入り口がありました」

ふう・・・見つけた

side:ジョットend

side:エリニナ

死ぬ気の炎とやはらすごいですね・・・。

魔力や気よりも伝導効率が良くて、魔力や気よりも強い性質を持つてるなんて・・・。

今のところ私のサーベルには変化はないですね。

聞くところによると私の出した炎は珍しいらしく、『調和』という効果があるそうですが・・・

ですが本当にこの炎で戦えるのでしょうか．．．．。

「．．．．．ん．ここにいますか」

ん？誰かに呼ばれた気が．．．

「エリナさんどこにいますか」

ジョットさんが呼んでいますね

「こっちです。ここに入り口がありました」

さてと、探検するぞー！！

side：エリナend

第9話：It's Show Time！！・・・言ってみただけさ

これは書き直し第13弾かな？

第10話：主人公、洞窟に入る！！（前書き）

なぜか連続投稿・・・

第10話：主人公、洞窟に入る！！

side：エリナ

なぜかジヨットさんがこちらに来てから神妙な面持ちで考え事をしています。

何があっただんでしょう・・・

「あのジヨットさんどうしたんですか」

「ひゃ、ひゃい／＼／＼／」

side：ジヨット

実はエリナさんに声をかけたすぐ後にハゲ爺から連絡があった。

？力に慣れてもらつたため

？実は・・・手が滑っちゃったデヘ

？お主が行きたくなつたらでよいが他の世界に飛ばすぞ

と、いうことらしい？、？はいいが？はどうよ・・・。

「ジヨットさんどうしたんですか」

「ひゃ、ひゃい／＼／＼／」

いきなり声をかけられてびっくりした為何とも情けない声をだして
しまった／＼／＼ううう／＼。

「コホン・・・ああ、ちょっと考え事をしていてね。

洞窟を探検してからすぐに旅立たないといけない様なんだ・・・。

だからエリナさんに何を送ろうかと思ってね。」といいながら
少し微笑んでみた

「っ！！／＼／＼いえジョットさんからはもうもらってますから大丈夫
ですよ／＼／」

・・・。

なぜ顔を赤くしたんだ・・・。

わからないな。

まあいいか。別れはあっさりした方がいいしな。

「じゃあエリナさん探検しますよ！！！！」

「フフフ。そうですねジョットさん。」

「それでは」

side:ジョットend

第10話：主人公、洞窟に入る！！（後書き）

書き直し14弾！！！！
なはず

第11話：洞窟にて

side: ジョット

入ってからなんやかんやあって、今は最深部にいます。

え？詳しく教える？

しょうがないね〜

図で表すところなる←

俺達が洞窟に入る エリニナさん何故か罠に引っかかる

テンプレ的な何かで岩が転がってくる 無我夢中で逃げてたらサ
イクロプスに見つかる

俺、倒す なんか第2、第3の俺が的な事を言おうとしたので燃
やす

燃やした時に出たナニカにより2個目の罠発動!!!

逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて 最深部

って感じだ。

うん、ぶっちゃけハムナプト。とインディ・ジョーン。見たいな感

じだな。

マジで体験する事になろうとはな・・・予想外デス。

話がそれた

なぜこんな事しているかと言うて「こんなところで現実逃避しないで下さい！」

うん目の前には神話に出てきそうな魔物が・・・

For Example:ヒュドラ、ケルベロス、ヨムルガンド、
リヴァイアサン、社長の嫁（究極体）

・・・まあ場違いな奴もいるけど、アレだ

ご覧の通り貴様等が挑むのは無限の魔物。

魔性の者達の極致。

畏れずしてかかって来い！！！！

みたいなww

又それだな。

んゝこんな時に合う言葉が・・・

なんだろう・・・

<ぼく、ぼく、ぼく、ぼく、ちーん！>

てめーら全て殺して解して並べて揃えて晒してやんよ

だつたつけ・・・

それとも

さてと。零崎を始めようか？

かな。

天然フラグ乱立駄男さんはムリだし

白い魔王さんも合わないな・・・

他のも合わないしな。

だから、

「さてと。零崎を始めようか?」(↑が出るまでにかかった時間2秒)

I t · s 殺戮 T i m e ! !

s i d e : ジョット e n d

s i d e : エリナ

何で。

何で何で。

何で何で何で。

何で何で何で何で。

何で何で何で何で何で。

何で……伝説級の魔物ガイルンダ?

何で……ジョットさんはこのな状況で普通にい r ……逃げてるのですか……

「こんなところで現実逃避しないでください!」
全く。

此処から出れたら絶対に親戚の人から賞金貰うんだから!!!

でも……。出れるん」さてと。零崎を始めようか?」

<ゾワリッ>

ッ!!

ジヨットさんの空気が・・・変わった・・・。

そして何故かわからないけど、此処から出れるような気がした。

side: エリナend

side: nobody

<ザシュッ・・・グシャッグチャッ・・・>

<ザシュッグシャッ・・・グチャッネチャッ・・・ボトッ・・・>

<ドオオオン・・・ズガガガッ・・・ドガアアン・・・>

先ほどから少年が孤軍奮闘している。

しかしその少年の顔は狂喜に満ちており・・・

「アハハッハハクフハハッハハハッハハ」

「あ、あの……。ほ、本当にジヨットさんですよ？」

「アハハハ 何言ってるんだい？僕は正真正銘ジヨットさ」

「いえでmウゝオゝエゝ……。」

「おいおい！ 何、吐いちゃってんの？

せつかくの血のいい匂いが、

キミの出したモノの臭いと混ざって最悪になったんですけど？」

「す、すいmオゝウゝエツエゝ……。」

「チッ・・・めんどくせーな

あんた下がつてろ」

「は、はい……。」

と、色々と危ないのである。

それでも魔物達と互角以上に戦えているあたり、

この状態がこの少年の本性なのかもしれない。

「ラストオオオオオ！……！！！！」 < § @ & # % ¢ \$ \$ \$ ÷ || ≠ ♂ ♀
° ● ■ ← ↓ ▼ ・ ・ ・ ・ ・ ∩ ♯ † ‡ >

最後に残ったのは、彼の神話の英雄ヘラクレスも苦戦したヒュドラだった。

しかし、筆舌に尽くしがたい音と共に少年に葬られた。

これにて3時間にもわたる戦闘に漸く幕が下りた。

少年達の圧勝だ。

下手したら完勝かもしれない。

ただ、この戦闘が終わった後に残っていたのは無数の魔物たちの骸。

彼のモノたちが何を守っていたかは解らなくなってしまった。

その点では、魔物たちの勝利かもしれない。

s i d e : n o b o d y e n d

第11話：洞窟にて（後書き）

書き足し第1弾。書き直し15弾だったかな？

アハハハハハハ・・・

ハア・・・。しょうがない逝くか・・・字間違えた。行くか・・・。

「あの・・・エリナさん？」

「何でしょうか？」

うわゝスゲーいい笑顔なんだけど、目が笑ってないや

「別れの言葉を述べに参りました」

「？ ああ・・・。そうでしたね・・・。」

「こちらへ来てください」

「??? はい・・・。」

さっき魔方陣を二つ書いておいたんです。

「この魔方陣の上に乗ってください」

「これ……ですか？」「ええ。そうです」

「えと……どこを向いて乗れば……？」

「もう一つの魔方陣の方を向いて」「こう……ですか……？」
「はい」

「何が起ころうとも、その魔方陣から出ないでくださいね？」「はい、はい……」

さてともう一つの魔方陣へ乗って、言葉を知識から引っ張り出して……

我が目の前にいる者の子孫が、心の底から真に力が欲しいと願った時、

其の者の持ちし力とく我>が与えし『指輪』を触媒に、其の者に

<我>を召喚させる事を此処に我が叡智、我が力、この魔法に、
この世界に誓おう

「キャッ！眩しい……！」

「今だハゲ爺。俺を転送しろ」
「いいのか？」
「ああいいんだ。早く！！」
「解ったのじゃ」

「じゃあなエリナ。いや俺の最初のマスター」

「え！？ ジョットさん？！ ジョットオオオオオオオオオオ！！！！」

じゃあな 世界 よ

シュンッ

side・ジョットend

第12話：召喚師と第1の世界に別れを告げる、主人公（後書き）

えゝと一応書き直しましたが、又書き直すかもしれません。

第2の世界：第1話：主人公、魔法先生ネギま！の世界に降り立つ・・・o

首領パッチソードから錬金術に変えました

第2の世界：第1話：主人公、魔法先生ネギま！の世界に降り立つ……o

side：ジョット

「お主をネギまとやらの世界に飛ばしたぞ」

は？今なんていったこのハゲ爺

「だからネギまとやらの世界に飛ばしたんだって

ついでに現在進行形でお主はスカイダイビング中じゃキラーン」

スカイダイビング中じゃキラーン、じゃねえー！！！！

「たく、何してんのさ。なら今、原作のどれぐらい前？

「聞いて驚くなよ」

ああだいじょうぶだ

「原作開始700年前DA ZE」《イエエエイドンドンパフパフ》

バカだろお前……、何故に700年前

「それは……」

それは……なんだ

「手が滑っちゃったからテヘッ」

手が滑っちゃったからテヘッ　じゃねえよ
さっきまでの雰囲気返せよ

へだが断る

てんめー、それでも神様がコノヤロー

ふうんこれでも神さまですコノヤロー（キリッ
じゃあねー頑張ってねー

へあ、そうそう。チート能力はそのままだからねー

ふうん。じゃあな。

ってことは錬金術できるのかな

手を《パンツ》ってあわせて・・・

まあいいか

さてと、赤原礼装を着たあの英霊と同じように

『トレス・オン
強化・開始』

《ドゴオオオオン》

ふいー着地成功かな

ふむ、あいつの心情がわからんでもないな

「う、うわ、ば、化け物だー!!!」

oh、ナンティコッタイ

見られてしまった

sideジョットend

第2の世界：第1話：主人公、魔法先生ネギま！の世界に降り立つ・・・o

次は主人公の修行（と、言う名の遊び）です

第2話：主人公の修行（と、いう遊び）

Side：ジヨット

洞窟が近くにあつたのでそこに入った。

奥へ進むと開けたところがあつたのでそこでダイオラマ魔法球・
いわゆる別荘を創り、各種設定をしてから入った。

・・・inダイオラマ魔法球・・・

んゝ殺風景過ぎるな・・・まあ良いか。

んじゃあまず『影分身の術』《ボンツ》

「んじゃあもう一人の俺よ適当に変化してそいつの技を使ってくれ
や」

「了解」『変化』

「なんで第5次のアーチャー？」

「気分だ。気にするな。それでは行くぞ！！」

《パチンツ》「固有結界発動」アンリミテッド・フレイド・ワークス『無限の剣製』

「！！！！指鳴らすだけで展開するなよ」

「出来るからしょうがない」

「はぁ・・・」

「フツでは行くぞ？ ご覧の通り貴様が挑むのは無限の剣、剣戟の極地。畏れずしてかかって来い！！」

「テンション高ッ！！ ならば・・・俺はその剣を打ち砕く！！」

side ジョット end

side :

あたりに広がるのは無限の剣・・・

その世界の中心で二人の男が熾烈な戦いを繰り広げていた。

一方は剣を用いてもう一方は炎を灯した拳を用いて戦っていた。

カキンカキンカキンカキンガキインン・・・

カキンカキンカキンカキンガキインン・・・

金属同士のぶつかりあう音がする。そしてたまに剣の折れる音がするが、それでも続く・・・

「フツ 甘いぞジョット。その程度の理想しか抱けないのなら理想におぼれて溺死しろ！！」

「おまえ・・・なりきりすぎ。つーよりお前の剣が折れているんだぞ？」

「戯けが、私自身が剣だぞ？貴様の目は節穴か？」

「ああうざいな……。なあそろそろ終わりにしないか？アーチャ―」

「ふむ良いだろう……」

『オペレーション・イクス』《了解しましたボス。Xバーナー発射
シークエンスを開始します》

と、拳に炎を灯している人が右手を後ろに向けて炎を噴射した。

「ならば私はこれを使おう」

剣で戦っていた人は黄金に光り輝く剣を取り寄せて魔力を込めた。

「行くぞ」

『X・バーナー』『エクスカリバー約束された勝利の剣』

《ドオオオオオオオオンン》

炎と光がぶつかり激しい爆発が起こりあたりは煙に包まれ、それと同時に無限の剣が消えた。

煙の中には二人の人影があった。

「俺の勝ちだな……」

「ああ、そして私のま・け……だ」《ボンッ》

side: end

side: ジョット

「俺の勝ちだな・・・」

「ああそして私のま・け・・・だ」《ボンッ》

はぁ〜なりきりすぎだぜ・・・

心身ともに疲れたな〜

あ・・・ひとつ聞くの忘れてた

自分で確認しても良いけどめんどうなんだよな・・・

ハア・・・。

しょうがないなやるか・・・。

トレース・オン
『投影・開始』

『創造の理念を鑑定し、

基本となる骨子を想定し、

構成された材質を複製し、

製作に及ぶ技術を模倣し、

成長に至る経験に共感し、

蓄積された年月を再現し、

あらゆる工程を凌駕し尽くし、

ここに、幻想を結び剣と為す』

バル・シェベト
杖の子ってか？

知っている武器ならいいのかな？

固有結界発動して確認するか・・・

《パチンツ》「固有結界発動」『アンリミットド・フレイド・ワークス
無限の剣製』

さてと見学、見学つと

・・・・少年見学中・・・・

はつきり言って驚いた。

なんせ、^{レヴァティン}害なす魔の杖や村雨、斬月があつたんだから。

あー！！^{ドン}それと首領パッチソードと魔剣大根ブレードがあつた結構
シユールだったよ。

第2話・主人公の修行（と、いう遊び）（後書き）

バル・シェベト
杖の子

出展作品・ネシャン・サーガ

作 G・E えーこのようなレベルの低い小説を読んでいた
いてる事について、

この場を借りてお礼申し上げます

作 今後の展開についてですが、一先ずエヴァンジェリンと絡ませたいと思います。

G 作者よひとつ聴いていいか？

作 ええ、いいですよ。なんですか？

G 今後、俺は最初の世界に戻るのか？

作 ん？エリナさんに惚れたのか？

G 違うわド阿呆！！

作 わかってるって（笑） で、戻るかどうかはまだ決まってい
いよ。

G そうか……。

作 本気で惚れたのか？

G オイ、才前^ナ嘗メテイルト、消スゾ？

作 ヒィィィ！！！！ すいやっせんっしたー <（――）>

G)はあ・・・、時間が押しているからな、タイトルコールするぞ
作)らじや

作)G)では、PV20,000アクセス越え記念：もしも主人公
が飛ばされた世界がリリカルな世界だったら・・・をどうぞ

PV20 / 000アクセス越え記念：もしも主人公が飛ばされた世界がリリカル

side: ジョット

「お主をリリカルなんかの世界に飛ばしたぞ〜」

は？今なんていったこのハゲ爺

「だからリリカルなんかの世界に飛ばしたんだって
ついでに現在進行形でお主は魔砲のターゲットじゃキラーン」

魔砲のターゲットじゃキラーン、じゃねえー！！！！！！

つてことはまさか

「ああ、原作でいうホテル・アグスタDA ZE」《イエエエエイ
ドンドンパフパフ》

助かったか・・・、何故にそこ？

「それは・・・」

それは・・・なんだ

「適当SA」

適当SA じゃねえよ

さっきまでの雰囲気返せよ

「だが断る」

てんめー、それでも神様かコノヤロー

「うんこれでも神さまですコノヤロー（キリッ

じゃあねー頑張つてねー」

「あ、そうそう。チート能力はそのままだからねー」

はいはい

さてと『想像具現化』でXグロ。ブっと『ボウッ』

「・・・・・・・・・・ヤシューーーーーット!!!!!!」やべっ

二度目のぶつつけ本番『零地点突破・改』

ふいーなんとか間に合ったな。

「大丈夫かい？嬢ちゃん。」

「へ？は、はい大丈夫です。助けてくれてありがとうございます。」

あの、あの「てめーなにもんだ！！それとティアナこの馬鹿、仲間撃つてどうする。」

スバルと一緒に引っ込んでろ！コイツは私が倒す。」

「あのヴィータ副体長そのひー」知ってるがそれとこれは別だ」

でm「だあーもう、おまえらは引っ込んでろ」はい・・・・・・」

「でお前はだれだ？」

「なあ・・・人に名前を聞く時は自分から名乗れって親に教わらなかった？」

「あいにく親はいねえだけど、鉄槌の騎士・ヴィータ」

「すまない。だがヴィータかい名だな」

「う、うるせえっ！／＼そ、それよりお前の名前は何だ？」

「俺か？ んゝ君みたいに名乗るとすれば・・・
通りがかりの旅人ジョット・ルキフェル・アルカディアかな」

「ふざけるなっ！！旅人があんな力持つてるはずが無い！！」

「この世にはありえない事なんて無いんだよ。っと敵が来ましたねえ」

「チイツお前も手伝えよ」

「言われなくても」

side:ジョットend

side:ヴィータ

さつきの男・・・ジョットって言ったか？ アイツの戦い方を見ているんだが舞っているように、
流れる攻撃をしていてとても絵になった。

下手したらアイツはシグナムはやて達よりも強いかもしれない・
・

何故そんなやつが旅人を……。おかしすぎる

「おい！危ないぞ」

「っ助かったぜジョット」

「戦いの最中にあまり考え事するなよ……。死ぬぞ？」

「わかってるよ！！」

それから5分ぐらいたって最後のガジェットをジョットが倒した。

ふう。倒し終わったな……

あとはコイツをはやて達のところ連れて行かないとな……

sideグイータend

作）こんな風になりました。あとキャラのしゃべり方が違ったら教えてください。

G）にしても無謀な事したな。

作）一応リリカルな世界も考えてたけどデバイスがめんどうだから・・

G）どうりでデバイスの音声なしだったのか。

作）そゆこと

G）次回は本編に戻り「時が経つので早いよね。アレから2000年経って・・・」をお送りいたします。

作 / G）これからよろしくお願いします。

G）そういえば俺のしってルキフェルだったのね

作）うん、傲慢のね

G）なんでさ・・・

作）何となくSA

第3話：時が経つので早いよね。アレから2000年経って……

side：ジヨット

あの後ちよつとした確認をしてから2000年ぐらい旅をしてた。

自分の力と意識を少し継承してくれるような人々を探す為に。

そしてそろそろエヴァが吸血鬼になる頃だと思う。

正確に時を計ってないからね。

そろそろ集落に着くかな……。

ん？何か集まってやっているな。ひとまず『パンツ バチバチバチ』
とフードを練成して、

それをかぶって、

「あのー何やっているんですか？」

「お前さんここらじゃ見ない顔だねえ。旅人かい？ 今から魔女が
火あぶりにされるんだとよ」

「魔女？」

「そうだ金髪の女の子でな、ついでにそいつが連れていた人形もな」
ん？人形？チャチャゼロの事か？それと時間が違ったか？ まあい
いか

「ふうん。ありがとな」

さてと人気の無いところに行つて

カードリーダーにカードを挿入して

「変身ッ　　ってか」

『CARD READ：KABUTO RIDER FORM』

一応作動するね

「クロックアップ」『CLOCK UP』

エヴァを助けてついでにチャチャゼロも助けて人気のない森へ行つた

『CLOCK OVER』

「ふう。解除」『DISARMAMENT』

「オイ、才前誰ダ！　ソシテ何デ俺達ヲ助ケタ」

「チャット・コホン。名前を尋ねるときには自分から言えって作つた人に教わらなかった？」

「御主人ガソナ事教エルカヨ」

「ご主人？まあいいや俺はジョットだ」

「ジョットカ、俺八、チャチャゼロダ」

「チャチャゼロかい名だな」

「ケケケ　オ前モソウ思ウカ」

「おいチャチャゼロソイツは誰だ!!」

Side: ジョットend

Side: エヴァンジェリン

私はある集落で火あぶりの刑に処せられたはずなんだが・・・

なぜこんな所に・・・

私のいる場所から火をはさんで向こうにいる奴・・・声からして男か

男がチャチャゼロと話していた

チャチャゼロが話しているのだから、大丈夫だと思うが念のために・・・

「おいチャチャゼロソイツは誰だ!!」

「オ目ガ覚メタカ御主人。コイツハ俺達ヲ助ケテクレタ恩人ダゼケケケ」

「なあチャチャゼロ・・・恩人ならコイツ呼ばわりはやめてくれや」

「悪カッタナ」

「でソイツは誰だ」

「なあ、嬢ちゃん人に名前を尋ねるときには自分から名乗れって親に教わらなかった？」

「私は嬢ちゃんじゃない！！ 悪の魔法使いエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ！」

「ふゝん。いい名だな。だけど悪の魔法使いつて自分で言つてて恥ずかしくない？」

「なっ／＼／＼」

「才前、誰ニデモ言ッテルンダナ ケケケ」

「そ、そんなことより貴様の名前は何だ！」

「んゝ俺は君達の恩人、ジヨット・L・アルカディアさ」

「つな！！コイツがああ『旅人らしくない旅人』とか『指を鳴らすだけで何でも出来る男』

といわれているジヨットだとこんな優男やさしい男なのか

「ほう貴様がああ『旅人らしくない旅人か』」

「あゝそんな二つ名もあつたねえ」

「・・・何故助けた」

「ぱぁどうん？」

「だから何で助けた！！」

「何でって熱そうだったからだけど？」

「ケケケ オモシレーナ才前」

「私はあの真祖の吸血鬼だぞ？怖くないのか？」

「はつきり言っていていいか？」

ああ・・・どうせコイツも私を正義を名乗る魔法使いどもに渡すのだからうな

「ああ・・・言ってみろ」

「幼女に恐怖心なんて沸くか？フツー。それに自分も似たような存在だし」

「よ、幼女って言うなー！！」

「ケケケ 御主人が遊バレテヤガル」

「ん？ちょっと待てどういうことだ私と似たような存在って」

「え？ そのままの意味だけど」

「貴様も吸血鬼なのか？」

「違うよ人外って意味では同じって事」

「どういうことだ？」

「簡単に言つと全平行世界の知識がここに入っている」といいながらジョットは頭を指で指した

ちよつとまで今コイツなんていった？

「なんだと？」

「だから、全並行世界の知識が入ってるの」

「なんだってーーーーー」

「ケケケ オ前八本当ニオモシレーナ」

「そこまで驚くか？フツ」

「き、規格外すぎる」

「ケケケ ナア御主人、コイツト死合シテイイカ」

「ああ・・・いいぞ、ジョット手加減してやってくれよ」

「俺の意見は無しですか・・・そうですか・・・言われずとも全力全壊で行きますよハハハハw」

「貴様は人の話を聞いておったのか」

「いや、全く」

「貴様という奴は――」

「なあエヴァンジェリン『エヴァでいい。』じゃあエヴァ・・・カ
ルシウムもつと摂取したら？」

コイツは――！！！！

「大きなお世話だ！！」

side:エヴァンジェリン改めエヴァend

第3話：時が経つので早いよね。アレから2000年経って……（後書き）

説明書き

カードリーダー：主人公が創ったベルト形の機械。

あらゆるカードの類たくいを読み込む事が出来る。

又、主人公は自分で創ったカードを使っている

使用方法は、カードを挿入するだけ。

又、待機状態にする時は「解除」と言うだけでいい

仮面ライダーカブト：オリジナル作品と全く同じスペック。

DISARMAMENT：武装解除って意味です

チャチャゼロはもつと後にできるはずですが平行世界ということ
勘弁を。

次回「ネギま！の世界での初戦闘が殺人人形キリング・ドールってどうよ」

です。又、次回は9月中になると思われます

第4話：ネギま！の世界での初戦闘が殺人人形へキリリング・ドールってど

なぜか出来てしまった件について・・・

なんでさ・・・

第4話：ネギま！の世界での初戦闘が殺人人形ヘキリリング・ドールってど

side：ジョット

人払いの結界を張って認識阻害、音声遮断もついでに張る。

そしてその結界の中心に別荘を置いた。

そのときに思い出したんだがエヴァが吸血鬼化してから100年経ってた。

だからあんなにも捻くれていたのだろうか・・・。

ダメだな・・・最近原作のことが思い出せない・・・・・・・・・・

閑話休題

「エヴァー、チャチャゼロー準備できたから入ってくれー」

「わかった」

「ワカタゼジョットノ旦那」

「チャチャゼロ、旦那はやめてくれないか」

「ケケケ ダガ断ル ケケケ」

どこで知った・・・

（IN別荘）

「そういえばチャチャゼロ、お前が使う武器はなんだい」

「コレダ」

と言って包丁らしきものを見せてくれた

「OKじゃあ俺も似たようなモノを使おうか」

『あらわれたまえ 顕れ給え《斬月》』

「なんだその剣は」

「これは斬魄刀って言う特殊な刀さ」

「聞いた事無いぞそんな刀」

「そりゃそうさ、この世界には無いからね」

「そうだったな、お前は平行世界の知識があるんだったな」

「ソナナコトハイイカラ、早く死合イヲシヨウゼ」

「ああ、そうだな。では、いくぞキラリング・ドール殺人^{キリング・ドール}人形よ倒される覚悟は十分か」

「ケケケ ソナナモノネー二決マツテルダロ」

キンツキンツキンツキンツキンツキンツ・・・

チャチャゼロすげー。自称チートメンな俺と殺りあえるなんて

「スゲーナ、ソナナデカイモノ振り回セルナンテ」

「ん？普通の日本刀の形にしようか？」

「何！ そんなことも出来るのか！！」

「ああ。んじやましつかりみてな。瞬きなんてするなよ。」『正解
《天鎖斬月》』

「漆黒の日本刀だと・・・」

「マサカ、ソレダケデ終リジャーネーヨナ？」

「まさか。いくぜ？」

「コイ」

ガキインッ

「速くなつたのか？」

「終わつたら説明するよ」

「ケケケ コンナニモ楽シクナッタノハ久振りダ」

「それは・・・ありがたいのか？」

「チャチャゼロ、今すぐ終わらせ」

エヴァ・・・そんなに知りたいのか・・・

「アイサー御主人」

「チャチャゼロ。君に敬意を払って俺の手札を見せよう」

と言いながら俺は顔に手を持っていき仮面を被るようなパントマイムをして虚の仮面を出す

「な、何だ！　そ、その禍々しい仮面は！！」

「これは簡単に言えば（黒崎一護の）心の闇を仮面状にしたもの」

「ソナナノデ、何ガデキルンダ？」

「力の増幅さ。　さて準備はいいかいチャチャゼロ？　いくよ」

「ケケケ　イクゼ」

『月牙天衝』

ドオオオオン

「何て威力だ」

「まあこれでも手を抜いたほうだよエヴァ」

「何！！これでもか！！」

「うん。それよりさチャチャゼロー大丈夫かー？」

「一応ナ」

「それは何より」

「おいジヨット刀の形が変わってからなぜ速くなった」

「あれは刀に靈力・・ここで言う魔力や氣を圧縮して詰め込んだからだと思う」

「ふーん。そうか・・であの仮面はなんだ」

「だから（黒崎一護の）心の闇だよ」

「なんで仮面状に出来る」

「出来るから」

「もう何も言わんぞ」

「いや今言ってるし」

「人の揚げ足を取るな」

「僕が捕らえたのは言葉尻です（キリッ」

「貴様と言う奴はッ・・・」

「エヴァ、前にも言ったがカルシウムを摂れ。そしたら背も伸びるぞ」

「私は真祖の吸血鬼なんだぞ成長するわけ無いだろ！！」

「なーるー」

「ナンカ俺ノ存在ガ空気ナ氣ガスル」

「ごめんチャチャゼロ忘れてた・・・」

「ヤッパリカ」

「人の心を読むなよ・・・」

「何がやっぱりなんだ？」

「ナンデモネーゾ御主人」

「ふーんそうか」

「さてとそろそろ出るよ？」

「そうだな」

「マタヤッテクレ」

「氣が向いたらな」

（in 結界）

「解除するよ」

「わかった」

「ワカタ」

『パチンッ』

「やはりすごいな」

「指を鳴らすだけで結界を展開すること」「お、おい『旅人らしくない旅人』と『闇の福音』が一緒にいるぞ!!」ばれた……。どうするエヴァ」

「攻撃されてから殺す」

エヴァ・・・思考が物騒だよ・・・

「サー・イエツサー」

「少しは緊張感を持たんか!!」

「ケケケ　だが断る（ダガ断ル）」

「お前らというやつは」

「魔法の射手・連弾光の矢50」「千の雷」

「あぶねっ!!　いいじゃん遊んだって!　で、なんで俺は賞金首?」

「それは貴様が集落をひとつ焼き払ったからだろ!!!!!!」

そんな事あるわけ・・・否定できないや。悲しいなあ・・・

「それはお前らがしつこいから森に火を放つたら集落に引火したんだ！」

「嘘をつくな!!」

「ジョットお前阿呆らしい事で追われているんだ・・・」

エヴァがあきれた目で俺を見ている

「あゝじゃあなに、俺が死んだら良いのかい？」

「そうだ!!」

「何をする気だジョット!!!!」

「エヴァ少しの間だが世話になったな」『転送』

「何をs」

ごめんなエヴァ・・・。

「さて正義の魔法使いさん達、俺を殺しな」

「いわれずとも殺るわ!!」「」「」「雷の暴風」「」「」

『時間転移・・・と見せかけて変化』

「やったか・・・」

「ああそのようだな」

「ッシャー!!」

「耳元で叫ぶな!」

「じゃあ報告しに帰るぞ」

撒けたか? フウ・・・そろそろ二代目を探さないとな。

さてレーダーは、とほつほうこの付近にいますか。これは僥倖。

発見。姿は? 世か・・・まあいい。

「その少年。力は欲しくないか?」

「ア、ア、ン? 俺に何のようだ?」

こいつは又そっくりだねえ・・・。

「いや僕の力を継承してくれる子を探していてね」

「で、俺がその子だと？」

「そうそう。理解が早くて助かる」

「ざけんな！　なんで俺が！？」

「何、気に入らなかつたら次代へさつさと継承させればいいのだよ。因みに僕が初代」

「てことは、もし俺が継承したら二代目と？」

「そゆこと」

「一匹狼じゃねえと駄目か？」

「いんや、ファミリーを作ってもいい。ただすぐに潰れるだろうよ」

「何故だ？」

「力が強すぎてみんな怖がってしまっからさ」

「ハンッ　俺にはもってこいだな。よし継承してやる」

「アレ？さつきと態度変わってね？まあいいか」

「やっとみつかったよ。放浪した甲斐があつた。んじゃあ始めるよ？」

「ああ、いつでもいいぜ」

「我が力と我が一部をこの指輪を媒体として彼に継承する」

「其の力と彼の一部をその指輪を媒体として私が継承しよう」

「ここに継承はなされた。以後継承者に苦難が有るときに力を貸そう」

「グウツ・・・なんだこれ？頭が・・・割れる様に痛い・・・」

「良く喋れるなそんな状態で。それ平行世界の知識。色々と高めていってくれよ？じゃあな今度こそ」

『時空転移』

「クソがあ・・・。つたくともないモン継承させやがつてエ。まあいい気の向くままに行うか」

——此処に継承は為された。

——次の世代へと話は繋がる。

第4話：ネギま！の世界での初戦闘が殺人人形ヘキリリング・ドールってど

と、言う事でちょっと無理やり感が否めませんがジヨットとエヴァ達を別れさせて、紅き翼との邂逅に持っていきたかったので……

次回は本当に9月中です

次回「適当に時間転移したら目の前に紅き翼がいるってどうよ……

」

12/31色々追加。

第5話・適当に時間転移したら目の前に紅き翼がいるってぶっよ……（前書き）

今回はナギ視点で行きます

第5話：適当に時間転移したら目の前に紅き翼がいるってとつよ・・・

ナギside

おつす！！ 俺はナギ。紅き翼のリーダーだぜ！！

今から、旧世界にある日本の鍋料理を食べるんだぜー いいだろー

「んっふっふっこいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ

それじゃ早速肉をっ」

「あつ！ おまつ・・・何、肉を先に入れてるだよ！」

詠春、すこしうるせーぞ。

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ。ホラホラ」

どんどんいくぜっ

「バツ、バカ！ まず火の通る時間差とゆうものがあつてだな・・・

まず野菜を入れてだな・・・あー！ちよっ！おまつ

「あゝ うっさい！うっせーぞ、えーしゅん！」

そんな様子にアルはすこし苦笑いで

「フフ……詠春、知っていますよ、日本では貴方のような者を『鍋將軍』と呼び習わすそうですね。」

「ナベ・シヨーン！？」

なんか強そうな感じだ！

「つ……強そうじゃな。」

「わかったよ……詠春。これの負けだ。」

今日からお前が鍋將軍だ。」

「全て任す、好きにするがよい」

「んー………なんか嬉しくないなー」

シヨーンとかゆうソースが旨かった

姫子ちゃんにも食わせてやりたいな

そんな騒がしく楽しい食事中に……

いきなり剣が鍋の近くに刺さって中身をぶちまけられたのだ

しかし詠春以外は具材、主に肉などを確保していた

で、当の詠春はひっくり返った鍋を頭からかぶってしまった。

アッハッハッハッハ・・・じゃなくて哀れ詠春WW

その詠春が怒りで震えていると

崖の上から大声で

「食事中失礼〜〜〜ッ！」

俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！「いっちょやろうぜ」

なんだあいつバカか？

「えいしゅ……むお!？」

「フフフフ・・・」

詠春が鍋かぶつて震えながら笑つてゐる！？これは切れるな・・

「食べ物を粗末にする者は……」

「どーした？ 来ねーのかあ。来ねーならこっちからーい」斬る！

あーあ・・やっぱり切れたよ

「おほ！」

観戦しながら食うか、他の奴らも同じようにしてるし

「お？ 詠春の攻撃凄いでるぜ」

「あの大男やりますよ。見たことがあります」

「なかなか強いな」 『シュンツ』

と、観戦しながら食べてると

何も無いところから男？が二人出てきた。

「アレ？ 時間軸間違えたか？ いやそんなことは起こりにくいでも・
・・・・・」

「ご先祖？ ひょっとして失敗したりした？」

なんかブツブツ言ってるしツッコミを入れてるけど・・・

「誰だお前は！-！」

「その前にひとつ聞いていいか？」

「「「いいぞ（いいですよ）」「」「」

「君達ってひょっとして紅き翼か？」

「「「そうだぞ（そうじゃ）（そうですよ）」「」「」

「oh~ナンティコッタイ・・・初めての・・・・・」

「ちょ・・・ご先祖？無視しないでくれる？」

何か又ブツブツ言い出したぞ・・・ちょっと怖い

もう一人の男は可愛いそうだな・・・。

「それで貴方は何者ですか」

ナイスだぜアル

「んゝ知ってるかどうか知らないけど、『旅人らしくない旅人』って言われてたよ」

「「なっ！！！！」」

「で、俺はその子孫」

「「・・・」」

「え・・・なんで黙るのさ？おかしくネ？」

有名なのか？

「ホイ、一丁あがり！次は誰だゝ」

「そうだ、彼を倒していただけますか？本物かわからないので」

「彼ってあそこの筋肉達磨か？」

「ちょ・・・いくらなんでも言い過ぎでは？」

筋肉達磨 W W W W W

「ええそうです」

「スルーかよ」

「倒したら、コイツを紅き翼に入れてくれねえか？」

「いいですよ」

勝手に決めるなよアル

「え・・・ちょ・・・ご先祖？何考えてるのさ！？」

「楽しそうな事」

「ハア・・・」

苦労してんのなあ男。

「どうしてもやんなきゃ駄目？」

「力の継承されたろうが九代目」

「ハア・・・不本意ながらだが、まあ一丁やりますかね」

「どーしたゝ来ねーのかあゝ。来ねーならこっちからー『パチンッ
ん？なんだ？』」

『コルボ・ダッティオ
決別の一撃』 ドオオオオオオンッ

「ギャー！！！」

いや決別しちゃだめだろ・・それにしてもスゲー威力だぜ。

「「噂通りですね（噂どおりじゃな）」」

「何が噂どおりなんだ？師匠」

「お主は聞いた事無いのか？ 昔、指を鳴らすだけで何でも出来た男がいたという事を」

「ああ聞いた事無いぞ」

師匠、ダメだコイツみたいな目で見ないでくれ

「それにしてもおかしいですね。公式記録では貴方は死んだ事になってるはずでは」

「ん？ああソレ？ 時間転移と見せかけた変化で逃げた」

「時間転移？」

「早い話がタイムトリップ・・時間旅行だよナギ・スプリングフィールド君」

「何で俺の名を？」

あ！ 俺ら有名だからか！！

「お前らの名前なら全員知っているぞ？」

「「なんじゃと！（なんですって！）」

「驚く事か？俺達有名なんだぜ？」

「ナギ、彼は過去から来たんですよ？」

なのに私達の名前を知っているんですよおかしいと思いませんか？」

「言われてみれば確かに・・・」

頼むから師匠、ダメだコイツみたいな目で見ないでくれ

「なんで知ってるんだ？」

俺が聞くとそいつは

「簡単に言うと全平行世界の知識がここに入っている」

といいながら頭を指で指した。

「「バグを通り越してチートですね（チートじゃな）」

「なあゝ師匠！。平行世界って何だ？」

「平行世界というのは・・・カクカクシカジカ四角い（ry・・・とい

「うわけじゃ」

「頭が痛えな・・・」

「へ」

「解っておらんようじゃな・・・まあ解るはずも無いが」

「それはひどいぜ師匠・・・」

「まあスプリングフィールド君は置いておいて・・・コイツを仲間に入れてくれるかい？」

「いいですよ。あの『旅人らしくない旅人』の子孫がいるだけでかなりの戦力が上がりますから」

「なあ・・・その『旅人らしくない旅人』の子孫ってのはやめてくれ。」

「俺はウルキオラ・A・シファーって名前にするからさ」

「なんで今決めたんだ??」

「なぜ偽名なんじゃ?」

「ナイス師匠」

「ゼクト君、俺は死んだ事になってるからね・・・コイツのファミリーネームが俺と一緒にじゃねえ?」

「ああそーゆー事か」

「わかった。アンタを紅き翼の一員にするぜ！　よろしくな！！」

「こちらこそよろしく・・・しなくていいや。うん」

ハア・・・なんだかコイツ変わってんな

第5話：適当に時間転移したら目の前に紅き翼がいるってどうよ・・・（後書き

次回は「詠春との戦い」です来週中には載せたいなーとおもっています

12/31色々と後付で追加。

第6話・詠春との戦い（前書き）

なんでもこうなった・・・

今回もナギ視点です

第6話：詠春との戦い

sideナギ

なんとあの有名な『旅人らしくない旅人』の子孫が仲間になったぜ！！！！

「うつ痛たたた．．．！！！！ お前何者だ！！！！？」 《ヒュンツ》

あ．．．．詠春のこと忘れてた

「危な！！ フフフフ正当防衛成立ってね。一回、侍と戦いたかったんだよねー」 『投影・開始』

ん？なんだその魔法

「『エントウ・ホムラ炎刀・焰』 ってね。

そうだ、青山詠春とやら出来るだけ避けるよ？ じゃないと死ぬぜ！！！！」

エ？イマナント？

ホムラソウエンリユウ
「焰蒼炎流・攻式壺之型：貫く炎」 《ボウツ》

ドオオンツ！

「な、なんだその流派聞いた事無いぞ!!」

詠春が焦ってる!!

「そりゃそうさ俺が二代目だからね」

キンッ!

「なんだって!! 斬岩剣!!」

「しゃべりながらの攻撃ですか・・・ 焰蒼炎流・特式攻守一体之型：乱れ荒ぶる炎」

ドオオオオンッ!!!!!!

スゲー!! 詠春の技を相殺しているぜ!!

「詠春と互角以上の戦いをするとは入れて正解でしたね」

「なあ青山詠春」

「何だ!!」

「まあそうカリカリすんなって。禿げるぜ・・・じゃなくて奥義を出して終わりにしない？」

疲れたし（ボソッ）

禿げるってww ありえるなw

「あ、ああわかった。では、行くぞ！ 神鳴流奥義ツ！！ 百裂桜花斬ツ！！！！」

詠春はアレをだすのか

「ではこちらも！ 焰蒼炎流奥義・番外之型：終焉の炎！！！」

しゅうえんって何だ？

「なあアルゝ しゅうえんってどんな意味？」

「簡単に言えば終りって意味ですよ」

「な！！ それじゃあ詠春は！！」

「大丈夫ですよ 彼の顔を見てください」

んゝ笑っているけど・・・

「ウルキオラは笑ってるぜ？」

「笑っておるようじゃの」

師匠いきなり喋らないでくれよー怖いだろー

「彼は笑っている時は人を殺せないらしいです。 彼も理由は解らないと言っていました」

「殺さないじゃなくて殺せないのか・・・ なら大丈夫だな」

ガンバレー 詠春！！

《ドオオオオオンッ》

煙でよく見えないな……

おっ晴れてきた！ 両方とも立っているな……

「どっちが勝ったんだ？」

「多分ウルキオラでしょう」

「なんでだ？ 影が二つあるのに？」

「立ったまま気絶しておるようじゃ」

詠春カッケーぜ

「まったく何してくれるんじゃこの侍は！！！！ 危つく殺すところだ
ったぜ」

「アル、スゲーな当たってるぜ」

「当たっておるの」

「なんだ俺達の勝敗をかけてたのか？」

「違いますよ そんな事より詠春は大丈夫ですか？」

「ああ大丈夫だぜ。 そこら辺は抜かりないからな。」

ちゃんと回復させておいた。 ついでに暴れないように縛っておいた」

「手際が良いですね」

「よく遭ったからね」

遠い目をしているな・・・

「ん・・・ん！ ここは・・・そうだナギ変な奴いなかったか？」

「クッククック ソイツは俺の事かい？ 詠春君」

「貴ッ様〜！！」

「え、詠春？ ソイツは俺達の新しい仲間のウルキオラだぜ！！」

「今紹介された、ウルキオラ・A・シファーだよろしく。」

で、大丈夫か？ 体のほうは」

「あ、ああ大丈夫だ。 先ほどは攻撃してしまつてすまない」

「まあ気にするな。 なかなか面白かったなしな」

「ところでどうするんだい？」

「「「「何が（何をじゃ）（何をですか）（？）」「」「」

「あそこに転がっている物体のことです」

「「「あ．．．忘れてた．．．（忘れておったの．．．）（忘れてました．．．）」「「「

「はあ．．．。 哀れ筋肉達磨」

本当に哀れだぜ．．．えつと．．．．．筋肉達磨。

「貴方と戦ったのが彼の運の尽きでしょうね」

「そうじゃな．．．」

「一応言っておくが殺してないぜ」

それと邪魔だからテキトーに転移させておくよ」 《パチンツ

》『転送』

ん？ 詠春が頭抱えて「バグか．．．いやチートか．．．なんで．．．なんで」って言ってた。

しよ、正直怖かった．．．．

side：ナギend

第6話：詠春との戦い（後書き）

次回は未定です

ネギま！の世界での主人公の設定

名前：ジヨット・L・アルカディア

英語表記：G i o t t o ・ L ・ A r c a d i a

性別：男

体重：65kg

性格：毒舌、めんどくさがりや、偽善者、やさしい

好きなもの：他人の不幸、甘いもの。又、夢をかなえようと努力するもの。

嫌いなもの：自分の不幸、他人の幸せ、自分と似たような存在

能力：その1・全並行世界の知識。早い話がアカシックレコード。

その2・全並行世界の力（無限）。（死ぬ気の炎や霊力、魔力など）

チート
その3・想像具現化。読んで字のごとく。軽い

すだけで
その4・想像具現化による能力付加で指を鳴ら

大抵のことが出来る様になる

使う武器：ほとんどが想像具現化で創りだした武器。

と炎刀・焰

特に使うのは、デザートイーグルとXグロブ

デザートイーグルとXグロブは原作と同じ。

炎刀・焰は刀語のIfの世界であつた刀。

ぶっちゃけラ。トセイバーと

山。武のボンゴレ匣の一部である小刀との

折衷である。

剣術：焰蒼炎流・・・主人公が平行世界の知識から編み出した流派。

攻守あわせて拾之型まである。特式をあわせると十六までいく。

攻式壱之型：貫く炎・・・その名の通り、貫く技。
ただし死ぬ気の炎などの炎でだが。

守式弐之型：蔽う炎・・・炎により身を隠す技。

攻式参之型：鍛^{ウツ}つ炎・・・炎を用いて鉄を鍛^{ウツ}つが如く相手に攻撃する技。

守式四之型：惑^{ウツ}う炎・・・陽炎によって相手に幻を見せる技

攻式伍之型：猛^{ウツ}る炎・・・我武者羅に突っ込むように見せかけて相手の急所を狙う技。

守式陸^{ロク}之型：？？？

攻式漆^{シチ}之型：？？？

守式捌^{ハチ}之型：？？？

攻式玖^{キュウ}之型：暴^{ウツ}れる炎・・・適当にやたらめったら炎を放つ技。

守式拾^{ジュウ}之型：？？？

特式攻守一体之型：乱れ荒ぶる炎・・・炎の斬撃を四方八方に放つ技。

特式番外之型：終焉^{ウツ}之炎・・・炎が不死鳥を形取り相手にぶつかる技。

新しい型が出てきたら随時追加する予定。
若しくは思い浮かんだら。

る。

備考：エヴァンジェリンには死んだと思われるい

（公式記録で死んだ事になっている為）

エヴァンジェリンと会った時は、某アサリ貝マフ
イアのI世の姿である。

今は何処で何をしているかは定かではない。

名前：ウルキオラ・A・シファー

身長：169cm

体重：55kg

性別、使える技など等はジョットと一緒に。

焰蒼炎流はジョットから直々に教えてもらった。

意識は一応繋がってる。

魔眼などの類い：解析の魔眼（F a t e / s a t y n i g h t より）、

複写の魔眼（伝説の勇者の伝説より）、

神サリエルの命令の瞳邪眼（旧約聖書 エノクの書 より）

輪廻眼（N A R 。 T O より）、

カトブレパスの瞳（瞳のカトブレパスより）

バジリスクの眼

固有結界：無限アンリミテッド・ファンタズムの幻想について

代を重ねることに強くなっていった一族の願望やエゴが固まって出来た代物。

神でさえも気づかないぐらいの物だったが、神に与えられた想像具現化により開花する。

効果は、術者の願っている事や望んでいる事を擬似的に叶える世界を作り出す。

あくまでも擬似的のゝになるので解除すれば、その叶えられていたものは叶えられる前に戻る。

（ネタばれになるが）ゼクトが死んだとされている理由もそれである。

また想像具現化は本来この固有結界から零れ落ちたものである

アンリミテッド・ファンタズム
<無限の幻想 詠唱文>

f my fantom .
I am the bone o

<体は夢幻で出来ている>

nd hope is my blood .
Dream is my body , a

<血潮は夢で、心は希望>

tching fantasm .
Everyone keeps wa

<誰もが追い求める理想>

d shows real .
However , the worl

<だが世界は真実を見せ続ける>

granted .
So , people will

<ならば、人々に夢を>

grant it .
I will always

<私が此処によき夢を>

If the world deny yet,
this hands will never hold any
thing.

<例え世界に壊されようと、この生涯に意味は要らず>

My whole life was,
unlimited phantasm.

<この体はきつと、幻想だけで出来て

いた>

*ちなみにこの詠唱文を考えてくださったのは

解読者様である

呪いについて、精神で何とか抑えていたが闇の魔法を多用しすぎた為悪化した。

想像具現化をつかってても変わらなかったなので、本人は諦めかけている。

姿はアノ時代錯誤な服装で銃刀法違反な方々が出る漫画のウルキオ

ラと全く同じ姿であり、
笑うと少しだが怖い。それでもファンクラブができてしまうのだからいやはやなんとも……。

名前：時渡網吉
トキワタルナヨシ

性別など等スペックはジョット・L・アルカディアと同じ。

しかしジョット＝ウルキオラ＝網吉ではない。

（本編ではそのように書いているが作者の力量不足だけである。）

だが意識は一応繋がっている。

名前の苗字が時渡^{トキワタリ}なのは、時空転移が出来たからという安直な考えから。

アイテム：天空ライオン^{レオネ・ディ・チエーリ}Ver.X
バージョンイクス

ボンゴレという存在を説明するのが
面倒くさいので

主人公が勝手に名称を変えただけ。
この世界にはボンゴレマフィアは無い。
スペックは原典と同じ。

マンテッロ・ディ・フリーモ
一世のマント

上記に同じ。スペックも原典と変

わらない。

主人公のオリジナル技： 死ぬ気の零地点突破・亜

死ぬ気の炎だけを

オリジナルの 死ぬ気の零地点突破・改 が

吸収できるのに対し魔力も吸収出来るように
考えだされたのがコレ。

r・Xグローブ

術式固定、掌握、魔力充填、「術式兵装Ve

本来の術式兵装は体に取り込むが、体の代わりにXグローブ
のクリスタルに取り込ませたもの。

グローブのクリスタルに入れる分魔力の制御がかなり難しく
なる。

しかし、オリジナルの術式兵装よりは安全度が高くなってい
る。

そして、取り込む魔法によって変わるが灯している炎にも変
化が現れる。

雷空炎壮

雷天大壮と大空の炎を色々と捏ね繰り回してつ

くった。

片もない名前。

オリ主専用の術式兵装。ネーミングセンスの欠

開放、炎魔混合、『大空の雷』

大空の属性である調和を使つて無理やり死ぬ気の炎と魔力を併せた物。

技の名前の由来は、大空の属性と千の雷からつけたかなりの手抜き仕様。

雷空焰壮（今命名）

<雷天大壮2>または<雷天双壮>に死ぬ気の炎を混ぜた、

仕様なネーミング。
これまたオリ主専用の闇の魔法。これまた手抜き

ちなみに技の名前の後半がラカンの技っぽいのはラカンの技と似たような感じで出来たから。

キーリブル・アストラペー

『双拳解放、右拳固定「千の雷」、左拳固定「雷の投擲」、術式
ライジンエンソー
統合、炎魔混合。雷神炎槍「巨神殺しの焰槍」』

原作でネギ少年が使っていたく巨人ころし>に死ぬ気の炎を混ぜた代物。

焰雷招来

「巨神殺しの焰槍」の死ぬ気の炎と魔力を解放し、
大空の調和による石化と千の雷の強力な雷撃を浴
びせる。

又、上記の彼ら以外の固体にもそれぞれの特異性がある。
しかし彼らほど特異ではないためその道以外では有名にならなかつ
た。

く37、000アクセス越え記念く 反省会だぜ！！

作、G）読んでくださる方々に感謝を述べさせていただきます

作）と、いうわけで気づいたら37、000アクセス行っちゃってました。

G）これって魔法先生ネギま！のおかげか？

作）十分にありえますね。

G）いや100%だと思うけど・・・

作）えく突然ですがこの物語の主人公の固有結界を出す時の詩の内容なのですが・・・

G）どうした？

作）私が未熟だったので短編としてあげてしまいました。

G）おいおい・・・

作）しかし、題名と内容を別の意味不明な短編に変えました。

G）は？

作）10分ぐらいで出来た。

・・・じゃなくて、色々と迷惑をお掛けしてすみませんでした。

この場を借りて謝罪させていただきます。

G) なぁお前・・・最近謝ってばかりじゃねえの？

作) うん・・・。 自業自得だと思ってる。

G) そうかい・・・で、俺の固有結界の詩はどうなった？

作) うんそれがね、短編として出した時に、解説者様から案をもらったんだけど・・・

G) だけど？

作) 自分で造ったほうがいいのかもしれないけど、貰った案よりうまく出来ないからさ・・・

G) で、どうしようか迷っているのか？

作) うん、まぁ・・・でも、読者の意見も聞こうかなと思ってさ。

いわゆる読者参加型の小説みたいな感じで。

G) ほう・・・で、その心は？

作) 自分にあまり才能が無いから、読者に丸投げです

G) 読者に丸投げです じゃないわー！！

作) 一応原案を載せておくので見てください。

又、意見があつたらメッセージか、感想までお願いします。

G) ったくコイツと言う奴は・・・

作、G) これからもこの作品をよろしくお願いします

Unlimited Fantasm Works

体は幻想で出来ている。(I am the bone of my fantasm.)

血潮は夢で、心は希望。(Dream is my body, and hope is my blood.)

人々は常に幻想を見ようとする。(People are going to always watch fantasm.)

しかし世界は現実を見せる。(However, the world shows reality.)

ならば私が叶えようではないか。(I will grant it.)

それが人々の願いならば (If it is the wish of people.)

私が叶えようその願いを (The wish that I wi

l l g r a n t)

世界が嫌ったその願いを (The wish that the world disliked)

故に生涯に意味は無く (Yet, those hands will never hold anything)

この体は、無限の幻想で出来ていた。 (My whole life was, Unlimited Fantasy Works .)

作)というわけで、解説者様にも指摘されたように最後が丸まるばかりです。

『俺のほつがうまく出来るぜ』ってかたは案を出してください。

期限は9 / 30です。

よろしく願いします

第7話：グレート＝ブリッジ封鎖できm・・・すいません冗談です。

グレート＝

焰蒼炎流を追加しました。

第7話：グレート＝ブリッジ封鎖できm・・・すいません冗談です。

グレート＝

side：ウルキオラ

ラカンとの邂逅を終えてから、ラカンが紅き翼に入った。

簡単に図っばいナニカで説明すると・・・

ラカン襲撃↓俺が撃退する↓ラカン襲撃↓俺が撃退する↓ラカン襲撃

↓面倒だからナギにパスする↓何故か13時間もやりあってどちら
もフラフラ

↓ナギがラカンを誘う↓ラカンOKする

うん。あいつらはやっぱりバカなバグキャラだったよ。

でもさ、何で俺がアイツを撃退しないといけないんだよ・・・

これってリーダーであるナギの役目だろうに・・・

何故か聞いてみたら、

「貴方のほうが強いからです」

ってアルに言われた。

なんだかな〜

閑話休題

今、俺達はグレート＝ブリッジ近辺にいる。

ラカンが紅き翼に入ったとほぼ同時期に陥落したらしい。

そのグレート＝ブリッジを奪還するのが俺達への指令だそうだ。

ハッキリ言って面倒くさい・・・

「そんな事を言わずにしっかりと戦ってくださいね？」

戦略的に重要な場所なんですから」

「はぁ・・・わかってるよアル。それと人の心の呟きを読むな！」

「では、貴方の本名を言ったほうがいいですか？」

「それも困る。俺らが『闇の福音』の襲撃を喰らうことになるから

な．．」

「あの『闇の福音』の知り合いですか。 今度紹介してもらえますか？」

「この戦争が終わったらなー」

「そろそろ始めますよ」

「らじゃ」

と、いう事で今から自分にとっては殲滅であり掃討であるこの作戦が始まりまゝす

~~~~開始１０分後~~~~

「お前紅き翼だな！！ 覚悟しろ！！！！」

「痛いのは嫌いなのでイヤです。」

と、いう事で 鎖せ黒翼大魔<sup>ムルシエラ</sup>」

今、原作のウルキオラと同じ姿です。 なのでもう一丁いきます。

「刀剣解放第二階層<sup>レスレクシオン・セグンダ・エターバ</sup>」

と、いうわけで容姿が悪魔になりましたゝw

「お、お前はな、何者だ!!」

んどこかで聞いた事あるような言葉だな・・・

「俺の事かい？ 俺はただの夢想家さ。 覚え無くていい」

「そんな姿の奴が夢想家なわけが無い!!!! 魔法の射手・連弾火の矢55!!」

「虚閃<sup>セロ</sup>」

ドオオオオン

「ぐふっ」

へっ障壁でなんとか防いだんだ……。戦艦が落ちるぐらいの威力だったのにな

「あんたスゴいな。 だから本気で消してやるよ」

「や・・・れる・もんな・らやって・・・み・ろ」

なんか俺が悪役みたいだな・・・

「ふっ笑わせる。<sup>ランサ・デル・レランパーゴ</sup>雷霆の槍」

ドゴオオン

えぐいな・・・

うん。この技は造物主と戦うまで封印だな。

又は、

「お前が紅き翼に新しく入った奴か！！　喰らえ！！　魔法の射手・連弾光の矢60」

「ぎゃー　いたいですー（棒読み）」

「やったか？」

「ハハハハハ　そのようなもの我<sup>オレ</sup>には効かぬわ！！」

「何！！」

「次はこちらから行くぞ！！　焰蒼炎流攻式玖之型・暴れる炎」

ボウッ

「ぐふ．．　こ．のオレがこ．．んなとk」バタッ

と、こんな感じでやたらめったら暴れまわっていたらアルに声をかけられた

「ウルキオラ．．ですよね？」

何をどうしたら特大のクレーターがたくさん出来るんですか？」

ん？ これぐらいだったらナギも出来るだろうに・・・

「ナギでもこんな事は出来ませんよ」

「人の心を読むなって。 これは平行世界の力を使った能力だよ」

「平行世界の中にはこれほどの威力のものがあるのですね・・・」

「そーゆー事。 ところでアル。」

俺になんか用があつたんじゃないの？」

「ああ思い出しました。 作戦終了です。」

「アイサー やつと終わったー！ さあ寝よ寝よ」

余談だが、ナギは原作どおり敵には『連合の赤毛の悪魔』で、

味方には『千の呪文の男』って呼ばれるようになった。

俺は敵には『連合の黒い魔王』で味方には『焰帝』と呼ばれるようになった。

多分『黒い魔王』は黒翼大魔の事だろう。

『焰帝』って今回炎系の技は一回しか使ってないんだけど・・・

何でだろう

ついでにファンクラブができた事も記しておく。

第7話：グレート＝ブリッジ封鎖できm・・・すいません冗談です。

グレート＝

なんでこうなった・・・。

予定では再来週には出来てればいいかなってはずだったのに・・・

次回はガトウとタカミチとアリカ姫とエンカウントさせると思います。

**第8話：調査する紅き翼（前書き）**

読者  
神よ私は戻ってきた！！

すいません冗談ッス

## 第8話：調査する紅き翼

sideウルキオラ

グレート「ブリッジ奪還から少したつて、

ガトウっていうハードボイルド・・・はやい話が渋いおっさん、と  
タカミチっていう少年が入った。

それで今そのガトウに呼ばれて・・・えとどこだっけ？

「アルー今どこに向かつてたっけ？」

「あなたは、人の嫌がるモノは覚えているのに・・・

本国首都ですよ」

「ほっとけ！　ふうん・・・本国首都ねえ・・・」

「どうかしましたか？」

「んにゃ全く。何の問題も無いよ」

「そうですか」

というわけで本国首都に向かっている。

えーと誰かに会っただけ・・・

誰だったっけか？

んゝ．．．ん！？

どうやら着いたようで。

「来たか。お前らに会わせたい人がいるんだ」

おろ？

ちょうどいいタイミングで来ましたねえ

「マクギル元老院議員！！」

「いや、わしちゃう」

違うんかい！！

爺は引つ込んでろ！！！！

「主賓はあちらのお方だ。ウェスペルタティア王国．．．．．アリ  
カ王女」

あーいかにもって感じですね。

何がいかにもかって？

それを聞くのはちよいと野暮だぜ

って考えてたらラカンが話しかけた。

「気安く話しかけるな下衆が」

って言われてた。

それをみて笑ってたらキツって睨まれた。なんでさ……

#### 閑話休題

アリカ王女に会ってからしばらくして

ガトウが「完全なる世界」だったけ……

すまんもう一度。

ガトウが「完全なる世界」についての驚愕の証拠をみつけたらしい。

そのときナギはアリカ王女とデート。

俺とラカンがバカンスを楽しんでた。

まあ極稀に調査をしたこともあった。

そのときの格好は

『仮面ライダー』の。翔太郎の格好です

タカミチに似合ってるって言われたよ。

話を戻すか。

メガロメセンブリアのナンバー2までが「完全なる世界」という事をみつけたらしい

それで「まじか・・・」みたいな空気になっている。

あのバグキャラ2人もだ・・・

その後ナギがアリカ姫を連れて「完全なる世界」の拠点を潰し、

おまけにメガロの執政官が「コンスル完全なる世界」と繋がっている証拠品まで持ってきた。

いやーナギが詠春に怒られているところは見ものだった。

その後に見つけたものが本物だったから、ナギが調子に乗ってた。

まあそのあと王女に叩かれてたけどなw

## 第8話：調査する紅き翼（後書き）

えーとまだ書き直し途中ですが、

ちよくちよく不定期に真面目に投稿していきます

## 第9話：英雄一転反逆者に・・・

side：ウルキオラ

ナギがアリカ姫を連れて、「完全なる世界」の拠点を潰してから数日後。

俺、ナギ、ジャック、ガトウはナギの見つけてきた証拠を持って

本国首都にいるマクギル元老院議員に会いに行った。

あの爺が知り合いの法務官ブラエトルに頼んで

来てもらうことになっているからだ。

ちなみにアリカ姫はヘラス帝国の第三皇女に会うため別行動をとっている。

「マクギル元老院議員、証拠をお持ちいたしました。」

「そうか、ご苦労だったね…」

「それより法務官は何処に…？」

「法務官は来られなくなっただ…」

「！？なぜ…」

「なあ・・・ナギ」

「ああ。お前もそう思うか、ウルキオラ」

ナギが火属性の魔法を放つと同時に、

あらかじめ創っておいたアレに憤怒の炎を込めてぶっ放した。

「うおっ!？」

「なっ!？」

「ちよっ…おま!」

ハハッw ジャックとガトウが阿呆ヅラして驚いているネ

ジャックはともかくガトウのこの顔はレアだね

マユリと同じしゃべり方に…

「バーカ。よく見てみなおっさん」

「そうそう、偽者だから」

「……………その通りだよ『千の呪文の男』それに『ナバームジュライ悲愴煉獄』」

よくわかったね」

真っ黒クロスケでておいでーってか？

「こんな簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ」

いやその格好で言われても、シリアスな感じが全く無いし・・・

「本物のマクギル元老院議院は残念ながら 既にメガロ湾の底だよ」

「てめえっ！」

ナギを止めるように、えと・・・んと・・・

名前知らないから適当に、戦闘員AとBが立ちはだかった。

そいつごとマクギル（偽）を殺ろうとしたら

「わしだ！ マクギル議員だ。」

スプリングフィールド、シファー、ラカン、ヴァンデンバーグ

奴らは帝国のスパイだった！ 奴らの仲間もだ！ 今も狙われている。軍に連絡をッ……」

「「げ」」

先手を打たれました・・・

やられたぜ。

「君たちは少しやりすぎたよ。」

悪いけど退場してもらおうか」

ナギとジャックと俺とで飛び掛ったが、

結局仕留めることは出来ず、（俺が手を抜いていたからか？）

その後軍の介入により、首都、そして連合を追われることになった。

「タカミチ君たちは脱出できたかな」

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。」

又ツフフ、いいねえ。人生は波乱万丈でなくっちゃな」

「ハハツ W 英雄一転反逆者か。まあ・・・悪くないな。」

だけどこの借りはのしをつけて返さなえとな」

「姫さんがやべえな・・・」

ナギ・・・自分の心配より王女の心配か？

これは本気で惚れたか？

まあ関係無い・・・事無いな・・・

でもまあいいや。

俺じゃないし

この一件のあと俺達は逃れるように転戦し

隠れ家を目指した。

第9話：英雄一転反逆者に・・・（後書き）

フハハハハハハ 見たまえコレg（ry

とこんな感じで日々をすごしています帯人です。

そんな私から皆様へ大事なお知らせがあります

これからは、ほぼ土日祝日に投稿する事になります

よろしく願います

第10話：夜の迷宮って名前は虚夜宮みたいじゃね？（前書き）

サブタイトルが雑ですね

第10話：夜の迷宮って名前は虚夜宮みたいじゃね？

side：ウルキオラ

さて、追われるようになった俺達は

隠れ家に身を潜めた。

そして、今『夜の迷宮』にいる。

間違っても虚夜宮ではない  
ラス・ノーチエス

此処にいる理由は

楽しい楽しいアリカ王女とテオドラ第3皇女の救出をするためさ

お！ ナギが突っ込んでったぞ！！

ドゴオオオオオオン

俺の隣で詠春が頭抱えてる。

俺も行くか、2番槍だーってな

だけどその前に『影分身の術・変化』っと

side：ウルキオラ end

side:ナギ

「「よお来たぜ姫さん」」

「は？」

何で俺が2人も？

「「遅いぞ我が騎士」」

「え？」

姫さんも2人いる！！！！

なんで……

ポクポクポクチーン

わかつたぜ

「「ウルキオラー！！！！」」

お？ 姫さんも怒ってるな

「何！？ あの連合の黒い魔王じゃと！！！？？」

「ん？呼んだか？全くしょうが無いね」

サーヴァント、ヒーロー召喚に応じて参上した。問おう何方が私のマスターか？」

「「「「「さーう あんとつてなんだー！！！！（（じゃー！！！！）（  
「「「「「  
「「「「「

「え？ 違うの？」

じゃあ・・・えーと・・・

メンドイから良いや」

引っ張っておいてソレかよ

「  
「  
「  
「  
「  
オイオイ  
」  
」  
」  
」  
」

「ん？どした？」

「「「「「ん？どした？　じゃないわー！！！！！！！！！！」

「！！！！！！」

「元気が良いね。何か良い事でもあったのかい？」

アッハッハッハ

このやろー!!!

「千の雷」

「え?! ちょ・まゝ冗談だつてbギャ——」

みんな清々しい笑顔だぜ！

side：ナギend

side：ジヨット

みなさんさつき振りですね

ふざけすぎて感電死しかけたジヨットです

まあそんなこんなで隠れ家なんだが……

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！

どんな所かと思えば、掘立小屋ではないか！！」

とのたまったガキが居ました。なので間髪容れずに

「何だ、これが噂の『ヘラス帝国』の第3皇女か！

どんなガキかと思えば、ただのジャリではないか！！」

と言いました

「アッハッハッハッハ ナイスだぜウルキオラ！」

「何だ貴様ら無礼であろう！」

「へっへっへん生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

「うん俺もコレといって無いね。っーかどっちが失礼かな？」

「何い？ 貴様ら何者だ！？ それとどーゆーことだ！？」

ハハッw コレはしっかり言っただろ？ 良いかもな

「あー・・・一応後学のために言っておくけどさ

人に名前を尋ねるときは自分からって教わらなかった？

仮にでも第3皇女なんだろう？ ヘラス帝国のよ。

それに他人のにはあまりケチをつけるのは戴けないぜ？

だが、まあいい・・・気にするな。あんたらにや何の期待もしてないからな

今のは全て戯言だ。

それで俺の名は、ウルキオラ・A・シファーだよ テオドラ皇女」

はぁ・・・柄でもない事しちまったな

「な！？ あの連合の黒い魔王か！！ それで貴様の名は？」

「俺様は『千の刃』のジャック・ラカン様だ！」

「なんじゃと！？ こんな筋肉ダルマが・・・」

ホント失礼だよなコイツ

「なんだてめえ喧嘩売ってんのか！？」

「まあまあ。抑えろジャック。仕方ないさ

礼儀も知らない子なんだから。」

と、言いながらジャックと共に哀れみの視線を送る

「そ、そんな目で妾を見るなー！」

案外コイツって楽しいかも

「なあジャック面白いな」

「ああ面白えな」

ジャックと初めて同じ考えだった。

s i d e ・ ジ ョ ッ ト e n d

第10話：夜の迷宮って名前は虚夜宮みたいじゃね？（後書き）

呼ばれてナントかってやつも浮かんだけど思い出せなかった

それとテオドラの1人称間違えていたので直しました。

なんでわしにしたんだろう・・・。

謎だ・・・。

次回は番外編です

< P V もうすぐで 7 6 , 0 0 0 アクセス行きます記念 > (前書き)

えゝレディース & a m p ; ジェントルメエン

これからもうすぐで P V 7 6 , 0 0 0 アクセス、ユニーク 1 3 , 0 0 0 人行きます記念

もしもネギ魔じゃなくリリカルだったら v e r . 2 をお送りいたします。

つととと、その前に読んでくださる方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。

突き落とされるのは空港火災の最中。

又この話は

P V 2 0 , 0 0 0 アクセス越え記念：

もしも主人公が飛ばされた世界がリリカルな世界だったら・・・

とは違う世界です

それではどうぞ

<PVもつすぐで76,000アクセス行きます記念>

side:ジヨット

「お主をリリカルなんとかの世界に飛ばしたぞ」

は？今なんていったこのハゲ爺

「だからリリカルなんとかの世界に飛ばしたんだって

ついでに現在進行形でお主は倒れる銅像の前じゃキラーン」

倒れる銅像の前じゃキラーン、じゃねえー！！！！

ん？！　　ってことはまさか

「ああ、原作でいう空港火災DA ZE」《イエエエイドンドン  
パフパフ》

やはりそうか・・・、だがよ？何故にそこ？

「それは・・・」

それは・・・なんだ・・・？

「適当SA」

適当SA　じゃねえよ

さっきまでの雰囲気返せよ

「だが断る」

てんめー、それでも神様かコノヤロー

「うんこれでも神さまですコノヤロー（キリッ

じゃあね〜頑張つてね〜」

「あ、そうそう。チート能力はそのままだからね〜」

はいはい

さてと『想像具現化』でXグロ。ブっと『ボウツ』

「その女の子ちょっと待ってな」

「ふえ？は、はい！！」

『オペレーション・イクス』《了解しましたボス。Xバーナー発射  
シークエンスを開始します》

まあボスじゃないんだけどな。

『Xバーナー』

「す、すごい」

スタツ

「さてと名前を覚えてくれるかい？」

「ス、スバル・ナカジマです」

あちゃー・・・

やってしまった。原作Breakですねわかります

「ふうん・・・スバルちゃんか。」

わかった。じゃあスバルちゃん僕に？まって？」

「はい。あ、あのお姉ちゃんがまだ残ってるんです・・・」

「わかった じゃあ探すよ」

んゝこっちに人の気配が有るな。行ってみるか

背中に乗せると

ボウッ

「キレイな炎だー」

「ありがとう 褒め言葉として受け取っておくよ」

飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで回って回って回って回って回ーる

っと

・・・・・・・・しばらく経ち・・・・・・・・

発見！！

しかも又倒れそうなモノに押しつぶされそうなんですけど

デジャビュ??

「全くなんでこうも死にそうな人ばかりなんだよ！

大丈夫k「お姉ちゃん！！！」い「スバル！！！」

最後まで言わせてよ・・・」

「んじゃま道を作るから退いてて」

「デバイスは何処に？」

「コレ」

ヘッドフォンを指す。うそですデバイス持ってません

「へえ変わった形のデバイスですね」

メツチャいい子だこの子

「ではもう一回」

『オペレーション・イクス』《了解しましたボス。Xバーナー発射  
シークエンスを開始します》

右手を後ろにして、左手を顔の前で拳にして

「炎を後ろに逆噴射!？」

《ライトバーナー柔の炎15万FVで固定》

《レフトバーナー柔から剛に変換しつつグローブクリスタル内に充填》

《ターゲットロック・ライトバーナー炎圧再上昇》

《18万・19万・20万FV》

《レフトバーナー炎圧上昇》

《18万・19万・20万FV》

《ゲージシンメトリー》

《発射スタンバイ》

「うおおおおお!!!!」X・BURNER『!!!!!!』「ドゥオオオオン」

「す、すごい」

さつきも聞いたよスバルちゃん・・・

「さて出るよ」管理局です。誰かいまなか？」

あー・・・こっちッス。こっちに居まーす」

フェイトとやらか・・・Jesus

「大丈夫ですか？ 先ほど大きな火柱が二箇所から立ったのですが・・・」

X・BURNERのことですわかります。

「あー・・・それ自分がやりました」

「そ、そうなんですか・・・」

と、とりあえず安全なところまでお連れしますね」

なんかものすごく驚かれていますね・・・

side: ジョットend

<続くかもしれないし続かないかもしれない>

<PVもつすぐで76、000アクセス行きます記念>（後書き）

いやーうんネギ魔の力はすごいよ。

全くこんな作品でももつすぐで76、000アクセス行くんだから。

2回目のX・BURNERのくだりは原典と全く同じにしました。  
間違っているところがあったら教えてください

まあ次回は未定です。

真面目に不真面目にしっかりとだらしなく更新していきます

**PVが纏上りだぜ記念。書くかもしれない物語（前書き）**

どうもみなさん。何故か高校生なのに成長痛が来て苦しんだ作者です。

明日中には最新話が多分投稿できます。

しかしなんで今更……

えーとお楽しみください

PVが纏上りだぜ記念。書くかもしれない物語

side:nobody

「ハア・・・」

とある少女が道路で一人たたずみため息をついた

<タッタッタ>

「やっぱり誰もいないよ！ 急に人が居なくなっちゃった・・・」

辺りの様子を見てきたらしい別の少女がため息をついた少女の元に  
駆け寄って来た

「あの時とおなじだね・・・アリサちゃん」

「そうね・・・」

辺りの様子を見てきたらしい少女、アリサと少女は少し考え事をしているようだった。

「とりあえず今は『力』が無いから逃げよう？すずか」

とアリサが言い、

「うん」

と、ため息をついていた少女、すずかが答えた。

そして手を取り合い走り出した。

そしてしばらく経ち

ずずかとアリサが走っていった方向の先に

スライディングをして煙を撒き散らしながら着地する少女と

信号機の上に降り立つ少女。

余談だが戦いの中では、

煙などを撒き散らすのは得策ではない。

そして、その上空に炎をつかってホバリングしている少年。

<<タッタッタ>>

煙の向こうから二人分の足音が聞こえる

その走っているであろう人に対して、煙を撒き散らした少女が、

「あつ、あの、すみません。危ないからそこでじっとしててください  
い」

「え!?!」「今の声って!?!」

声をかけた少女の声に対して驚く二人。

そして煙が晴れて、驚いた二人が

「なのは？」「フェイトちゃん？」

どうやら空から降りてきた二人はなのはとフェイトというらしい。

「およ？　ずずかとアリサじゃねえか。」

なんだ又あの時みたいに巻き込まれたか？」

「龍司！！！！」「龍司くん！！！」

どうやらホバリング少年は龍司というらしい

ついでに感動の再開みたいな空気になっている。

『スターライトブレイカー』

敵らしきモノはそんなことお構いなしに攻撃を仕掛けてくる。

<ドゴオオオン>

感動の再開？をしている6人に向けて光の奔流が迫ってきた

「あつ！！」「いち早く気づくなのは

「」「あ？・・・あああ！！！！！！」「」「つぎに残りの人たちが

気づく。

そして、龍司が

「二人とも、もう一度化け物と一緒に戦う覚悟はあるかい？」

「ふん。もう一度やってやろうじゃない」

「もう一度やるよ」

「じゃあこれを・・・」

さてと・・・いくぜ？アリサ、すずか

「いいわよ」「うん」

<<<ボウウツ>>>

「」「開匣」「」

「「え？え？え？」」「状況について行けていない、なのはとフェイト。」

「さてと・・・」

んじゃま俺から、すべてを包み込む大空の使者、楠木龍司」

服装がラフな格好から、スーツに変わった龍司

「炎髪灼眼の討ち手、アリサ・バニングス」

髪の毛と目が燃えるように赤くなり黒いマントを羽織ったアリサ。

「闇の福音、月村すずか」

いかにも吸血鬼といった服装となり、赤と黒のリバーシブルマントを羽織るすずか。

「「「さあ、お前の（アンタの）（あなたの）罪を数える（数えて）  
!!!!!!!!!!!!」」」

「「「どういうこと?????」」」まだ理解できない二人

「おい、なのはとフェイト。シールドを早く!!」

「「え？ あっ！ はい」」

「アリサとすずかは炎を練っていてくれ。」

俺が相打ちにして打ち消すから、耐え切ったらぶっ放せ」

「わかったわ」「うん」

これらの会話はすべて早口で行われていた。

「死ぬ気の零地点突破ファーストエディション!!」

龍司がなのはとフェイトのバリアを凍らせる。



《18万、19万、20万FV》

《ゲージシンメトリー》

《発射スタンバイ》

「うおおおおお!!!!」X・BURNER」!!!!!!」ドゴオオオオン

炎と光がぶつかり巨大な衝撃が起こる。

そして・・・

「いくわよ、すずか」「そうだね、アリサちゃん」

『断罪』『千の雷』

「す、すごい」「この二人、本当に大丈夫だろうか

「感心している場合じゃないぞ・・・

早くお前らも攻撃しろよ」

とかなんとか言いながら、攻撃を続けて化け物を倒した小女達。

しかし、戦いは終わってなかった・・・。。。

side:nobody end



**PVが鰻上りだぜ記念。書くかもしれない物語（後書き）**

これから書くかもしれないし書かないかも・・・

まあ書くとしても、一先ずこの物語を終わらせてからですね

もしこんな作者でもかいてほしいという方は感想にてご連絡を。

もしくは、この物語の世界で書いてほしいという作品があったらこちらでも感想にて

鰻上りつてこれで合ってますよね？

間違っていたら教えてくれるとうれしいです。

第11話：最終決戦・・・「コレが俺の切れる手札の1つさ」(前書き)

色々変更。

第11話：最終決戦・・・「コレが俺の切れる手札の1つさ」

side：ウルキオラ

今、テオドラと一緒にアリカ王女？姫？ 姫にしよう

アリカ姫とナギの誓いを見ている。

何故かテオドラに名前と呼べといわれたから、仕方なく呼んでいる

「連合に帝国・・・そして我がオステイア

世界全てが我等の敵という訳じゃな。

じゃが・・・主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？」

とアリカ姫がくすくす笑った。

「ふふ・世界全てが敵

良いではないか

こちらの兵はたったの8人だが最強の8人じゃ」

簡単に言ってくれるね

「今世界は『完全なる世界』に操られておる。

ならば我らが世界を救おう！我が騎士ナギよ我が盾となり我が剣となれ」

「・・・へ。

やれやれ相変わらずおつかねえ姫さんだぜ」

ナギがアリカ姫の前で頭をたれる。

「いいぜ 俺の杖と翼あんに預けよう」

よし決めた。

「テオドラ。俺はこの戦争の間だけアンタの騎士になる。

だからコレをその通りに読んでくれ」

「ん？なにになに？えーとコホンッ

ジョット・L・アルカディアの正統なる子孫ウルキオラ・A・シ  
ファー

汝の知識悉く我が盾となれ、汝の力悉く我が刃となれ」

「ああ、俺の知識と力をアンタにしばらくの間預けるぜ」

「ちよつとまで

お主がああ『旅人らしくない旅人』の子孫じゃと？

あ奴なら死んだはずじゃ……」

「だから違うファミリーネームにしてるじゃん」

「そうかそうか……ってなんじゃとー！……！！！」

「静かにしてくれ……」

となんやかんやで時が過ぎ

映画なら三部作で単行本なら14巻分くらいはいくであろう（ラカ  
ン談）六ヶ月の死闘の後、

ついにやつらの本拠地を突き止め追いつめた

場所は世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部「墓守り人の  
宮殿」

なんか名前が王家の谷みたいな雰囲気纏ってる気がした。

そして俺たちは帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備と

タカミチやガトウ等の連絡を待っていた。

「不気味なくらい静かだな、やつら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

「まあまあそう言ってやんな

俺らが追い詰めたから、奴さん大慌てで逃げる準備をしてんじゃないの？」

「「ちげーねえな！」」

ナギとラカンが俺の言葉に相槌を打つ

「ナギ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」

えーとセラス？だったか・・・準備が整った事を報告しに来た

「それで、あの・・・ナギ殿、ウルキオラ殿」

「ん？」

「俺に何か？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おお？ ああ、いいぜ。それくらい」

「俺もなのか・・・減るもんじゃないから良いか・・・」

カキカキと。

「連合の正規軍の説得は間に合わん、

帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう、決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう。」

「既にタイムリミットだ。」

「ええ、彼らはもう始めています…」

『世界を無に帰す儀式』を…

世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです。」

世界を無に帰すか…神にでもなつたつもりか？」

「ありえるな」

おっと口に出てたようだ。

「よしっ、野郎ども。行くぞ」まあ待てっ」なんだよウルキオラ」

「俺が一番槍になるさ」

「よしっじゃあ任したぞウルキオラ」

「ああ、任された。」

出でよ！！三幻神が石柱！ 善と悪を司りし天空の神！！

オシリスの天空竜

！！

ウ！！！！！！

『CARD READ：SAINT DRAGON THE GO  
D OF OSIRIS』

久々のカードリーダー。

「な！！！！！！」×俺以外の人たちの数

そりゃ驚くわな、神々しいモノがいきなり出てきたら

しかも威圧感がハンパ無いからな

「そしてオシリスの天空竜と俺を融合！」

『CARD READ：FUSION』

「姿が・・変わった！？！？！？」×俺以外の人たちの数

外見の特徴をいうと、全身が赤黒くなり

目が青と赤のオッドアイとなり

髪の毛が黒から白、長さも腰ぐらいまで伸び

背中からオシリスの翼と同じような翼が生えた。

余談だが神聖度と神格度もアップしました。

「行くぜ。超電導波サンダーフォース!!!」

< ∞ α ♀ ° ' " ¥ \$ ¢ £ % # & \* a s h d v g u @ h a s s g e  
a w y f a : : >

今の筆舌に尽くしがたい音と共に3分の2が消えた

「行つて来いナギ」

「あ、ああ!!」

「っしやあ行くぜ野郎共!」

疲れたなさてと・・・

「解除」『DISARMAMENT』

「ス、スゴイです」

「ありがとう。セラスさん」

あれ？セラスさんの顔が真っ赤に・・・何故？

まあこの調子で行けば・・・

ッ！！！！ 何だこのとてつもなく嫌な予感は！！！！

コレは・・・ナギたちの方向か！！

「セラスさん。俺、ナギ達の所に行ってきます

だから後はお願いします！！」

「は、はい！ 了解しました！！ 御武運を」

俺が行くまで死ぬなよナギ達！！

s i d e : ウルキオラ e n d

第11話：最終決戦・・・「コレが俺の切れる手札の1つさ」(後書き)

変なところで切ってスイマセン。

それと詠唱文についての募集を予定より早いですが  
終わらせていただきます。ありがとうございました

次回は、『主人公&ナギVS造物主』ライフメイカーです

早めに出したいです

第12話：ウルキオラ&ナギVS造物主（ライフメイカー）『（前書き）』

解読者様。 詠唱文を考えていただきありがとうございました。

この場を借りてお礼申し上げます。

第12話：ウルキオラ&ナギVS造物主（ライフメイカー）

side：ウルキオラ

んな！！アレは造物主の一撃か！？

「最強防護！！」＜パキインツ＞

チイツ！遅かったか．．

くそまだ来るのかよ．．．

「オシリス召喚 召雷弾」＜パチンツ＞＜シュウツ＞

やはり効かないか．．．

「織天覆<sup>ロー・アイアス</sup>つ七つの・円環」＜パチンツ＞＜パキイン．．パキイン．．  
パキイン．．．＞

アイアスまでもか．．．

「待てコラてめえっ！！！！」

吼えるジャック

「任せな、ジャック」

さっきまでぶっ倒れてたはずのナギが起き上がった

体中から血を流し、フラフラになりながらも目に希望を灯して

「い……いけませんナギ！その身体では……！！」

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかしそんな無茶な治癒ではッ！！」

「30分もてば充分だ」

「ですがッ……！！」

「ふふ、よからう。ワシもいくぞナギ。ワシが一番傷も浅い」

「お師匠・・・」

「ゼクト！たった二人では無理です！」

「おいおい俺を忘れるなよな？」

「ここで奴を止められなければ世界が無に帰すのじゃ。無理でもいくしかないからう」

「え・・・？ 無視ですか・・・？ 酷くね？」

「ナギ待て！奴はマズイ！奴は別物だ！死ぬぞッ。態勢を立て直し

てだな・・・」

「らしくねえなジャック！んなことしてたら間にあわねえよ

俺は無敵の「千の呪文の男」だぜ？俺は勝つ！！任せとけ！！！」

「「俺じゃないのか（わしらじゃないのか）？ナギ」」

「ハハハ そうだったな。」

行くぜお師匠、ウルキオラ」

「うむ遅れをとるでないぞ」

「さてと造物主ライフメイカーよ覚悟はいいかい？」

俺達3人は一丸となって造物主に突っ込んで行った

たしか造物主ライフメイカーはこの世界の奴には倒せない

だからゼクトの魔法は全く効いてない

だけど俺とナギは違う世界の出身だからそれなりに効いている

しかし、俺というイレギュラーのせいかな原典のよりも強くなっている

俺の最高の切り札を切るしかないか・・・

「ナギ、ゼクト！ 少しでもいい時間を稼いでくれ！！！」

「わかったぜ」「わかったのじゃ」

これは俺の希望

I am the bone of my phantom .

<体は夢幻で出来ている>

人々に夢を叶えて欲しいという俺の願望

Dream is my body , and hope is  
my blood .

<血潮は夢で、心は希望>

Everyone keeps watching fantas  
m .

<誰もが追い求める理想>

人は誰しもが理想を追い求めながら生きている

However , the world shows real .

<だが世界は真実を見せ続ける>

So, people will granted.

<ならば、人々に夢を>

I will always grant it.

<私が此処によき夢を>

傲慢かもしれないが俺はソレを守りたい

If the world deny yet, this hands will never hold anything.

<例え世界に壊されようと、この生涯に意味は要らず>

そしてソレをぶち壊す奴は・・・

My whole life was, unlimited phantom.

<この体はきつと、幻想だけで出来ていた>

詠唱し終わると同時に、この空間を光が包む

そして光が収まった後、世界は変わっていた

その世界はさながら星々が輝く宇宙のようで、全てを抱擁する大空のようで、

とても深く静かな海のように感じる世界になっていた

「な！？ 人間が世界を塗り替えただど！？！？」

「ああそうさ。コレが俺達人間の力さ

正確には術者の心象風景だがな・

お前にはひとつだけ見落としていたものが有ったよ、造物主」

「なに？」

「てめえが見落としていたのはな！

この世界に満ちているような人々の希望や夢だ！！

こんなに大切なものを見落としている奴はな・・・

たとえば、ヤハウエサタン、キリストルシファー、

ゼウスハデス、釈迦閻魔が許したって・・・

この俺が許さねえ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「さあ、答えるッ！ 被造物の貯蔵は十分かアアアア!??!?」

造<sup>ライ</sup>物<sup>フ</sup>主<sup>メイ</sup>ア<sup>カー</sup>アアアアア!!!!!!!!!!」

「フ 小賢しいわ!!」

返り討ちにしてくれる」

「おっと・・・」

ひとつ言い忘れていた事があつた」

「なに!？」

「お前は这个世界ではもう何も出来ない」

「世迷いごとを・・・くらえ!!!!」

ッ!!!!!!!!!!

何故だ!何故何もおきない!!!!!!」

「一応这个世界について説明するぜ？」

この世界では術者が望んだ事が実現する

例えば・・・コレは知っているか？」

と言いながら<sup>エクスカリバー</sup>約束された勝利の剣を見せる

「・・・・・・」

「沈黙は知っているとみなすぞ

理解できたか？ 哀れな造物主・・・神に為れなかったモノよ

しゃべる事も出来ないか・・・

まあ、いい

造物主、アンタの敗因はたった二つ。

俺がアンタの敵だった事と、

人々の『生きる』という希望を無碍にした事。

ただそれだけだ・・・」

「・・・・・・」

造物主は黙って何か考えている

「ナギ、魔力は回復したか？」

「ん？ ちょっと待ってる・・・」

おお！！ 回復しているぞ！ スゲーな」

「俺が望んだからな！

よし二人でつかい花火を打ち上げるぞ！！」

「は？・・・ああ、そういうことが・・・

おう！！」

「「行くぜ 契約に従い我に従え高殿の王！！」  
ト・シユンボライオン・タイアコネート・バセク・ウーラニオーノーン  
エビゲーネ・ナチ・ルス・ケラウネ・ホス・ティ・デー・大カラス・カキ・リ・アキス・アストラ・サト

来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆百重千重と重なりて走れよ稲妻！」

「ま、待てっ・・・」

じゃあな哀れな偽神よ

『『千の雷』  
キーリブル・アストラペー

くドゴオオオオン>

「クフハハッハッハハハ」

「んな！！！！アレを受けてまだ立つのかよ」

「しぶてえやつだぜ」

「私を倒すか人間！それもよからう！！」

おいおいなんでコイツは悦んでるの？

「私を倒し英雄となれ！羊たちの慰めともなるう」

ああ・・・神様気取りですか

「だが、ゆめ忘れるな」

笑っていた声が、途端に平常へと戻る

「全てを満たす解は無い。いずれ彼等にも絶望の帳が落ちる」

なぜか黒き閃光が放たれるが、俺達は真正面から受けた

しかしソレが失策だった

俺とナギは、何も受けなかったがゼクトは、黒い閃光により弾き飛ばされる

「師匠うーッ！！！」

「だ、大丈夫じゃ」

「彼の物の様に貴様等も、例外ではない」

「ハッ だったら俺がその例外になってやるぜ」「俺らがだろ？ウルキオラ」

「そうだったな・・・」

「貴様等人間は一体何なんだ！？」

「たとえば、明日世界が滅ぶと知ろうとも

諦めねえのが、人間ってモンだろうが！！」

「そして俺は傲慢かもしれないがその意志を守りたい！！」

こんなモノ終わらせる

「ナギ、後で回復してやるから思いっきり魔力をかき集めろ！！」

次で決める」

「わかったぜ」

と、言いナギは杖にありったけの魔力をいたるところから集める

その魔力が杖を力強さと神々しさを感じさせる槍に変化させる

俺は自分の持っている力を全て創り出した天鎖斬月に込める

「貴様らもいずれ、私の語る「永遠」こそが「全て」の「魂」を救い得る、唯一の次善解と知るだろう……」

「人間を舐めんじゃねえええええーッ!!」

「てめえが否定したモンでも喰らってくたばりやがれえええええええッー!!」

紫電を纏って放たれた槍

漆黒の刀より放たれた虹色の斬撃

それらが黒衣を纏いし神に為り損ねた哀れなモノを貫いた

「へ、へへへ……」

終わったか……やっと終わったのか？

「解除」

俺は、固有結界を解除したと同時に意識が深い闇に落ちていくのを感じた・・・

side:ウルキオラend

第12話：ウルキオラ&ナギVS造物主（ライフメイカー）』（後書き）

主人公のせりふの元ネタは、

ドラマ『西。記』で出てくる香。慎吾演じる孫悟空が敵と戦う時に言う決め台詞、

『おめエのような奴はたとえ神様仏様が許したって、この俺様が許さねエ！さあ答える！天国に行きてエか、地獄に行きてエか！』と

F a t e / S t a y N i g h tの英霊エミヤの台詞『いくぞ英雄王——武器の貯蔵は十分か』  
をあわせて英雄王の部分を造物主にかえたものです

ライフメイカーの口調と、  
主人公がライフメイカーを指す二人称がころころ変わっていますが仕様です。

誤字脱字、もしくは意見は感想にてご一報を。

### 第13話：姫の投獄と救出と俺の放浪

side:nobody

「知らない天井だ」

と、言いながら起き上がったこの物語の主人公ウルキオラ。

「やつとおきましたか」

「アルか・・・どれぐらい寝てた？」

「三日ですね」

「俺以外は？」

「全員いますが・・・。その、ゼクトが・・・」

「やはり無理だったか・・・」

彼は三日程前、

彼が所属している紅き翼のリーダー、ナギとその師匠ゼクトと共に、  
神モドキと戦ったのである。

そして彼の切り札『アンリミテッド・ファンタズム無限の幻想』により

辛くも勝利したのである。ゼクトという犠牲を払い……

そしてナギの方はいくくパンツ>「おいアル！ウルキオラが起きたって本当か！？」

このように元気である。

「ハハハ ナギ良くやっ たな！」

「お前も  
だろ？」

「よせやい照れるじゃないか」

「魔力のほうは大丈夫ですか？」

「ん？は？え．．．ちょ．．．ええええええええええええええええ！！！」

「どうした? (どうしました?)」

「魔力……ではないけどなんか能力が追加されたっぽい」

「は？」

「なんか色々なモノを検索できるように為ったらしい」

「バグキャラからチートキャラに為りましたね」「バグキャラだな」

「うっせえぞナギ お前には言われたくない」

どうやら主人公は異常な存在から非常識な存在に昇華したようだ。

「まあそんなことは置いといて・・・これから式典があります」

「なあ、あの仮面着けていつていいかな？」

「怖がりたいのなら、どうぞ」

「フツ　怖がられるよりは畏れられたほうがいいな」

「どちらと同じでしょうに」

「違いねえ　さてと・・・ハアアアアア・・・ハアッ！！」

顔の前で仮面を被るパントマイムをして仮面をつける主人公。

とてもじゃないが彼の発する氣は英雄というよりは悪者に近い氣である。

式典とパレードが終わった。

余談だが式典の時に仮面を被った彼を見て小さい子供達が泣いてい

た。（タカミチを含む）

しかし、パレードの時もつけていたためテオドラに怒られていた。

数時間後

「なあ、ナギ、アル、詠春、ジャック、ガトウ

俺、放浪しながら修行してくるわ

新しい能力にも慣れておきたいから」

「ああ、行つて来い」

「おう そうだあんたらにプレゼントだ受け取れ」 <ポイツ>

と、いってナニカを投げた

「ん？ なんだこれ」

「俺がつけてる指輪と同じような性質を持つネックレスさ

絶体絶命のときに力を貸してくれる

ただ、コツを掴めばこんな風に<ボウツ>

あ、あとコレ、アリカ姫とテオドラに渡してくれ」

「おう ありがとうな」

「いってことよ」

「んじゃあ達者でな」

side:nobody end

side:ウルキオラ

あれから・・・

『アリカ姫が投獄された』

その知らせを聞いた俺は、アルに聞いた場所へ行った

案の定ナギが悩んでいた

「ナギ、助けにいかなくてもいいのか!？」

焦る詠春・・・いやなんでお前が焦ってんの？

ナギ答えず

「あと1年もないんですよ?」

「わかってるよ、アル」

「わかってるってお前・・・」

「時期じゃないってか？ ナギ」

「ウルキオラ」

俺の言葉に反応してこっちを見るナギ。目には強い覚悟が灯っている。

「なあ、ナギ

今から俺の言うことに素直に従ってくれ」

「あ、ああ」

「今お前がかけているネックレスに魔力を通してみる」

「わかった・・・こうか？」<キュインツ>

「「「「「な」」」」」

「え！？ 指輪になつたぞ！！」

「よし次は、今お前の考えている事を思いっきり

心の中で願え 口に出すなよ」

「お、おう」<ボウ>

「『『ウルキオラと同じ色?!』『』『』」

「何だこの炎?!　　すげー暖かいぞ!」

「ふうん　ナギありがとう

もついいよ　キミの覚悟を見させてもらったよ」

「『『『『覚悟?』『』『』『』」

「ああ、覚悟さ

姫を助けるというね」

「なあ、ウルキオラ・・・」

「なんだナギ」

「正義ってなんだ?」

「おいおい、お前がその問題にたどり着くのはもう少し後だと思っ  
てたぜ

正義か・・・俺は正義なんて無いって思ってる

あっても偽善だ

そして悪っていわれているのは、元・正義だったモノさ

悲しいことにな・・・

だから俺は人々がそれぞれ持っている信念がその人にとっての正義だと思う」

「そうか・・・」

「よく言うだろ『正義の反対は又別の正義』ってさ

だから、正義の味方なんてただの理想に為るのさ・・・・・・・・・・」

「ちゃんと考えているんですね」

「そりゃ知識詰まってるからね」

「じゃあ今日は解散だ」

又時がたち・・・（↑コレ最近多くね？）

アリカ姫処刑当日

処刑場所には、元老院のくたばり損ないと兵隊達がうようよと・・・

「これより、重戦争犯罪人アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの処刑を開始する！」

<ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!>↑うるせえです

「よし行くか」

空に上がって一言

「ハッハッハッハ 見る人がゴミのようだ」<ドオオオオン>

「何をやっているんですか貴方は・・・」

アルに変な目で見られた・・・

だが続けるぜ

「そこ頭が高いぞ！！貴様何様のつm<ガキイイイン>」

「貴様ツ！！よくも我が言葉をさえぎつたな！！ くだばれ！！！」  
<ゴオオン>

早い話がストレス発散さ

となんやかんやで、姫さんが助かった

さてまた放浪するか・・・

放浪は楽しいからね

「とっていた時期がありました」

「誰に言ってるんだ？ ウルキオラ」

「気にすんなナギ ちょっと逃げてただけさ」

「貴様らよくも私を無視してくれたな！！」

と、何百年前と変わらない調子のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを助けてしまいました

第14話：崖の上の少女と俺の放浪癖（前書き）

今回は短いです

サブタイトルが前回と似てしまった・・・

## 第14話：崖の上の少女と俺の放浪癖

side：ウルキオラ

うんアレだよアレ。

放浪中にナギと逢ったから一緒に旅をしていて、（京都での馬鹿騒ぎを聞いて、一緒に京都に行けばよかったと思ったのは俺と読者との秘密だ）

崖から落ちそうな、いや落ちている女の子を助けたら

エヴァンジェリンでした。

「貴様等いい加減にしろよ？ この私を無視するとはいい度胸だ・・・  
クッククク」

「お前誰？」

相変わらず間抜けなナギ君です

「私のことを知らないのか？」

「知らないから聞いているんだ」

「ナギ、この幼い・・・少女は彼の有名なエヴァンジェリンだよ」

「おい貴様！今幼女って言っただろ！？」

「へっちっさいな」

ナギ君失礼ですよ、自分は言い換えましたからね

「ほう どうやら私の恐ろしさを教えねばなるまいな」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ、氷精、闇の精  
闇を従え」

「ハイ、ドーン」<パアンツ>

何だ！？」

「ん？ いや即席巨大クラッカーを使って驚かしただけSA」

「き、貴ッ様ツッ！！」

「ナギ、後は頼んだ じゃあねっ不死の子猫ちゃん」

「なッ！！ 何故貴様がソレを！？！？」

「あッ！ずりーぞウルキオラ！！！！」

逃げ成功。

だがしかし又もやナギと遭遇。

ナギ曰くここでエヴァンジェリンを決着をつけるそうだ

なので俺は見物する事にした。

大方原典通りだった。

違うのは俺がナギに魔力を貸した事。

終わったのでまた放浪した。

・俺ってこんな放浪癖あったっけ・・・

まあいいか

side:ウルキオラend

第15話：そつだ京都へ行こう。（前書き）

誘惑に負けて投稿してしまったよ全く。

ハア・・・OTL

## 第15話：そくだ京都へ行こう。

side：ウルキオラく前回間違えてジヨットにしてみましたすみません>

今俺は京都に来ている。後継者という名の甥っ子を連れて。

なぜかつて？詠春の近況を聞くためSA

「で詠春、結婚したんだって？ おめでとつ」

「子供もできたんです」

「ナ、ナンダッテー」

「って言う割りには驚いていませんよね？」

「いやそれ言っちゃだめじゃん コレ小説だからばれないのに」

「いや、それこそ言ってはいけませんよね？」

全く詠春は真面目だな

「気にすんなって ゴメンな結婚式出れなくて・・・」

「どうせ放浪していたんでしょう？ 私も仲間の趣味を邪魔するほど無粋では有りませんよ」

趣味じゃないですw 癖なんですw

「そうかい 話が変わるけどしゃべり方がアルになってるぜ?」

「協会の長ですからこうなりますよ必然的に」

「そんなもんか?」

「そんなもんです それよりあなたに頼みごとが・・・」

大体わかるけど・・・

「何だ?言ってみ?」

「少しの間私の娘・・・木乃香の遊び相手になってもらえませんか?」

来ると思っていました

「おういいぜ。但し、俺じゃなく甥っ子がな」

「ええ!?俺!?!」

「ああ、そつだ」

「なんでさ・・・」

「わかりました。しかし魔法の事は黙って戴きたい・・・」

「おいおい。英雄さんの娘で魔力タンクだろ？ それは難しいぜ？

あとで必ず知る・・・それでもいいのか？」

「かまいません」

とんだ親ばかだな

「わかった。その任務受けるぜ。コイツがな。はい自己紹介」

「うい。時渡綱吉っす。よろしくされたくないっす」

「ハハハ。君の甥っ子なだけあって似ているね」

「止めてください。気持ち悪い。こんな冷血野郎と一緒にしないで  
ください」

「お前って奴は・・・」

「いやだなあ戯言ですよハハハ」

「では案内しましょうか？」

「「いいですよ（無駄だ）。そんな事しなくても（そんな事）。検索は済んでいるから」」

side：時渡綱吉

「木乃香、こつちにきなさい」

ぼわぁんとした子だな原典どおり・・・

「なあに？お父様？」

「紹介したい人がいる。時渡綱吉って私の友人の甥っ子です。遊んであげなさい」

「いいよ　どんな人？」

「会えばわかる、あと彼は男だから」

「？」

わからないという顔をしているなクッククク

「お父様？」

「この子女の子ちゃん？」

「「・・・」」

え？詠春さん？伯父さん？二人してナニその間・・・  
しかもこいつ人の話し聞いてたのか？

ちなみに今の容姿は沢田綱吉ver. ガキらしいです。知識による  
と。

「「この子は男です（だ）」」

「男だよこれでも」

「うち木乃香って言うんよ、このちゃんって呼んでな〜ツナくん」

「ツナくんって・・・まあいいさ。君はこのかというのか？

ふうん。この響きは君にとってもあってるな。かはは

「は〜ずかしわ〜ツナくん／＼／／／」

「綱吉君。親の前で娘を口説かないでくれるかな？」

ナンノコトダカ？

「すみません。詠春さん」

殺気をぶつけるな詠春さん怖くて殴りそうになっただろ！？

「じゃあこのちゃん何して遊ぶ？」

「じゃあ・・・鬼ごっこにしよう」

フツ　甘いぞこのか。ここ周辺一体は全て閲覧し終えている

「ツナくん足がはやいなあ・・・少し待ってな」

「フハハハハハハ全速前進全速前進全速前進全速前進（ry」

「それは少し違うと思うんよ・・・」

「ん？もうそろそろ時間だな・・・又な」

「ええー今度はつかまえてみせるんよー」

その後なんやかんやで桜咲刹那とやらが途中参加したけど変わらず

に遊びほつけ

川に落ちるイベントも回避して何故かまた出てきた放浪癖・・・

コイツのせいでこのか達と別れることになった

別れの言葉も言わずに・・・一応詠春さんには言っておいたけどねえ？

しっかりと伝えてくれるといいんですが・・・。

side：時渡綱吉 改めツナ

第15話：そつだ京都へ行くつ。(後書き)

次回『ストーリー・スタート原作・開始』です

12 / 31 色々と添削



「ふむ、そうか。木乃香の護衛・・・か?」「ムッ!?そ、そうじゃ」

「桜咲刹那とやらがいるだろうに」「そこを何とか。お願いじゃこの通り」

「しょうがない。ネギには俺の英雄としての存在を黙っておけよ?いいな?」

ついでに、コイツはウルキオラの甥っ子として扱ってくれ。そっちのほうが楽しそうだから」

「ネギの事をなぜ知っておるのじゃ?」「バグだから」「そうか・・・わかったのじゃ」

ダダダダダッ

「来たな」「そのようじゃな」

バアンッ

「とあるドアからマサイ族がこんにちわ」「なんじゃそれ」「すまん言いたかっただけだ」「そうか」

「ちょっと学園長！この餓鬼が担任ってどういつことよ！高畑先生は！？」

「アスナ！落ち着こうや！」

「久しいなタカミチ」

「おひさしぶりですねタカミチさん」

「え！？ウ、ウルキオラ！？それと綱吉君！？」

「ほう俺のことは呼び捨てでこいつは君付けか？え？」

「いや・・・えつと・・・あの・・・その」

「え？この子も知り合い？」あゝこの子が姫子ちゃんか。馴染んでるな。

「どっかで見たことある気がするんやけどなあ」

「久しいな木乃香 何年ぶりになるかな？」

「え？木乃香、こいつと会ったことあるの？」

「ほえゝ？ あ！もしかしてツナ君？」

「そのもしかしてだよ木乃香」

「あ、あの・・・」

忘れられてたネギ少年。

原典での主人公で言わずと知れた変態という名の紳士である。  
重度のファザコンでもある。

正義を盲信させられた悲しい子供だ。

二次創作ではよく野菜坊主や薬味坊主と呼ばれる。  
これからはこの子のことを少年と呼ぶ事にする。

「ふおつふおつふお、すまんのうネギ君。」

「忘れてた、ちよつと学園長！高畑先生どうなるのよ！なんでこの糞餓鬼が担任なの！？」

「いやゝツナ君かつこよくなつたなあ」

「クツクツク　そういう木乃香はあるときからさらに美人になったね」

「いややわあゝはずかしいなあ」

普通に世間話をしている甥と木乃香。

「ごほん！紹介しよう今日から2・Aの担任になるネギ・スプリングフィールド君じゃ。」

ちなみに高畑先生には担任を辞めて貰う。」

「ああ。はい、初めましてウェールズから来ましたネギ・スプリングフィールドと言います」

「なななななな」

どした姫子ちゃん。ナメクジでも出たか？少年の口から。

「ちっちゃいなあ、何歳なん？」

早くも話しかける木乃香。かなり馴染んでいます。

「はい！数え年で10になります。」

違法じゃねえかコレ。

「ほほほ、そうじゃネギ君、うちのこのかとお見合いせんか」「いやわ」「ぐえッ」

どこから出したんだよ、そのハンマー……

「ああ。あとアスナ君に木乃香、ネギ君を君たちの部屋に住まわし  
てやってくれんか？」

[illegible]

嫌々ながらに住まわす事に同意したアスナ。

俺の服装について、「何でウチの学校の男子用制服を着ているの？」と聞かれたので

男子だからと言ったら顔を真っ赤にしていた。木乃香には睨まれた。  
なして？

それから  
・  
・  
・  
・

「それじゃ合図したら入ってきてください」

「ハイハイ。解ったから早く逝きなさい」  
（↑誤字に非ず）

まあここらは原典どおりだったので省く。

「突然ですが、転校生がいます。みなさん仲良くしてあげてください。それではどうぞ。」

「え？嘘、私の情報にないのに！？ぬかったわぁ」

ガラッ      ツカツカツカ

「えーと本日からこのクラスでお世話になる      時渡綱吉です。よろしく」

「「「「カ・・・」」」」

カ？蚊？モスキート？      季節外れもいいとこだn「「「「カツコ  
イイ———！！」」」」

最後まで言わせろよ・・・ったくうつせえn「ジョ・・・」

なんだ次はジョジョk「ジョット———！！！」

つてエヴァ、お前かいいいいいいいい！！！！

「何故貴様が此処に」静かに。後で教えますから、後で「い・・・  
んだ？」

「学園長がテストケースじゃと言って僕を・・・」

ありえるなとみなさんぶつぶつ言い合ってます。  
普段何してんだよ・・・あのぬらりひょんは。

なんとアノ朝倉さんが皆を代表して質問してくれるようです

「えっと・・・最初に名前と身長、体重を」

「時計の時に足尾銅山事件で有名な渡良瀬川の渡で時渡。

徳川5代目將軍と同じ綱吉で、身長は157cmで体重は46kgぐらいですね確か」

わざとややこしくしました。後悔も反省もしません。

「何故女子中に？」

「先ほども言いましたが学園長に。あともれなくついでに高畑先生にも聞いてくれ」

「このクラスのエヴァンジェリンさんとはどういう関係で？」

「僕の父親と叔父が助けた少女」「へえ」

偽造捏造のオンパレードw

「趣味や特技は？」

「趣味は悪戯とガラクタイじり。特技は悪戯と手先が器用な事、かな」

「じゃあそのネックレスも・・・？」「コレの事？　そうだね自作だよ」

キヤーキヤー騒いでます。

だけどメガネかけた子（千雨ちゃんかな？）がぶつぶつと文句を言ってます。

ちなみにこのネックレスは伯父さんがつけていた物だ。一応タカミチもつけている。

又、認識障害が付加されているからコレをつけている奴らにしかわかりません。

なので野菜少年は気づいてません。気づかれると面倒だからな。

しかしタカミチは気づきませんでした。（正確には気づけなかった。）

「じゃ最後の質問、ぶっちゃけ好みのタイプは？このクラスで！？」

やはりここは、王道で行きますか。

「君で」

「ええ!!いや・・・その、ちょっと待って!!」

教室にどよめきが走る。そして数人からちょっとした怒気を感じる。

「戯言だ」

「・・・へ?」

かなり驚いております。怒気が消えました

「お、覚えてるよう!!」

「だが断る」

「ああ、朝倉さん、今授業中なんですけど」

朝倉を追いかけていった少年

とそんなこんなで自己紹介が終わり、授業が始まり。

自分の席はキティの隣だった。

そこで俺は、自分が編曲したくグルメレース>を爪と机を使ってひいた。

ひいた理由はサボる為。効果は零崎曲識が使っていたあの音による支配である

そしてつまらない授業から脱出した。

『CARD READ： INVISIBLE』を使って。

そこで僕は。いや、俺でいいか。

俺は昼寝をした。創造で出したリクライニングチェアに座って。

「……………にいたのかジョット」うるせえな。誰だ俺の惰眠の邪魔をするのは。

「……………」

「ほう。無視とはいいい度胸だな」キティでしたか……………。

「……………」

「マスター。時渡綱吉さんは寝ています」

「寝ているだと?!」

「驚く事じゃないでしょうに」

「起きたのか？」

「君のせいでね」

「私だけじゃないだろう。茶々丸もいるだろ」

「絡繰茶々丸さんは僕の事を配慮して小さな声でしたよ」

「なんで茶々丸はフルネームなんだ」

「なんならキミもフルネームで呼ぶよ？ エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルさん」

「な、何故知ってる？」

「は？」

「だ・か・ら、何故貴様は私の名前を知ってる！？」

「ウルキオラに教えてもらった」

「なん・・・だと・・・？」

「いやだから、ウルキオラ」 「そういう意味じゃない」 「じゃあ何さ？」

「貴様とウルキオラの関係。そして貴様とジヨットとの関係を教える！」

「わかったよ。まずウルキオラは僕の叔父」

「茶々丸。本当か？」 「本当です」

「次にジヨットは、僕のご先祖様さ」

「茶々丸・・・」 「本当です」

「どうしたんだ？ エヴァ」

「本当か？・・・本当にやつは？」

「ああ。生きていた」「何年ぐらい?」「殺されかけてから100年」「探したけどいなかったぞ」

「ランダム転移で逃げたらしいから・・・」「そうか」

「ひとつ聞いていいか?」

「なんだい?エヴァンジェリン・アタナス」「エヴァでいい」「エヴァ」

「貴様はこの呪いが解けるか?」「ちょっと待っててね・・・」

『CARD READ : ANALYZE』

「なんか見たことあるぞ?その機械?を」

「ウルキオラから貰った。間接的にジヨットから貰っている事にもなる」

「いくよー?」「いつでもいいぞ」

『CARD READ : UNCURSE』 バキーンッ

「ククク、アハハハようやくこの忌々しい呪から開放された!例を言つぞ綱吉!」

「名前を呼んでくれるのはありがたいけどさ、すまないが、もうひとつ呪がかかってるぞ?」

「ん? そんなのはどうでもいい。と言うより、本当はお前を呼ぶ為に来たんだ」

「ハイ? ドユコト?」

「まあ、いいからいいから。ついて来い」

「マスター無理強いはどうかと」

首根っこを幼女に掴まれて引きずられる男子中学生ってシニールな光景だよな……

だからせめてもの抵抗でドナドナを歌ったら階段から突き落とされた。

そして

「連れてきたぞ」

『ようこそ! 2 - A へ!』

パーンッ

クラッカーか。伯父のほうがすごいな。うん。

とかなんとか考えていると

「私と勝負するアル」「嫌です」

「なら拙者と」「忍者とは、なお嫌です」「忍者？　なんのことやら？」

目をそらして口笛を吹く忍者。

お、タカミチ発見

「お？　綱吉君じゃないか」

「その様子だと、初日から授業サボったけどばれなかったようですね？」

「そういえばいつ抜けたんだい？」「始まってすぐ」「・・・」

「ま、まあ次回からはしっかり授業を受けてね？　認識障害張ってくるかな？（ボソッ）」

「わかりました」 パチンッ

なんだよその間は・・・とか思いつつもしっかり返事をしながら認識障害を掛ける

「すごいな。僕は出来ないんだよね・・・。

今日午前0時に世界樹前の広場で警備員の顔合わせがあるから」

「わかりました」

なんやかんやで何事も無く無事終わり、暇つぶしも終えて約束の間。

ゆっくり歩いていき広場に到着すると既に結構な人数が集まっていた。

「おお、ちょうど到着した彼が今日からここで警備員をする時渡綱吉君じゃ」

「はじめまして、皆さん。本日から警備員をさせていただく時渡綱吉です。よろしく願います」

「学園長、本当に彼に教師と警備をやらせるのですか？」

「本当じゃよ ガンドルフィーニ君」



第16話：原作開始！+夜の会合 後編！！

side:nobody

ツナの叔父がウルキオラということで、

渋々ながらさがったガンドルフィーニに代わりできたタカミチ。

「君の叔父さんには色々と教えてもらったからね。今度は僕が教えたいな」

と、言いつつポケットに手を入れて構える。

「願望ですか・・・」「アハハハ」

ツナはあの27とかかれたミトンをポケットから出し身に着ける。

「それは・・・ミトンかな?」「さてなんでしょう?」

「それでは、始めッ!」

ボウツという音と共に毛糸らしきもので編まれたミトンが洗練された金属製のグローブに変わる。

又、ツナの額にもグローブと同じ橙色の炎が灯される。

「行くよ綱吉君」 ドンッ

タカミチから高速で飛んできた何かをグローブで受け止めるツナ

しかしそんなことはお構いなしというように続けて打ち出される何か。

それはまるでマシンガンを撃っているような感じである。

それを、全て受け止めたりかわしているツナもツナで驚嘆されている。

「次は俺の番だ」 ボウツ

先ほどより大きい炎を用いてタカミチに肉薄するツナ。

それをかわしながら、何かを撃ち続けるタカミチ。

その激しさに攻めあぐねるツナ。

このままでは埒が明かないと思ったのか、

「あんまり使いたくなかったけど・・・」

と。どこからかサイコロ状の小さな小物入れみたいな箱、ボックス匣と指輪を取り出し、

指輪を嵌めてその指輪に炎を灯し匣に注ぎ込むツナ。

当然そんなチャンスを黙ってみているほどタカミチも甘くなく・・・。

咸掛法という究極技法を発動させる。

ガルウウウツ

箱状のものから出てきたのはなんと小型のライオン。

ただし鬣と尾が炎になっているが。

そのライオンの名は『レオネ・ディ・チエーリ パージョンイクス天空ライオンVer・X』

そして対するタカミチも感掛法を成功させたらしく、纏っている霧  
囲気が変わった。

「綱吉君。コレがウルキオラさんに教えてもらったものだよッ!」

『セロ  
虚閃』

タカミチの握りこぶしから光線が放たれる。

「何ッ!? 虚閃だとッ!?」

驚くツナ。だが冷静に対処する。

「カンビオ・フォルマ  
ナッツ形態変化! モードディフューザー  
防御モード」

『マンテッロ・ディ・フリーモ  
一世のマント』

「それは!! ジョットさんが使っていたマント!!!」

どうにか虚閃を防いだツナ。しかし『レオネ・ディ・チエーリ バージョニクス  
天空ライオンVer・X』は  
匣に戻ってしまう。

「そろそろ終わりにしないか? 綱吉君」

「そうだな」

「ハアアアアアアアアアアアア」

タカミチは氣と魔力を練り上げていく

『オペレーション・イクス』《了解しましたマスター。Xバーナー  
発射シークエンスを開始します》

対するツナは右手を後ろにして、左手を顔の前でグローブのクリスタルをタカミチに向けながら、

拳にして炎を後ろに逆噴射した。

《ライトバーナー柔の炎15万FVで固定》

《レフトバーナー柔から剛に変換しつつグローブクリスタル内に充填》

《ターゲットロック、ライトバーナー炎圧再上昇》

《18万、19万、20万FV》

《レフトバーナー炎圧上昇》

《18万、19万、20万FV》

《ゲージシンメトリー》

《発射スタンバイ》

「うおおおおお！！！！『X - BURNER』！！！！！！！！」

セロ・オスキュラス  
「『黒虚閃』！！！！！！！！」

橙色の炎と黒色の魔力と氣の混ざった光線がぶつかりあたり一面にその衝撃による突風が起こる。

そして煙の中に二人の人影が見えるようになり……

煙が晴れ……

タカミチの首に炎で出来た剣を衝きつけているツナの姿がハッキリと他の人々の目に映った。

「俺の勝ちだタカミチ」

「そこまでじゃ。勝者は綱吉君じゃ」

シュウッ

「ふう。さすがウルキオラさんの甥っ子だね。本気を出しても負けるとは」

「いえタカミチさんが使った技は、叔父の十八番だったので特徴を知っていたから防げたんです」

「ハハハ。そうだったね。まだまだ修行が足りないかな？」「アハハハ。僕も足りないかな？」

と互いに賞賛しあったり謙遜しあったりして。

「そついえば学園長。僕の住むところはどこですか？」

「そつじゃな・・・」「え・・・？まだ決めてなかったんですか？」

「ならウチに来い。綱吉お前なら大歓迎だ」「ん？エヴァの家か。学園長いいですか？」

「フオッフオッフオワシもかまわんぞい。」「学園長！！！」

「大戦の英雄の甥っ子が元・賞金首と同居か。面白そうだな」

「今日はこれにて解散とする」「あ、逃げた」

s  
i  
d  
e  
:  
n  
o  
b  
o  
d  
y  
  
e  
n  
d

## 第16話：原作開始！+夜の会合 後編！！（後書き）

説明。

レオネ・ディ・チエリ バージョンイクス  
天空ライオンVer・X

ボンゴレという存在を説明するのが面倒くさいので主人公が勝手に名称を変えただけ。この世界にはボンゴレマフィアは無い。スペックは原典と同じ。

マンテッロ・ディ・フリーモ  
一世のマント

上記に同じ。スペックも原典と変わらない。

セロ  
虚閃

ウルキオラがこの世界で撃てるように原典のものを改造したもの。威掛法を使用していないと反動により撃てないという制限がついたが、威力は人によるがほぼ原典と同じ。氣と魔力の反発を用いて放つ。反動が大きい為、威掛法をせずに撃つと相手に与えるダメージより自分が受けるダメージの方が大きくなってしまう。

セロ・オスキュラス  
黒虚閃

原典でのウルキオラ・シファアが使っていたもの。

これも改造されている。

威掛法のエネルギーを用いて氣と魔力の反発を無理やり力づくで抑えながら混ぜて放つというすごく簡単な物だ。

氣と魔力の反発を無理やり力づくで抑えながら混ぜて放つため黒く見える。

外伝くつーより新しく投稿する作品の宣伝> (前書き)

タイトルのまんまです。

プロローグをコピペしただけという、超手抜き仕様。

それでもいいという心優しい方はどうぞ

外伝くっより新しく投稿する作品の宣伝>

ん？俺がジョットって奴だが？何のようだ？

私はあの『闇の福音』<sup>ダークエヴァンジェル</sup>。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。

くやっちまったぜ

ヤッチマッタゼ  
第〇話：遣っちまったぜ

んゝここをこーしてしっかりはめて、と

カチリッ——ブウンッ

完成した。

プロトタイプを作ってから、えーと約五年か・・・。

長かったな。

「おい綱吉」

「どした？エヴァ」

「何を作っているんだ？いや作っていたんだ？」

「バグでチートな機械」

「・・・」

「ジト目で見ろな。照れるだろう？」

「最近お前のキャラがわからなくなってきたよ」

「ハア・・・」冗談も見抜けないのかい？」

「チッ で、どんなことができるんだ？」

「何でも」「は？」「だから使いようで何でもできるんだよ」「ナ、ナンダッテー?!?!?!」

「まあカクカクシカジカ（ry」

「ということは、お前ら一族は儀式による知識の継承と血による力の継承をして、

初めて真の力を出せる、と？　しかし、お前は使っているじゃないか？」

「うん。ウルキオラによると、僕はどうやら初代と同じような突然変異種らしい。

でも力の継承はされていないから先祖達の10分の1しか力が無いんだ」

「な！？　タカミチを倒した時の10倍だとッ！！でもってジヨットと同じ？　だから似ているのか」

「そうみたいだね」

「で、その機械をどうするんだ？」

「こつするのさ」

開け異界の扉。我求むは自分の可能性。さあ開け平行世界への扉。さあ開けこの世の真理よ。

ブオンッ——ゴゴゴゴッ——ガチャンッ

「な、なんだこの扉は」

「真理の扉。本当は錬金術を使って出すんだけど、詠唱で出したんだ」

「このバグが」

「さてパラレルワールドの自分の可能性に賭けるよ。そして自分の可能性へ向けて発射ッ！」

「無視か？　そしてお前は何をしているッ！」

「え？　機械を投げた」

ヒュンツ——ズズズズズズ——ガチャンツ——  
——スウツ

「消えた、のか？」

「ああ。さて平行世界の自分よせいぜいもがき楽しめ」

「おいおい」

さてとーどうなったかな？

……。あれ？……。あれれれれれ？

「あるえ……。？」

「ん？　どうかしたのか綱吉」

「いや、送る座標間違えてなんか関係のない一般ピープルに渡っちやった」

「お前は何やってんだーッ！」

「アッハッハッハ。遣っちゃったぜ」

「遣っちゃったぜ、じゃないわー！！！」

「まあ、しょうがないしょうがない。こんなことも偶にはあるさ」

「お前という奴は・・・もういい。寝る」

「あれ？勘ねちゃった？」

ふうん、竜二か・・・でもって大河ねえ・・・。

何をやるうとしている？ハゲ爺。

ラノベと元・エロゲを混ぜるなんて・・・。

まあ、1つの物語だよなそれも。

物語は世界の数＋人の数あるってか？

かはは。実に素晴らしい。

全くもって傑作だよ、本当に。

さてさて、遠藤竜二はどんな物語を作り上げるのかな？

フフフフ・・・

外伝くっより新しく投稿する作品の宣伝>（後書き）

えーまずこの小説へ感想を送ってくださいました、

チェックメイト様。岡崎結弦様。真にありがとうございます。

そしてこの小説はこのままのペースで書き続けたいですがとまった時に、  
逃げるようにしたいです。

まあふざけた論文集のほうはテキストに投稿するので関係ないですし、

絆物語く裏>のほうは、田村さんと談合して書いていますので、  
出来次第ですからメインは一応この小説です。

第17話：エヴァとの勝負<××さん。ネタと主人公の服装を借りました。あ

と、題名にも書いてある通り××さんの<ゼロの使い魔>魔眼を持ちし霸王>の

ネタと主人公の服装を借りました。

××さん。快く許可してくださりありがとうございます。

第17話：エヴァとの勝負××さん。ネタと主人公の服装を借りました。あい

えーと俺は今エヴァと向かい合っている。

エヴァの周りには魔力が集まっていつている。

何故こうなった・・・？

思い出してみよう。てなわけで＜回想・開始＞

「なあ綱吉」

「なんだい？ エヴァ」

「お前、タカミチと闘った時、本気出してなかっただろ？」

「え？何故わかったし」

「お前の先祖とは仲が良かったからな」

「へえー。うん出して無かったよ？ だってあんな正義馬鹿共に手札を見せないよ」

「正義馬鹿、か。よし、私と闘え」

「ヤダ、コワイ、イタイ」

「じゃあ、『マキア・エレベア闇の魔法』を等価交換として教えよう」

「いいよー」

「ノリが軽いな」

「早くやろうぜ」

で、エヴァに別荘とやらに連れ込まれて……。今に至ると。

馬鹿だな俺。

「何をしている！早く用意をせんか」

「あーハイハイ。晴天に坐せ『焰輪丸』」

「ッー！それはジョットが使っていた刀！」

「あーうんそうだね。先祖は『氷輪丸』だけど俺のは『焰輪丸』だから。うん」

ぶっちゃけ氷輪丸の炎Ver.ってところだ。

「炎か……。来たれ氷精、ウエニアント・スピリト　ウス・グラキアーレス・大気に満ちよ。エクステンダントとルンデと土血と土ノケラギネーとルバエ白夜の国の凍土と氷河を  
『こおる大地』」

「飛べない奴には有効な技だよねコレ。だけど俺は飛べるのさ。正  
ダイビャクレエンリンマル解・大白蓮焰輪丸」

「チツ　来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪　『闇の  
吹雪』」

「『焰竜旋尾』  
エンリュウセンビ

「炎の斬撃だけで消しただど!?　バグにも程があるぞ!」

「えーじゃあ……。『憑依・体験・適用』」

「CARD READ: ZERO FAMILIAR SPIRI  
T

「THE RULE OF RIGHT AND THE RUL  
E OF MIGHT OWN DEVIL EYES」

「CHANGE CARD: Yuki - endre oar - l - de  
f unce - de - ampe l ut l i c e

「なんという格好をしているんだお前は!」

「これが、彼の有名なユウキ・エンドリオール・ル・デファンス・  
○・アンペラトリス君の格好ですよ」

「誰だ・・・？」

「平行世界の英雄です。ちなみに彼が行ったのは神殺しです」

「神・・・殺し・・・？」

「ええ。正確には魔神ですが。あと今から使う技は本来は男子に  
使うものですが見逃してください。」

だがその前に、エヴァ・・・。

圧死 縊死 壊死 煙死 横死 仮死 餓死 怪死 諫死 愧死 気死 擬死 客死 急死 窮死 狂死

憤死 病死 爆死 敗死 腦死 頓死 毒死 凍死 徒死 溺死 墜死 忠死 窒死 即死 戰死 衰死 水死 震死 情死 燒死 殉死 愁死 自死 慚死 慙死 慘死 獄死 枯死 刑死 經死

腹下死のうちどれで死にたい？  
腹上死 突然死 転落死 墜落死 中毒死 窒息死 尊厳死 戦病死 戦傷死 衰弱死 心臓死 失血死 自然死 孤独死 感電死 過労死 嘔吐死 安楽死 浪死 牢死 老死 轢死 夭死 悶死 暴死 変死 斃死 刎死

以上盛大にコピゲフンゲフン・・・リスペクトさせていただきました。

「どれも嫌だわ！　て言うより私は死なんわ！！！」

「ふうん。じゃあ、喰らってみな」

『ATTACK CARD: The choice of the milk emperor』

「『乳帝の選定』」

ズドンッ——ヒュウ——ポスッ

まあ音速だからなしょうがないよな。

ジャックだったら『あれ？音が後から聞こえてくるぜパアンチ』とか言いそうな代物だから。

『CARD READ: ALL CANCEL』

パリンッ

よし出るか。ってあれ？

これって一日経たないと出れないんじゃない？

・・・。

・・・。

・・・。

よし『どこぞ。ドア』

カチャッ

うおおうスゲーちゃんと機能した！

さてとソファで寝るか。



第17話：エヴァとの勝負< × × さん。 ネタと主人公の服装を借りました。 あい

軽い番宣？

<ゼロの使い魔〜魔眼を持ちし霸王〜>

主人公と幼女な神さまとエロゲの談義から始まるという、  
前代未聞な始まり方の二次創作です。  
とても面白いです。

関連作品に<魔法少女リリカルなのは〜呼び出された霸王〜>が  
あります。

なので、まだ読んでらっしゃらない方は一度ならず二度三度と読んで  
ください。

最後に。

× × さん、勝手に宣伝してすみません。

ちなみに、英語表記のところは適当でそれらしくみえるというだけで正しいとは限りません。

## 第18話：新技、来る！！（前書き）

家庭教師ヒットマンREB。RN！みたいなサブタイ。  
だがしかし、話にはさして関係がないという謎仕様。

さて、本当は最初に言わないといけないけど・・・  
テストメントさん感想ありがとうございます。

お気に入り件数が125件に達していました。  
読んでくださる皆様、ありがとうございます。

えー、番外編でこんなことやって欲しいという要望がありましたら  
感想にて。

## 第18話：新技、来る！！

「エヴァー約束どおり教えて〜」

「んー？いいぞ〜」

「別荘へ行くぞ」

「そっぴゃ俺も持っていたわ」

「何ッ！？それを速く言わんか！ 早速繋げるぞ」

「なあひとつ言っただい？」

「かまわんよ」

「お前、別荘を何だと思っているんだ！！」

「研究所兼実験室<sup>ラボ</sup>」

「はぁ・・・」

詳しく説明すると、

俺の別荘にはロストテクノロジーやらオーバーテクノロジーがゴロゴロと転がっている。

早い話が、科学の発達は日進月歩？ 何それ美味しいの？

と、いう感じで音進光歩のはやさで発達している。

「なあ。これって」

「御察しの通りUFOだ」

そうなんです自家製のUFOなんです

「全く、お前ら一族は何者だ？」

「えーと、この世界のバグ？」

「そのまんまだな」

「余計なお世話だ。で、見せてくれ」

「よく見て置けよ？」リク・ラク ラ・ラック ライラック、来れ  
深淵の闇 燃え盛る大剣！ 闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焰！  
我を焼け 彼を焼けそはただ焼き尽くす者 奈落の業火 術式固定  
掌握！魔力充？・「術式兵装」『』

『CARD READ : ANALYZE』

「ふうん。こついう術式か」

『CARD READ : COMPLETE』

「よしやってみるか」

「何ッ!? もう出来るのかッ!?」

「えーと・・・」

ウエニアント・スヒトリウス・アヒザワエゾルケネオカーニ・フレット・  
『来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐。』  
スタグネット・コンプレクシオサレーメントウム・フロ・アルマティオーネム  
術式固定、掌握、魔力充填「術式兵装」  
テンベスター・アウストロウサス・テンベスター・フルグリエンス  
雷の暴風

アギリタース・フルミニス  
たしか疾風迅雷だったけ

「な!? ほぼ初見で成功だと?! ありえん」

「ドンドン行ってみよう」

『契約により我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷  
霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻。』  
魔力充填「術式兵装」  
「千の雷」術式固定、掌握

ヘー・アクトラヌー・ダマー・ボウナムネー  
これが雷天大壮か。

「千の雷を・・・」

で、もう一丁

「シニストラ・エヌグサットキーリブル・アストラボクストラ・エヌグサットキーリブル・アストラペードウプレクス・コンプレクシオ  
左腕解放固定「千の雷」。右腕解放固定「千の雷」。「双腕掌握」

タストラパーラ区五ノスル・デユナメナー  
「雷天双壮」

「あの千の雷を二つ……。さすがジョットの子孫だな……。理不尽だよ全く」

「気にするな。気にしたらダメだよ」

「……………」

「エヴァ？」

「……ハッ！ 何だ？」

「いやボーツとしてたから」

「いやちよつとな」

「ふうん。あ、そうだー！」

「どうした？」

「コレって敵の技を吸収する事も出来るんだろ？」

「理論上はな。私は出来なかったが」

「じゃあ俺は自分の別荘にこもるけど、エヴァはどうする？」

「私も行くぞ」

「じゃあ暇つぶしに作った機械で、遊んでて。ハイ、コレ」

「なんだ？コレは」

「ん？ ソイツはParallel 1412って言って平行世界の人達と出会える機械」

「お前はアホか。そんな物作って何がしたい」

「え？ナギさんに会いたくないの？」

「会えるのかッ？！」

「一応。えーと詠唱文は

＜我が最愛の男。ナギ・スプリングフィールドよ。時と世界を越え  
我が元へきたまえ＞でよかったはず」

「何故そうなる！」

「え？違つの？ まあいいやほら早く」

「＜我が最愛の男。ナギ・スプリングフィールドよ。時と世界を越え  
我が元へきたまえ＞」

ブウォオンッ——シュンッ

「ここはどこだ？」

「ナギ・スプリングフィールド・・・」

「あれ？エヴァンジェリンじゃん。封印解除してないはずだけど？」

「コレでも喰らえ『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来れ深淵の闇 燃え盛る大剣！―闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焰！ 我を焼け 彼を焼けそはただ焼き尽くす者 奈落の業火』」

「うおういきなり何しやがる」

ドオオンッ

ズガガガアンッ

ドゴオンッ

うん。ハチャメチャバトル。

えゝとまず『影分身の術』



バアンッ

又失敗か……。だがもう少しだな。さすがチートボディ。

約一時間で完成に近づくとは。

「もう一回頼む」

「行くぜ『千の雷』」

「『死ぬ気の零地点突破・亜』、術式固定、掌握、魔力充填、『術式兵装Ver・Xグロープ』」

キユイインッ——ジジッ——ボウッ

完成した、か……。

今の俺の状態を表すとXグロープに灯している炎が、大空単体から大空と雷の混合で

額の炎もそんな感じだ。

そして、原作のネギと同じような感じになっているが、雷化は出来ないようだ。

んゝ雷空炎壮とでも名づけるか

「『変化』 さあこい。今度はコイツでいくぜ」

「喰らえ！！ 開放、炎魔混合、『大空の雷』」

「ハアアアアアアアアアアアアアア！！！！ 月牙天衝！！！！！！！！！！」

「あれ？コレ俺の負け？やべえ『大空の雷』パネェっす。 アベシ」

ボンッ

「すごいなコレは。 エヴァの所へ報告しに行こう」

スタスタスタスタ

「おいエヴァー出来・・・た・・・ぞ・・・？」

「助けてくれ綱吉！！」

「フヒヒ 幼女！幼女！幼女！」

「お前、誰だ？」

いま、俺の目の前にはエヴァに跨った男？（まあ変態だな）がいる。  
俺は知らない。こんな奴には会った事もないのだがね？

だけどナギなんだよな。

「俺か？俺は所詮転生者だよ」

「そうか。『死ぬ気の零地点突破・亜』、キラブル・アストラペー左腕解放、キラブル・アストラペー左拳固定「千の雷」。右腕解放、左拳固定「千の雷」。キラブル・アストラペー「双拳掌握」

『雷空焰壮（今命名）』

「行くぜナギさんの偽物。喰らってみな。『双拳解放、右拳固定』キラブル・アストラペー千の雷」、左拳固定「雷の投擲」、術式統合、炎魔混合。ライジンエンソウ雷神炎槍  
「巨神殺しの焰槍」

「『千の雷』」

うわまんまナギだわ・・・特に思考回路が。

「あまり見せなくなかったけど死ぬ気の零地点突破・ファーストエ  
ディション」

パキインッ

「千の雷が凍っただとツ?!」

「止めだ！ ナギさんの偽物！！『焰雷招来』!!!!」

ズガガンッ

「そのゴメン、エヴァ。失敗だったよ」

「そのようだな。だが『闇の魔法』の改良は成功したのだろうか？」

「さっきの奴な」

「そうか。それは賞賛に値するな」

「いや、それほどでも」

「よし帰るか」

「え？ちよ、スルーっすか？酷くね？」

「ええい。うるさい」

「うわ・・・拗ねた」

にしても何だったんだ？あのナギもどきは。調べておく必要があるな・・・。

## 第18話：新技、来る！！（後書き）

Parallel 1412

読み方はパラレルキッドまたはパラレル1412。オリ主が遊びで作ったもの。

平行世界の人たちと会うことが出来る。  
なぜか、今回はバグがあったようだが・・・。

### 死ぬ気の零地点突破・亜

オリジナルの 死ぬ気の零地点突破・改 が死ぬ気の炎だけを吸収できるのに対し、

魔力も吸収出来るように考えだされたのがコレ。

### 術式固定、掌握、魔力充填、「術式兵装Ver・Xグローブ」

本来の術式兵装は体に取り込むが、体の代わりにXグローブのクリスタルに取り込ませたもの。

グローブのクリスタルに入れる分魔力の制御がかなり難しくなる。

しかし、オリジナルの術式兵装よりは安全度が高くなっている。

そして、取り込む魔法によって変わるが灯している炎にも変化が現れる。

### 雷空炎壮

雷天大壮と大空の炎を色々と捏ね繰り回してつけた。  
オリ主専用の闇の魔法。ネーミングセンスの欠片もない名前。

開放、炎魔混合、『大空の雷』

大空の属性である調和を使って無理やり死ぬ気の炎と魔力を併せた物。  
技の名前の由来は、大空の属性と千の雷からつけたかなりの手抜き仕様。

雷空焰壮（今命名）

<雷天大壮2>または<雷天双壮>に死ぬ気の炎を混ぜたこれまたオリ主専用の闇の魔法。これまた手抜き仕様なネーミング。

『双拳解放、右拳固定「千の雷」<sup>キリブル・アストラベ</sup>、左拳固定「雷の投擲」<sup>ライジンエンソウ</sup>、術式統合、炎魔混合。雷神炎槍「巨神殺しの焰槍」』

原作でネギ少年が使っていたく巨人ころし>に死ぬ気の炎を混ぜた代物。

焰雷招来

「巨神殺しの焰槍」の死ぬ気の炎と魔力を解放し、大空の調和による石化と強力な雷撃を浴びせる。

第19話：コント：＜エヴァの家を茶々丸と俺の二人で一夜、丸々空けて．．．＞

最後のほうだけがコントというふざけ具合。

第19話：コント：＜エヴァの家を茶々丸と俺の二人で一夜、丸々空けて．．．＞

さあやって参りました、超さんとハカセの研究所。

お二人に聞きたい事が有ってやって来ました。

．．．．というのは戯言で。

実際は、超と何故かいた絡繰に拉致られた。

「なに。初めての時間跳躍に成功した人の■■■に教えを請いたくてネ」

「嘘だ！」

「ひぐ。しネタは未来で聞き飽きたヨ」

と、どうやら未来の俺を知っているようで。

証拠は？と聞いたら

「コレでいいアルか？」

と、俺より前の人たちが改造しまくりった大空のマーレリングを見せてきた。

ちなみに、ああソレいらなくなったからやる。というものすごく簡単に軽く渡されました。

ついでに具体的に何処を改造したかと言えば、まずリスクなしで平行世界への自分にリンクできるようにした。

次に、天候を操れるようにした。雪は除くがな。

最後に、継承者はリング自身を選ぶのではなく俺が選べるようにした。

未来の俺と知り合いという事は俺たちの正体を知ってるのか……

「あ、そうそう。俺たちの正体、エヴァには内緒にしてくれないか？絡繰も」

「なんでアルか？」「何故ですか？」

「だって面白そうじゃん」

「そう力」「そうですか」

「な、何だよ！　そ、そんな頭の残念な子を見るような目で俺を見ないで！」

「「・・・」」

「え？無視ですか？え・・・ちょ・・・酷くネ？」

「綱吉。君に頼みがあつて呼んだアル」

「呼んでねえじゃん。拉致ったじゃん」

「君のその知識を茶々丸のグレードアップに使いたいネ」

「・・・スルーかよ。まあいいや。で、茶々丸ってロボット？それと、どうグレードアップさせる？」

「いやガイノイドネ。感情を持てるようにするアル」

「ほうほう。科学者が夢見てる奴ね。いいねー乗ったぜ。ちよつとまってる検索するから」

『さあ検索を始めよう。キーワードは<ガイノイド>、<感情付与>、<オーバーテクノロジー>』

<ロストテクノロジー>』

「ほうこれはスゴイな。よし、早速取り掛かるぞ」

「わかったネ」

1日後。

「……で、出来た(ヨ)……」

「流石、森羅万象を知る男ネ」

「言わないでその二つ名……呼ばれるとイタタタだから」

そう。二つ名が増えてた。

さっきの『アカシック・ノウリッジ森羅万象を知る男』や『ドリーマー空想家』。ティーンエイジプリズン『暴動幻影』マシンガン『渦状  
フラクタル』スパイラルコラプション『螺旋乖離』など付けられてた。

つーかうしろの3つには覚えが無いんだが……

大戦の時に伯父が付けられた『アレ？何であの少年に魔法当たんな  
いの！？』、

『何！？ 管理局の白い魔王ならぬ連合の黒い魔王だと！？ 貴様  
謀ったな！……』

と、いうふざけまくってる方がよっぽどマシだったよ・・・。

つーより何故管理局の白い魔王知ってんだよとツツコミを入れたことを今でも思い出す。

「でも、何で『森羅万象を知る男』なんですか？」

「いやー一回、伯父が預言したのを冗談で預言書にまとめたら悉く的中しちゃって・・・」

「「・・・」」

「んうんうう・・・」

「あ、絡繰さん起きたんだね。調子はどうだい？」ハイ。逃げまじくたとも

「異状は見当たりませんが・・・」

「「「どうした(ネ)?」」」

「時渡綱吉さんを見てると・・・// //」

「な、なあこれって成功か?超・・・」

「い、一応成功アル」

「じゃ、じゃあエヴァのところへ帰るわ」

「アイヨまたネー」

てなわけで帰っているんだが……

絡繰さんが……

「茶々丸とよんでください／＼」

と言ってきて、うん。なんか知らないところで原典から乖離しちゃいましたテヘツ

うわ痛い何をするやめ……ギャー!!!!

神様の精神攻撃！ ツナの精神にカンストのダメージ!!

へてめえハゲ爺何しやがる!!

へこの前の仕返しじゃフォッフォッフォッフォッ

へぬらりひょんみたいな笑い方しやがって。ってそうだ聞きたい事がある

「なんじゃ？」

「他の平行世界から、転生者や憑依者って呼ぶことが出来るのか？」

「一応できるが、何故じゃ？」

「変態が呼び出されちゃって」

「ああアイツか。他の平行世界の神が手違いで送ってしまったらしいぞ？」

「なんで教えてくれなかった！」

「面白そうじゃから」

「ハイハイ、そうですか。ああそつだ。又何か新しい世界創ったろ？」

「おう」

「今度遊びに行きたいんだが」

「行きたい時に呼んでくれ」

「アイサー。んじゃコレで」

「あいわかった」

「「ただいま帰りました」」

「貴様ら何処へ行つてた!!」

「え?それはねえ・・・言えないよね茶々丸?」

「え?そ、そうですね／＼」

「貴様私の従者に手を出すな!」

「言つのが遅いよ。出しちゃた」

いやー慌てるエヴァ最高。

「なに―――!」

顔が真っ赤になるエヴァ

「そ、それは本当かッ!? 茶々丸!!」

「ほ、本当です／＼」

まるでア。ジャ。シ。の勘違いコントを見てるようで面白い。

「確かに。茶々丸に感情を付与させただけだからな」

「なん・・・だと・・・? お前は紛らわしい言い方をするな―――」

と、終始顔が真っ赤な茶々丸とエヴァでした。

第19話：コント：＜エヴァの家を茶々丸と俺の二人で一夜、丸々空けて．．．＞

次回は番外編＜PVがアレ？なんか勘違い？＞です

## 第20話：アルビレオ・イマとの密談。

いや、うん。

目の前に金髪ロリババ『タンッ』・・・金髪幼『タンッタンッ』・・・  
金髪少女が仁王立ちしている。

言い換えたのは、断じて包丁が飛んできたからとかいうちやちな理由じゃねえ。

まあともかく。我が家の主はご立腹のようで・・・。

「さて貴様は私に黙って何をしていた？」

やべえどうしよう・・・

心当たりが有りすぎてどれがキ『ダンッ』・・・チッ』・・・エヴァの逆鱗に触れたのかわからない。

てか、今エヴァ舌打ちしたよね？しかも今飛んできたのはフライパンだぞッ！？

んーなんだろう・・・なんだっけ・・・。

てなわけで回想開始！！

いやーもうね何がなんだかサッパリね。

うん。この迷路無理面倒くさすぎる。てなわけでアルさんの気を探して……

探して……

あるえ？何があった？アルさんの気が感じられないんだが……

『さあ、検索を始めよう。キーワードは＜アルビレオ・イマ＞、＜紅き翼＞、＜居場所＞』

へー今はクウネルか……。

さてと手紙を書いて……

『転送』——パチンッ

今度は自分が

『転移』——パチンッ

シュンッ——スタッ

コレがワイバーンか。でけえなオイ。

グルルウウッ

「アッアッン？ やんのかゴラッアッ？」「↑ド○○ゴ○○ボー○○のセ○○  
みたいに

ブンブンブンッ

「じゃ、通して」

「何やってるんですか？綱吉」

「ん？ようつアルさん」

「ようつアルさんではなくてですね、何故ここにいるんです？」

「そりゃ、カクカクシカジカ四角い（ryだからさ」

「カクカクシカジカ四角い（ryだからですか。面白そうですね」

「だからさ、邪魔しないでね？」

「いいですよ。そのかわりといっでは何ですが手伝って欲しい事が  
ありまして・・・」

「ん？どんなものだ？」

「あなたたちの半生を蒐集したいのですが・・・？」

「いいよー。まあ楽しいものではないぜ？」

「それでもです」

蒐集したはいんだがこの人、俺の黒歴史やトラウマだけ口に出てフフフって笑うのな。

初めて会った時からかなり性格がひどくなった気がするよ・・・

「いやーそれほどでも・・・」

「褒めてねえ」

「そうでしたか。そうそう。コレに書いてあるのですがウルキオラの呪いって何ですか？」

「知らないなーってやべもつこんな時間！？じゃあそろそろ帰るわ。キティが怖いし」

「わかりました。ではキティに愛していると伝えてください」

「俺に死ねと？」

「いや、そういう意味ではなくてですね・・・」

「大丈夫わかってるさ」

「そうですか。では、私の事もクウネル・サンダースと呼びください」

「「では」」

『転移』——パチインツ

ちなみにフランクに話してたのはアルさんがいいですよフフフって  
言ってくれたから。

回想終了

---

ハッ！ コレだ！！

転送した手紙が届かなかったってことか

「えー今日はちょっとしたゲーム感覚で図書館島の最深部へ行って  
参りました」

「ほう・・・で？」

「そこでクウネル・サンダースさんに会いました」

「だれだソイツは」

「僕は知りませんが、僕の叔父の知りあいらしいですよ？」

「紅き翼のメンバーとかか」

「さあ？　それで、その司書さんからの伝言です」

「内容は？」

「キティ、愛してる」

「は・・・？」

「キティ、愛してる」

「ほう・・・命知らずな奴だなソイツは・・・」

「えと、いや、あのエヴァンジェリンさん？」

「なんだ綱吉」

「いえ、なんでもないです」

「言えねえ！！！！こんな空気でクウネルの正体ばらせねえ！！！！」

「てかやっぱり届かなかったたのかよオオオオオオオオ！」

「マスター、先ほどマスターの部屋にてこんなものを見つけました」

そ、それは！ 俺が転送した手紙！！ ナイスだぜ茶々丸ウウ！！！

「む？何々？ ちよいと野暮用で図書館島に行ってきます。探さないでね？ B Y 綱吉 だと？」

「なあ茶々丸。それってエヴァの部屋の何処で見つけたの？」

「ベッドの上ですが・・・？」

「やってしまったー・・・」

「何がだ？」

「いやさ、エヴァって女の子じゃん。だから女の子が寝てる部屋はあまり覗きたくなって・・・」

「だから投げ入れたと？ ……でも綱吉だったら大歓迎なんだが  
／／／（ボソツ）」

ボソツと何か聞こえた気がするけどなあ……。空耳、幻聴の類い  
だろう。いや絶対そうだ。

「いや、転送した」

「やっぱりバカだる貴様」

「馬鹿ですけど・・・何か・・・？」

「おい一発殴らせろ」

「ohゝ元気がいいねえ。何かいいことでもあったのかい？H A H A H A H A H A」

忍野さんですねわかります。

もちろん、嘲りを込めたとてもとてもむかつくような笑いですが何か？

「■・■・■　！！」

「さてと逃げるか・・・。てなわけでえ、Bダッシュ！！！」

「待たんかコラー！！！」

「ハッハッハッハ。だが断る」

「断るなあっ！！！」

と、某世界最速な男も真つ青な速さでリアルな鬼ごっこをした。

どうせなら「アハハゝ、ウフフゝ」と走りたかったんだがな・・・。

ちなみにチャチャゼロ、茶々丸姉妹(?)はというと・・・

「ああ、マスターったらあんなに楽しそうに」

「オイオイ。綱吉が弄クツテカラ妹ノ様子ガ変ニ為ツタゾ？」

いや最近はずっとそうだから。俺が弄くる前からそうだから。

第20話：アルビレオ・イマとの密談。（後書き）

作者）ああ鬱だ寝よう。

ツナ）いつそ永遠の眠りについちやえYO！

作者）お前ってそんなキャラだったっけ？

？？）気にしちゃ負けだぜ？

作）てめえはすっこんでろ竜二！！

竜二）うつす。さーせんwまじさーせんwまじさーせんつしたwww

作者）異様に腹立つわー

ツナ）うるせえ早く永眠しやがれ

作者）あ、てめえ言ったな

ツナ）言っただけどそれがどうした？

作者）ちと面かせや

ツナ）おういいぜ

竜二）馬鹿共は放っておいて次回はこれまた未定っす。

コレ読んだついでに俺が主人公の<やつちまっただぜ>も読ん  
てくれよな！

第21話：最近話が全然進んでないよね？・・・あれ愚痴じゃん。（前書き）

みんな知ってた？ノックって回数ごとに意味があるんだって。

二回でトイレに、入ってますか？

トイレに、入りますよ？

四回で部屋に、入っても宜しいでしょうか？

部屋に、入らせて頂きますよ？

（面接時では、2、3回が好ましい）

てなわけで、ノックする時は気をつけてね？

第21話：最近話が全然進んでないよね？・・・あれ愚痴じゃん。

終わっていた。

図書館等でのイベントが終わっていた。

学えんゲフンゲフン・・・ぬらりひょんを弄れずに終わってしまった。

そう。だから俺は・・・。

俺は

「なあエヴァ。ちよっくら妖怪退治に行ってくるわ」

「ん・・・？ 妖怪・・・？今は昼だぞ？」

「え・・・？ いや、ぬらりひょんを退治しに行こうかと」

「ほどほどにな」

「退治じゃ足ンネエナ。切り刻ンデ来イ。ケケケ」

「御武運を」

と家主からの承諾とチャチャゼロと茶々丸さんの声援を得たので討伐に行く。

まず、自分の別荘に行き心象世界から祢々切丸を取り出す。

次に、取り出した祢々切丸から情報を読み取り、奴良リクオの覚醒時に変化する。

仕上げに、ぬらりひよんの所へ転移。

そして・・・

「よお爺。なんで呼んでくれ無えんだよあんな面白い祭りによお」

「フオツ！？ おぬしは何者じゃ！！」

「あん？ おいおい耄碌したのかよお……。自分の孫の顔もわすれるなんてよお」

「ワ、ワシの孫は木乃香だけじゃ！！」

「ハア・・・そうかい。じゃあ殺されても文句は言うなよ？」

『真・明鏡止水』  
アマカケルカズチノヒカリ  
『天翔雷光』

「フオツ！！！！？？？つてアレ？斬られたのに切れてナーイ」

ドスッ

「いちいち反応のうざったい奴だな。思わず九頭龍閃ぶち込みま  
ったじゃねえかよ」

コンコンコンコンッ

「学園長、入っても宜しいでしょうか？」

「帰るか。分身置いてつてと。(ボソッ)」『転移』

コンコンコンコンッ

「学園長？入りますよ？」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

コンコンコンコンッ

「あーもつつ学園長？ 失礼しま・・・キヤ

――！！！！！！」

そのころエヴァンジェリン宅では。

「首尾はどうだった？」

「抜かりなくやってきたぜ。ほら撮ったビデオ」

「マスター。再生しますか？」

「ああ。今すぐやってくれ。丁度退屈していてな」

「わかりました。では少々お待ちください」

「ん、わかった」

「ソレデ斬り応エハ、ドウダッタ？」

「んーまあここに来る奴らと同じ感じだったぜ」

「ケケケ ソウカソウカ。ナラ今度八俺モ連レッテクレ」

「時間があつたらなー」

「お前ら、特にチャチャゼロ。楽しんでる途中悪いがどうやって動く気だ？」

「「あ（ア）・・・」」

「おいおいお前ら・・・」

「まあなんとかなるだろ」

「ソウダナ」

「樂觀的過ぎるわ！！！！」

「たまにはいいよな？」

「オウ。タマニハイイゼ」

「ハア・・・」

ちなみに、テストは満点取って、尚且つ賭けに勝ったんだぜ！  
すごくない？

え・・・当たり前？

いやそれを言われると・・・

照れるじゃないかw

「間を無駄に空けるな！ちょっと期待するじゃないか！！」だと？

すいませんっしたー。

## 閑話休題

F a t e / s t a y   n i g h t が始まるな・・・。

この   世界   の住人達にとっての・・・な。

さてイレギュラーであるこの俺が入ったこの   世界   はこれから、  
どのように物語を紡ぐのだろうか。

原典・・・オリジナルと同じように紡がれるのだろうか。  
それとも乖離して紡ぎ方の全く違うモノになるのだろうか。  
今のところ、原典とほぼ同じような紡がれ方だ。

もう後戻りはできないぜ？   世界   さんよお。

ジョット、ウルキオラ、俺を別固体として認識しちまったんだから  
な。

気づいているのは今のところアルだけだが。

さてさてどんな物語が紡がれるものやら・・・楽しみだ。

第21話：最近話が全然進んでないよね？・・・あコレ愚痴じゃん。（後書き）

さあやつと始まるニヤ

第22話：コレはチャチャゼロと俺のせいなのか？（前書き）

わけのわからないサブタイ。

つけた自分も何故つけたかわからない。

ひとつだけいえるのは、

一応本文に関係している

ってことだ

## 第22話：コレはチャチャゼロと俺のせいなのか？

アイツ派手に襲ってやがった。日ごろのストレス解消とでも言うように……。

ただどさ、いくら認識阻害があってもやりすぎだろ……。

魔法の秘匿はどうしたよ？

魔法の秘匿は……。

魔法先生方に退治されねえのか？

……。ああそうか。

そつえばこの前退治したぬらりひょんのお墨付きだからなあ……。

他の魔法先生方は手を出せないんだっけ？

少年はどうやって解決するのやら……？

原典通りアスナ嬢の力を借りるのか、それとも違った方法をするのか……。

え……。俺？

いやーあの後呼び出し喰らっちゃって関わるなって言われちゃってね  
まあ家族に危険が及びそうだったら参加してもいいらしい。

なんつーかアレだよな《日々是精進だけど進むは悪の道》みたいな  
つ。

……って何言ってた俺は……。  
違う違う。

日々の行いが物を言うよな。

うん、これだ。コレが言いたかったのさ。

閑話休題

で、今俺はストーキングしているってオイ何電話しようとしている！  
止めれ！！

なに？犯罪者が居たから通報しようとしていただと？

ざけんな！ちゃんと許可は取ったわ。

わかったか？

ドユーアンダースタアン？

Do you understand?

OKならその電話をしまいたまえ。

全く最近の餓鬼は頭が固くて困るな。

と、電波を受信していたら――

「マスターをよろしく願います綱吉さん」

と聞こえた。

だから「残念ながら君の発言内容は認められないな」などと呟きつつ。

『卍解、天鎖斬月』

『月牙天衝』

ぶっ放した

ズザザザザザッ

「だ、誰ですか!!」

「そうだ、そうだ！正体を現しやがれ!!!」

「よく吠える犬程臆病者らしいが、人間にも適用されるのか？」

と、言いつつ格好よく姿を現す俺。  
やべえコレ決まったんじゃない？

「やいやいそのアンタ。アンタのせいで仕留め損ねたじゃねえか」

「この子を、か？」

「そうでい」

「ロボットだぞ？」

「いえ、私はガイノイドです」

「人間ではないぜ」

「人間じゃないなら仕留めても構わないのか？」

「あたぼうよ」

「じゃあお前を仕留めてもいいよね？ 答えは聞いてないけど」

「え・・・ちょ・・・マジっすギヤ——！！！！！！」

「カモ君！！」

「少年、君に一つだけ言っておこう。周りの意見に振り回されてはいけないよ。」

それと今は亡きナギ・スプリングフィールドはもつとまわりを見てたらしいぜ」

「え・・・？」

「さ、行くよ茶々丸。マスターが怖いからね」

「はい」

「ま、待ってください！ 父さんの事を知ってるんですか！？」

「フフ君には早いよ少年。  
ではな」

『転移』

今日の俺かつこよく決まりすぎじゃね？

なんか明日「不幸だ——！！」ってなる気が…

だが無問題だな。俺はいつでも全速前進全速前進全速前進（ry

くおまけ

「ただいまー」

「ただいま帰りました」

「大丈夫だったか茶々・ま・る」

「はい。綱吉様に助けていただきましたので」

「ジョット」

ギクッ・・・ば、ばれたか？

よし、ごまかすか。

「へ・・・？お俺は綱吉だ「ジョット！！生きていたのか！？」ってば」

「だから俺は綱吉だって」

「は・・・？何を言っている？お前はジョットだろ？」

「ジョットは俺の御先祖だって」

「だから何を言っている？なあ茶々丸？」

「マスターその大変申し上げ難いのですが、その方は時渡綱吉様に  
じゅういます。」

マスターがす「余計な事を言おうとするなこのポケロボが。巻いてやる」きなつて・・・

ああ いけませんマスター そんなに強く巻いては」

「じじいじじいじじいじじい」

「ああ止めてくださいマスター」

「なあチャチャゼ口……」

「ア？ナンド？」

「俺達忘れられてね？」

「言フナ悲シクナル」

「それもそうだな……。あ、そうだ！」

「ン？ドウシタ？」

「俺ってそんなに御先祖様に似ているのか？」

「マア似テイルツチャ似テイルナ」

「へゝ似ているんだ」

「ドウシタ？」

「悪戯できんじゃないね？」

「オ、面白ソウダナ。俺モ混ぜテクレ」

「おういいぜ！で内容は――」

チャチャゼロと企んだ俺でした。

いや忘れられた腹いせに企んだとかちやちな理由じゃねえぞ。

今更だけど俺って決め台詞が無いな・・・どうしよう・・・

第22話：コレはチャチャゼロと俺のせいなのか？（後書き）

久々のあまり日にちを空けずに投稿できた。

他の作者様はほぼ毎日投稿しているのに僕は出来ていない・・・。

努力するか・・・

## 第23話：さて本体は誰でしょうか？

先生・・・授業がメンドイです。

と、言えたらどんなにいいだろうか・・・。

言えればいいじゃないかだって？言ったら委員長が怒るし・・・あの  
人怒ると怖い。

怖いのキライ。だけど怖がらせるのは好き。

とか、

そうそう俺の決め台詞はどうしよう・・・。

さあ戲事を始めようか・・・言われたほうはカチンツとくるな。

んじゃま、適当に零崎を始めるか　．．．死体がそこらじゅうに  
転がる事になるな。

俺がその絶望をぶち壊す！　．．．つーより俺が絶望させる事にな  
るよな。

その幻想を解き放て　．．．なんかやべえ事になりそうだな。

輪廻の鎖に縛られる　．．．必ず殺さないといけなくなるな。

人は自分の上に人を作りたがらず、自分の下に人を作りたがる　．  
．．長いな。

咎人よその罪を悔い改めなさい　．．．どこかの聖職者だよな。

暴れ動く影と幻に畏れを抱け　．．．技の発動名だな。

蒼き焰の元に肅清する　．．．中二だな。

などと、授業にあまり関係の無い事を考えながらボーッと授業を淡  
々と受けてその夜。

原典ではエヴァンジェリンと少年が勝負をした夜だ。

その夜、俺は決戦の場所にいる。

龍宮さんと刹那に監視されて。

「なんですか」

「綱吉さん。あなたに受けたご恩を仇で返してすみません」

「気にしないでいいよ」

「おや？やはり知り合いだったのかい？会合の後「言わないで下さいッ！！／＼」わかったよ」

「おう知り合いだぜ。だから通してよく観戦するだけだからさ」

「すみません。上からの命令ですので」

「んゝこっちは傭兵だからね・・・すまないな」

「よし、今度餡蜜奢るからさ」

「とても美味しい話だな。いつ奢って「真名ッ！」なんだ嫉妬か？刹那」

「違うッ！」

「全く・・・。素直じゃ「よいしょっと」え・・・ちょ・・・降ろしてくれないか？」

「綱吉さん何や「こっちも」ってふえ・・・／＼／」

所謂、<sup>イウユル</sup>お姫様抱っこってところだな。

「行くか」

「その前に降ろして欲しいのだが」

「私も降ろしてください／＼」

「だが断る」

「刹那はいいとして「真名ッ!」どういうことだッ!」なんて私も?」

「いや」綱吉さんも!」つい癖で」

「どうした刹那。そうカリカリすんなって」

「おう息がピッタリだZE」

「ハア・・・」

「今ため息を吐いたせつたんへ「刹那です!／＼」一言」

「な、何ですか?」

「ため息を吐くと妖精が死ぬと言われている」

[illegible]

「おもしろいな。どれひとつ私も「やろうとするな!」冗談だよ」

「まあ所詮都市伝説だけだね」

「からかわないでください！」

「  
「  
「  
だが断る」  
」  
」

「おう？うまいな龍宮」

「まあ一度目だからね大体わかるさ。それと真名と呼んでくれ」

「真名……か。いい名前だ」

「そういわれるとうれしいな」

「そ、それで何処へ向かっているんですか？」

「決戦の地」

「うまいな」

「よせやい照れるじゃないか」

「でもばれてしまうのでは？」

「そんなときには、テッテッテッテッテッ。透明マン  
ト」↑ドラ○もん風に。

「ジャジャーン」

→第三の俺。

「何ですか？（何だい？）ソレは」

「コレを被るとアラ不思議」

「おや？何処へいったんだい？」

「ここにいますよ、真名」

「ワオ驚いた。私が気配も感じれないとは」

「「「そりゃ俺特製だからね」」」

「今度銃弾を作ってくれるかい？」

「「「承りました」」」

「わ、私にも刀を作ってくれますか？」

「「「仮契約したほうがはやくね？」」」

「え？！ 何故ですか？」

「確かに刀だと付加能力付きを創るのは大変だからね」

「「「そゆこと。だけどエヴァが怖いからさ、アイツとやり終えてからでいい?」「」」

「え!まだしてないんですか!?」

「「「どうした?うれしいのか?せったん」「だから刹那です!」ちえっ・・・」「」」

「ち、違います!／＼／」

「「「釣れないな。うんまだしてないよ。今夜の勝敗に賭けたから」「」」

「どっちがどっちに?」

「「「そりゃ、エヴァは自分に。俺は少年にさ。」「」」

「「「分が悪くない(です)か?」「」

「「「あのテストの時も言われたよ。超に」「」

「「「あゝアレの時・・・」「」

「「「だから俺が勝つ!」「」」

「ちなみに勝ったらどうするんですか?」

「「「ピー(自主規制)をする」「」」

「／／／／」

「冗談だ」

「引つかかるなよな」

「ちょっとしたジョークだぜい」

「不覚で「着いたよ」す．．．って最後まで言わせてくださいよ」

「なら降ろしてくれないか？」

「真名無視しないでくれないか？」

「ハッハッハだが断る！！」

と、ふざけていたら

「ふふつ．．．どうした、ぼーや？ お姉ちゃんが助けに来てくれてホッと一息か．．．？」

「うぐつ．．．」

「何言ってるのよ！ これで2対2の正々堂々互角の勝負でしょう！？」

「互角．．．？ アハハハ。最強の魔法使いに勝つとも言っているのか？ 面白い冗談だな」

「そんなのやってみなきゃっ、わかんないじゃないッ！」

「ほう……」

→の会話が聞こえた。やべえ遊びたくなってきた……。

いわゆる　オラ、ワクワクすっぞ　ってやつ。

これのクをキにすると……

オラ、ワキワキすっぞ

アラ不思議。変態さんの一言になります。おー怖い怖いw

だから俺は指を鳴らした。

『パチンッ』

と。ちなみに俺は既知の通り、指を鳴らすだけで何でも出来る。

それで、さっきのくだから>という接続詞の使い方についてだが異論や異議は認めないぜ？

後悔も反省もしていないがな

「「誰だ（よ）（ですか）！」「エヴァ、少年、アスナの3人

「何してるんだ（ですか）！！！」真名、刹那の2人

「どうせなら3対3の正々堂々な戦いにしない？」といいつつ参上する第四の俺。

カッコよくな？カッコよくない？マジか・・・さーせん。

「綱吉！！」

「どういつ事・・・ですか？」

「こういつ事」「パチンッ」

「オウ？ ケケケ。オモシレエ事二ナッテンジャネエカ」

「チャチャゼロ！？」

「ン？ヨオマスター。呼バレタカラ来タゼ」

「そういうことか。では貴様は敵に回るんだな？」

「おう。賭けに勝つためにな。だから俺はチャチャゼロと闘うわ」

「久々ニ切り刻メルゼ。ソレニ相手ガじょっとノ子孫ト来タ。不足ハネエナ」

「行くぞ殺人<sup>キラリング・ドール</sup>人形よ  
分か」  
壊される覚悟は充

「確力似タヨウナ台詞ヲじよつとカラモ聞イタゼ。ソノ時ト同ジ台詞ダ。ネーニ決マツテルダロー!」

『顕れ給え 斬月』

斬月、召喚！（キリッ

「才前、ワザトカ？」

「何がだ？」

ええわざとです。確信犯です。

「じよつとモソレヲ使ッテタンダゼ？」

「マジですか！？でもコレは使わなかったらう？」

「ア？何が『パアアッ』ウオワ！？グッ・・・ナ、何ダ!？」

「ウルキオラ特性の対人用特大クラッカーっす。因みに音の威力は大体魔法の射手10矢分だな」

「オイオイ、ンナ訳ネエダロ。オモイツキリ喰ラッタゾ。無理ダ動  
ケネエ俺ノ負ケダ」

「キターほぼ不戦勝！」

「す、すごすぎる」

フッハッハッハ粉碎 玉砕 大喝采・・・ってなw

よし遊ぶぜ。

「真名とせったん」だ・か・ら、刹那です。せ・つ・な」に理科の  
問題」

「面白そうだね」

「勉強は苦手なのですが・・・」

「問1、パイ投げを音速で行つと喰らったほうはどうなるでしょう  
か？」

「は・・・・・・？」

「え？わからないの？答えは、こうだ！」

ブンツ ↑俺のパイ投げ

ガツ ↑手が滑ってエヴァの顔へアッパー気味にあたった音

ブチツ ↑エヴァがキレた音

ダツ ↑逃げる俺

シュンツ ↑エヴァがギャグ補正（笑）的な何かで瞬間移動

ガシツ ↑捕まる俺

ガタガタがたがたガタガタがたがたガタガタ ↑エヴァ以外の皆

「答えはエヴァがキレるでした」

「ほう。貴様は人で遊んでいたのか」

「アッハッハッハそんなことするわけ無いじゃないかエヴァンゲリオン君」

あ、間違えた

ブチィッ

おうすげえ音が俺の胸倉を掴んでいる幼」『ドゴッ』『ゲフッ』・・・少女から・・・

「貴様いい加減にしるよ？」

「まなたん「チャキツ」せったん「シャンツ」助け、て？おやゝ心なしが狙われている気がするのだが？」

「「「さあ貴様の罪を数えろ！！」「」」

てか俺の分身1ゝ3何処へ行つたし。

あゝ消されたのか・・・使い物にならねえ！。

「何でその台詞を知ってるのさ・・・ハッ！そうか！ギャグ補正ですネ？わかります」

「「「三妖一体、悪・即・斬」「」」

うわ・・・いろいろな事を無視した一撃だな。

「あるえ・・・？スゲー息びつたりな気ガッアベシ」

暗くなつていく視界で捉えれたのは

幼「『タンツ』・・・エヴァと、

まなた『ダアンツ』・・・真名と、

せった『スパツ』・・・刹那のイイ笑顔だった。

わざわざ言い変えたのは包丁が飛んできたり、銃弾が顔の付近に打ち込まれたり、

隣の岩が綺麗に切れたりしたとかそんなあほらしい理由じゃねえ。

断じてあほらしい理由じゃない。

などと意味不明なことを考えていたり、

ああ賭けの結果はどうなったんだろうと後悔したりしながら俺の意識はブラックアウトしていった。

つーことだから後は頼んだぜ？本体さんよ・・・。

**第24話：答えは俺が本体でした。（前書き）**

この場を借りて感想を下さったRainさんにお礼申し上げます。  
感想有り難うございます。

コレは短め。

第24話：答えは俺が本体でした。

俺の前には乙女チックなエヴァンジェリンがいる。

なんでさ。

なんでこうなった。昨日の事から思い出してみるか。

く昨夜未明く

「キュピーンッ」

ハッ！分身が全滅した、だと！？

えくと何々？

後は頼んだぜ本体？

粹な事をしてくれるじゃないの。

飛ぶか。

あ、ちなみに俺は今さっきまで世界樹の枝の上に座っていた。

一言で枝って言うっても結構な大きさだな。

転移

久々の s i d e o u t

久々の s i d e : n o b o d y

『ボンッ』

立ち込めていた煙が晴れるとそこにはなにもいなかった。

ソレをみて取り乱したエヴァは刹那に問い詰める。

「おい！綱吉を何処へやった！！」

「いや私に聞かれましても・・・」

「私も知らないな」

刹那の返答に便乗する真名。



「やあ。俺の分身が世話になったなエヴァ」

ツナ本体の声が聞こえた。

「何をしにきた」

「世話になったからその借りを返しに、な」

「フンッふざけるな。この私が許すとても？」

「おいおい誰が許せて言った？俺はただ借りを返しに来ただけだ」

「チッ でどのように返すんだ？」

「決闘でどうだ？俺vsここにいる俺以外で」

「なめるなよ？」

「なめてもらっちゃ困るな」

「な、なめないで下さい！ボ、ボクも魔法使いなんです！！」

「綱吉さん。私はあのときより強くなりました！！」

「あ、いや・・・俺が分身して闘おうと思ったんだが」

「ほう・・・いいぞ。でルールは？」

「俺が一体でも負けたら君たちの勝ち。君たちの全滅が俺の勝ちで  
どうだ？」

「「「それでいい（ぞ）（よ）です」「」「」

「OK それでは始め！！」

『影分身の術』

（一時間後）

「ハアツ・・・ハアツ・・・ゴクツ・・・ハアツハア・・・ハア」

「どうした？もう終りか？」

「ああ貴様のな」

『斬岩剣！』

『雷の暴風！』

ガッ

「んな?!動けねえ・・・だと?」

「超特製の麻醉弾だよ」

「アイツ・・・」

ボンッ

side:nobody end  
~~~~~

だつたな・・・。最悪だな。

「エヴァ・・・マジですか?」

「うん／＼／」

何コノ可愛い生き物。

後でだ後で。

魔法陣を書いて

「方法は？」

「キスで」

チュッ

この世界でのファーストキスが奪われました。

ああ今度は刹那とか・・・。

第24話：答えは俺が本体でした。（後書き）

仮契約カード

名前表記：TOCIWATARI TUNAYOSI

称号：Controlia Gaia（大地操るもの）

色調：Blue（青）

徳性：illusione（幻）

方位：septentrio（北）

星辰性：Venus（金星）

ガイア・プレスレット

アーティファクト：大地を司る腕輪

アーティファクト本体は二つで1つのメタリックブルーの腕輪で、A～Zまでのアルファベットが象形文字風に書かれている（ガイアメモ。風に）腕輪と

大地の七属性を現す絵が描かれている腕輪に分けれる。

使い方はA～Zの腕輪は

アルファベットをなぞると同時に出てくる声にあわせて気や魔力を流すと使える。

七属性のほうは絵をなぞり死ぬ気の炎を流すと使える。

ラテン語は無理だったのでイタリア語にさせていただきました。
誠に申し訳ありません。

第25話：修学旅行で行った・・・

待ちに待った修学旅行。

だったのだが…

「どういう訳か説明しろやぬらりひょん。」

「ワシ学園長なんじゃが…。」

「うるせーなんで俺があの子の尻拭いをせねばならないんですか
コノヤロー。」

「お主がナギの親友であつたウルキオラの甥っ子だからじゃよ。」

「死ねもう死ね今すぐ死ねコノヤロー。」

「酷くない?」

「酷くないわコノヤロー。」

「頼むからこの通りじゃ。」

「ハア、どの通りだよ…。しょうがない——で手を打つよ」

「ムウ……。——か……。わかった。では頼むぞ」

「はいはい。わかってますって」

1 班

柿崎 美砂

釘宮 円

椎名 桜子

鳴滝 風香

鳴滝 史伽

2 班

古 菲

超 鈴音

長瀬 楓

葉加瀬 聡美

四葉 五月

桜咲 刹那

3 班

朝倉 和美

那波 千鶴

長谷川 千雨

雪広 あやか

村上 夏美

相坂 さよ

4 班

明石 裕奈

和泉 亜子

大河内 アキラ

佐々木 まき絵

春日 美空

5 班

綾瀬 夕映

神楽坂 明日菜

近衛 木乃香

早乙女 ハルナ

宮崎 のどか

6 班

龍宮 真名

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

絡繰 茶々丸

ザジ・レイニーデイ

時渡 綱吉

あの時ぬらりひょんと商取引したからな…

ハッキリ言って楽しめない、というよりイロイロと面倒だな。

この際無理矢理にでも千雨に魔法の存在をばらすか？

それはそれで楽しめそうだが正義の魔法使いさん達がうるさいから…。

どうしようかな……

「おい綱吉。何をばけつとしておる。早く乗るぞ」

どうやら考えている間に新幹線が来ていたようだ。

「それにしてもエヴァははしゃぎすぎ。そんなに楽しいか？」

「ああ。なんせ15年ぶりに外に出たからな」

「たしかに15年ぶりになるね」

「これもあのウルキオラとナギのせいだ！」

「伯父さんは関係はないだろ……」

「いいや関係あるぞ！」

「ふうん。そうかな…？まあいいけど」

座席について持ってきた漫画を鼻唄交じりに読む。

漫画はサ。デーの神の。ぞしるセカイや結。師だ。

時間軸が違うのにあつたのは驚きだ。

鼻唄の内容はボカロばかりだ。

並行の本棚で存在を知ってからハマった。
そのほんたな

オワタ。さんはすごいね、うん。

ん？騒がしいな…え？カエル？何言ってるのさ…ここ新幹線だよ？
カエルなんて……

「居たあああああ！?!?」

「うるさいぞ綱吉。たかがカエルごときで騒ぐな」

「いやここ新幹線だぜ？」

「おいおい式神もわからなくなったのか？」

そういえばそうだったな…。

「それで、燕が飛んで来てそれを少年が追いかける、か」

「は？大丈夫か、お「あゝ！！待ってくださーい！」ま…」

「まさかそのまんまとは…。あの英雄より占い師に向いてないか…？」

「どついう事だ？」

「伯父さんの預言通りだったのさ。今の光景が」

「やっぱりお前ら一族は規格外だな」

「いやジョットと伯父さんが規格外なかっただけであってそれ以外はそこそこな天才止まりだったよ？」

「お前も規格外だぞ」

「ナ、ナンダッテー！！」

「なんだ気づいてなかったのか？」

「そんな馬鹿な」

「それよりジョットの特異性は知っているがウルキオラの特異性は何なのだ？」

「眼と頭」

「目…？」

「いや眼だから」

「だから目なのか？」

「だから眼だってば」

「ダァーッもうっ！ うっとうしいわ次へ進め！！」

「？ お、おうわかった。伯父さんは魔眼持ちで知識沢山なのさ」

「魔眼か…だから眼な……。で、どんな魔眼なのだ？」

「聞いて驚くなよ？」「ナ、ナンダッテー！」チャチャゼロ、まだ何も言っていないのだが…」

「ケケケ言ワネエト駄目ナ気ガシテナ」

「まずは解析の魔眼。コイツは何でも節操なく解析してしまうらしい」

「お前達らしいな…ってまで。いくつ魔眼があるんだ？」

「えゝと計6個、かな……………俺が把握しているのは（ボソッ」

「ハァ…次だ」

「これが噂の飛び降りるアレー！！」

「誰か飛び降りてっ!!」

「では拙者が・・・」

「私がいくアルよ!!」

バカばかりです。本当に有り難うございました。

「ハハハ。で次は複写の魔眼。魔法の術式をコピーする時に解析の魔眼と併用しているんだとさ」

「次」

「神の命令サリエルの聖なる瞳邪眼。コイツは一瞥するだけで対象を傷つける事が出来る。後は名前しか知らないや」

「な!あの熾天使だと...? ハア...残り全部言え」

「輪廻眼、カトブレパスの瞳、バジリスクの眼まなこだね」

「いくつか神話とかで出てくる名前があっただが、何故?」

「さあ?知らないよ。てかね清水の舞台でこれを話すのはどうかと思っんだ」

「気ニスンナ。大丈夫ダ、問題ナイ」

「そうそう大丈夫だ」

エヴァとチャチャゼロもねじが足りなかったようだ。

「そういえばあの時タカミチがジョットの名前を出していたが何故知っている？」

「え、えつと・・・お、伯父曰く初代は時を渡れたらしいよ？」

「はあ！？だったら何故私に会いに来ないんだ？」

「『俺は未来へ行って自分の生きていた時代を見てみたくはない。つまらないからな』だってさ」

「…なんともアイツらしいな」

「ケケケ モウ一度あいつト殺り合イタツタゼ」

「ま、まあ力の継承の時に伯父には会えるからいいんだけどね」

「何時だ」

「えつと夏休みの時」

「待ち遠しいな。早くアイツを尋問したい。いやOHANASHI
したいな」

「ダナ」

拝啓、この世界でウルキオラを演じている自分へ一言。

ふざけた事、吐^ぬかしてすいません。

事後処理は頼みました。

多分管理局の白い魔王式のお話・・肉体言語があなたを待っています。

私は魔王じゃないもん

P・S・ポケ殺もしくはギャグ補正を使えば助かる、はず。

「おいおい…マジかよ…何死亡フラグ立てちゃってるのさ……」

「どうしたんじゃウルキオラ」

「俺の甥っ子がバカな事をしやがった」

「たしか綱吉じゃったか？」

「ああ」

「まあそのなんじゃ…えつとご愁傷様じゃ」

「ハア…orz」

「何をしておるんじゃ？」

「絶望に打ち拉^{ひし}がれておりますです。ハイ」

「駄目じゃな…こやつ早く何とかしないと」

拝啓、この世界で時渡綱吉を演じている自分へ一言。

一回、といわず何回でもいいから地獄へ逝って来い。

若しくは管理局の白い魔王直々に折檻されてこい。

だから違っつてば〜

P・S・折檻されに行つた時は狸にもよろしく言っておいてくれ。
あのときは世話になつたなど。

第26話：京都や大阪には府が付くのになんで滋賀には付かないんだろうね？

——旅館にて——

「キャーーーー」

絹を裂く悲鳴とでも表現すればわかりにくくなるだろうか。

そんな悲鳴を聞いた綱吉は、

「このかが攫われた、か」

と呟いた。ただ淡々と。まるで最初からそのことを知っていたかのように。

「どうするんだ綱吉」

となりのエヴァは少しばかりニヤつきながら彼に尋ねる。

その問いに彼は、

「詠春さんとの約束も有るからね。助けに行ってくるよ」

自分の意思ではない、とでも言いたいような口ぶりで答える。

「お前のことだろうから無いとは思っが油断するなよ」

ソレを聞いた彼女は大成功、とそんな感情を顔に出さないように必死に我慢して言葉を返す。

彼女の声援を聞きながら彼はミトンと指輪を取り出して手にはめると同時に雰囲気を変える。

「ああ。大丈夫だ。手ばかりなく取り返してくる」

さっきまでの彼とはまるで別人の顔つきで冷静に言葉を返した。

いつの間にか手にはめたミトンは洗練されたグローブに変わっていた。

そのグローブに炎を灯して窓から飛んでいく。

魔法の秘匿などお構いなしとでも言うように、飛んでいく。

魔法ではないから秘匿は関係ないのであるつか。

これがあの”アカイアクマ”や”キンイロノアクマ”などがある世界ではアウトであろう。

「フンッ　ならいいのだがな」

そして彼女は目論見が外れて興が醒めた事を言外に込めて見送る。

が、そこには既に誰もいなかった。

「ケケケ御主人逃ゲラレタナ」

全く持つて痛いところを突く従者である。

所変わって駅のホーム。

「木乃香お嬢様をかえせ！！」

近衛木乃香を影ながら見守る従順な従者、桜咲刹那である。

「ようここまで追ってこられましたなあ。せやけどここまでですわ」

木乃香を攫った犯人は何かしらの確証をもって言う。

「何？」

その言動を訝しむ従者。

「お札さんお札さんウチを逃がしておくれやす。三枚呪術、大文字
焼の送り火！」

どうやら陰陽術が今回の誘拐犯の切り札であるようだ。

「くっ」

どうする事も出来ない状況をどうにか打破しようと考え、攻めあぐ
ねいていると、

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル吹け一陣の風・風花・風塵
乱舞！」

どこからか原典での主人公ネギ・スプリングフィールドの呪文詠唱
が聞こえ、

その詠唱が終わると同時に

「なっ！？ウチの炎が消された！？」

先程の呪術が消え去る。

「お嬢様を返してもらっぞ！」

これは好機と取り返しに行くが、突如現れた少女に止められる。

「この太刀筋、神鳴流！？」

どうやら刹那が入門した流派の少女だったようだ。

「はい、月詠言います。では、行きます。」

少女・月詠は堂々と名乗りを上げ刹那に向かっていく。

「（くっ以外に出来る！）」

刹那が思っているより月詠は出来るようで互角というよりは少し刹那が押されているようだ。

すると突如何処からか火の玉・狐火の方がわかりにくいよね？

狐火が飛んできて誘拐犯の式神を燃やした。

この現象はどうやら誘拐犯も予想外だったらしく

「ウチの猿鬼と熊鬼が一撃で！？」

と、たいそう驚いている。

その隙を突いて綱吉が木乃香嬢を掠め取った・失礼。木乃香嬢を取り返した。

「しまった！」

その事に気づき焦りだす誘拐犯。

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル 光の精霊8柱、集い来てりて敵を討て！」

魔法の射手・連弾・光の8矢！」

そこへ容赦なく魔法の射手を打ち込むネギ少年。サギタ・マギカ

さすがナギ・スプリングフィールドの血を引いているだけあって色々とせこい。

「くっ…ここは引かせてもらいますえ！」

この不意打ちが吉と出たらしく誘拐犯はおとなしく(?)引き下がっていった。

逃げた方法は水を媒体とした転移術。

「ふう…あ、ありがとうございました。木乃香さんを…」

いやいやそんな簡単に警戒を緩めてはいけないだろう？ネギ少年。

「あ？気にすんな頼まれた事をやっただけだから。てか逃げられちまっとな…」

助けた事よりも逃げられた事を気にするのは級友としてはどうかと思われるが、

仕事としてはしょうがないであろう。

綱吉がそれを知っててやっているのかどうかは理解できないが。

「綱吉さん！」

刹那が声をかけた。

「ハイ刹那、あうとー。君は木乃香の護衛なのに守れなかった。気を抜いちゃったからだろうね」

なんとも気の抜けた声で刹那に駄目だしを行う綱吉。

「…」

ふざけた言い方だが的確なところを突いてくるので言い返せずに黙ってしまふ刹那。

「まあ修学旅行だからしょうがないよね？なんてことは言わないから安心したまえ刹那君」

どう安心せいつちゅう話だよ。

と、ツッコミが入ってもおかしくない台詞だがこれまた痛いところを突いている。

「で、ですが刹那さんは頑張っていましたよ？」

ネギ少年がフォローするが

「結果が出てなけりゃ駄目じゃね？英雄の息子にして英雄候補一号よ」

正論で返される。ツッコミどころの多い正論で。

「で、でも…」

まだネギ少年は何かを言いたそうだが、

「まあこれが護衛じゃなくサッカーとかバスケの試合だったら君の発言も頷けるよ？」

ニヤリと厭らしく笑いながら餌を垂らす綱吉。

「だったら許してあげても…」

その餌が地獄への片道切符だとは知らずに掛かるネギ少年。

多分大丈夫なのであろう。

* 一応無事に木乃香は届けられました。

第26話：京都や大阪には府が付くのになんで滋賀には付かないんだろうね？

如何でしたでしょうか？

今年最後の更新という事で、いつもとは違う書き方で書いてみました。

今までのほうが良ければそちらに戻します。

意見待ってます。

今回は正月中には更新したいです。やっちゃったぜも含めて。

では良いお年を。

第27話：女子とはいつの時代も変わらず恋話をする者達である。

—— 修学旅行二日目・夜 ——

イロイロあつて夜に。

イロイロはイロイロだ。

あくまでもイロイロだ。

それで今綱吉の目の前には金髪のロリババ「タンッ」

どこからか包丁が……。

とりあえず目の前にはエヴァがいる。

その隣には何故かチャチャゼロを頭にのせた千雨がいる。

チャチャゼロを頭にのせた千雨がいる。大事な事なので二回言いました。

今までの事を一言で纏めると、修羅場。

「で、ホントに魔法なんていう非常識なモンがあるのか？」

千雨が尋ねる。

「ええ。確かに存在していますよちうたん」

軽く茶化して答える綱吉。

「なっ！！ 何故知っている!？」

どうやら千雨が隠し通せているはずだった秘密の一部だったらしく驚いている。

「マホーだ」

その暴露をマホーの一言で片付けようとする綱吉。

「マジかよ…。魔法にはプライバシーは無いも同然なのかよ」

それを鵜呑みにする千雨。

「そんな事ができるのはコイツら一族だけだ」

エヴァは綱吉をジト目で見ながら否定する。

「所謂バグって事か…？」

得た情報を素早くまとめ自分なりの答えを出し確かめた。

「「そんなところだな（ソナトコロダナ ケケケ）」」

苦笑しながらその答えを肯定する、主従。

「いやーそんなに褒めないくださいよ。照れるじゃないですか」

その肯定をどこをどうとれば褒め言葉となるのか知らないが、綱吉は褒め言葉として捉える。

「「「いや褒めてない（イヤ褒メテナイ）」」」

まあそりゃそうなるわな。

「なんだよーノリが悪いなー」

ノリ云々は関係無いだろうがな。

「それで私は何をされるんだ？」

いや千雨さんその言い方だと…

「ナニをされるかって何されたいのさ？」

遅かった。

「はあ！？ナ、ナニって何だよ！！わ、私は…えっと…／／／」

千雨さんは自爆した。自白ではなく自爆した。

「ハア…記憶を消されるか魔法を覚えるかって事だよな千雨」

そんな千雨を不憫に思っつてフォローをしたエヴァ。

やはり女や子供にはあまい闇の福音である。

「え？あ、ああ、そうだ」

漸く解放された千雨はあわてふためき答える

「消されたい？」

厭らしくニヤつきながら尋ねる。

どうでもいいがコイツ駄目じゃないか？

「消されてたまるか！」

普通な反応。

「よろしい。ならばス^{せんと}ハルタだ」

おや？いま不穏な単語が・・・

「おい今変なルビ振ってなかったか？」

貴方の耳は正しい。

「気ノセイダロ？ ケケケ」

この従者は主人が主人なだけにネジがぶっ飛んでいるようだ。

「ん？この魔力は・・・」

この場を支配する危ない空気から気をそらす為に意識するとアラ不思議。

魔力を感じた綱吉。

「どうした綱吉」

エヴァはこの魔力に気づいてないようだ。それで良く生きてこれたな吸血姫…。

「カモネギが馬鹿やってる」

正確には朝倉とカモですがね。

「仮契約、か」

「そうそう仮契約って…あ、ごめんエウ^ッア。よ、用事思い出したから後はよろしく」

明らかに動揺しだす。ちよいつと危ない綱吉。

「は？ちよつと待て綱吉！」

訳もわからず止めようとする。まあそりゃそうですよね。

いきなり挙動不審はね。困りますもの。

「じゃ、そーゆー事で」

まさに脱兎の如く。

シュタツ

そんな挙動不審な綱吉が走った理由。

それはエヴァに殺されるから。

エヴァはああ見えても嫉妬深く…彼はともかく刹那が危ない。

なにかの手違いであそこで仮契約をした場合スプラッタが二つ出来る上がる。

喜ばしくない事に。何故アーティファクトに賭けないのか。

もしアーティファクトに賭けると分が悪すぎる賭けになってしまうからだ。

エスケープ係が出ればいいのだがそれ以外だとAll Bad Endになるのだ。

故に彼は走ったのだった。適当に。テキトーに。宛てもなく。何処へともなしに。

「づがでだ〜」

と、ぼそつと呟き屋根に上ってそこに腰掛ける。

今回は傍観することが良策だろうと感じた為だ。

見張りをしながら軽く物思いにふける。

思考するは自分達について。

どうやら伯父曰く俺たちは酔狂な奴に選ばれたこれまた酔狂な奴との事。

初代・ジョットは人を選ぶためにあるモノを作った。

そのモノは『継承式』といい、通過儀礼みたいなものらしい。

伯父はそう苦笑しながら俺に語ってくれた。遠い目をしながら。

あれはいじめだよ、新手の。

自分はまだ力を十分の一しか使えないのに、先代と初代VS俺と相棒。

これでどないせいつちゅう話だよ。まあ一応勝って剣術教えてもらったけどな。

と。なので俺は誰かと組んで伯父と初代を相手取って尚且つ認められないといけないらしい。

厄介すぎるな…。

ん？そういえばこれって解除出来るじゃん…。何故気づかなかった俺…。

ああ、無駄に走ったな、と感慨深げに呟いてみても誰もツツコミを入れない。

当たり前か。此处には俺しか居ないんだから…。

「はぁ…部屋に帰るか」

誰に言うのでもなく自分に言い聞かせるのでもなく独自をして屋根から飛び降りた。

そして部屋に戻った俺を待っていたのは……………。

世界が違はずなのに “キンイロノアクマ” がそこには万を辞して
光臨していた。

なんでさ

第27話：女子とはいつの時代も変わらず恋話をする者達である。（後書き）

おくれてすみません。

第28話：一族の負の遺産らしきもの…。

むう…やはり人間は皆同じなのかのう……。自分の本質を忘れてしまったような行動。

壊れておったから治ったと見るべきなのか…些か対応に困るのう。

じゃがあやつが人の身に有らざるモノを有していたとは……迂闊じゃったな。

それにしてもあの『継承式』とやらは良く考えたもんじゃ。

あれは意図してじやろうか？

自分と同じ道を辿る可能性を見つけては力を譲渡しておる。

よくわからんのう。もうちつと観察が必要か？

ムッ！？世界が動き出したのか…異物を排除する為に。

抑止力を投入…スペックはあやつと同じ。

今の世代では無理じゃな…。

じゃが一世代前は…ギリギリじゃな……。

うまく逃げろよ……………。

——翌日の嵐山ホテルにて——

「おーっこれが豪華賞品かー！！」

「ラブラブキッス大作戦の優勝者に相応しいねー！！」

そう、のどかの手に握られているカードを見ての発言である。

何を隠そうそのカードあの仮契約カードバクティオーである。

「はい皆さん、今日は完全自由行動日よ。そろそろ準備して出発してね。」

「は——い！」

「行くよー、大阪ー！！」

しずな先生の号令で散ってゆく生徒たち。

景品のカードを大事そうに抱いて走るのどか。

「えへへー」

ちよつと危ない感じがするが……。

まああの魔方阵は俺が途中ぶち壊したからそこまで被害がないはずだったが……。

どうやら俺が壊すよりも前に契約は為っていたという事か。

してやられた。あのカモと朝倉には、な。

何をどうやって仕返しもといて御返しをしようかな。

『ッ！？　なんか今背中がゾクツと……』

『？　どうしたのよ朝倉にエロガモ』

『『なんでもない（なんでもねえ）』』

『？　まあいいけど』

さてと餡蜜でも食いに行くか。

「と、思っていた時期が俺にもありました」

「？貴様の伯父も同じ事を言っていたな」

「ケケケ 二番煎ジツテカ」

「うるせえっ」

餡蜜を食いに行こうとしたら何故かゲーセンに……。

しかもアーケード系って……。

仮にも修学旅行だぞ……。ゲーセンはまずいだろっがゲーセンは。

いや餡蜜を食う事も間違いか……。なら宇治金時にすればいいよな。

ん？誰かに見られてる？しかも俺だけ？なぜ……。

まあいいかひとまず行ってみるか。

「で、君は変質者かい？」

「此処へ来て最初の発言がそれかい？流石君たちの一族は何を考え

ているか判らないよ」

「お褒めに預かり恐悦至極にございます」

「さて僕は今回君達の一族の参戦を見越して布石をしたのだがどうやら正解だったようだね」

「御託はいい。要件を手短に述べろ」

目を、意識を、目の前にいる存在からそらさないように気を配りつつ問答をする。

「おや？君達一族ならすぐに手を出すと思ったのに…ああそうか。まだ継承してないのかな」

その一言に反応してグローブで殴りかかる、が

「継承していなくてもこの錬度…。やはり君達一族は規格外すぎるよ。また会おう」

「丁重にお断りしたいね」

幻影だったらしく水となって転移された。

ってあれ？俺忘れられてないか？

ハア……なんだってんだコンチクショウ。

えーと魔力を探って、と

『転移』

「いきなり飛んでくるな。驚いただろうが」

「ソイツは悪かった。で、どういう状況だ？」

「こっちの劣勢」

「一言で説明頂き感謝しよう」

「綱吉さんそれとマスターふざけている場合ではありません」

「それとってなんだ私はついでか？」

結構本気で言ってたのに……。

「へえ、君があのだ十代目候補かい？」

「ああそつだ。それがどうした」

「君が十代目になるのは少々頂けないのでね。ここで果ててもらう」

よ？」

なんか知らない人出てきたー！！しかも古里炎真っぽいし！？

「ハッ 言ってる」

「ハッ 言ってる」

その一言をきっかけに動き出す少年達。

「ほう…報告どおり継承をしていないのにこの力か。これは後々少々厄介な事になりそうだ」

と、独り言を呟く少年。

その言葉を聞き、

「闘いの最中に考え事か？危ないぞ」

と挑発を試みる綱吉。

そんな安い挑発に対して、

「大丈夫さ君如きに遅れは取らない」

毒を盛って返す少年。

もとより挑発に乗らないと知りつつしたようで、別段と堪えている様子はない綱吉。

そこで自分のペースに引きずり込む為に、

「お前の名前は何だ？」

名を尋ねた。

その行為を多少訝しむが、

「俺は炎真、夜桐炎真だ。貴様を斃す者の名前だ。覚えておけ」

名乗った。堂々と。

名乗らないと思っていたので多少は驚くがそこは気合で隠す。

そして、

「ソフィストリー・プレイリマーク来れ空翔ける稲妻、貫け『雷の槍』」

自作の魔法を放つ。

炎真はその一撃を相殺して

「驚いた。新しく魔法を作ってしまうとは…。だけど…ハア終わるか……」

なぜかしら溜め息を吐く。

その行動に対して綱吉は、

「どうした？ 終わりって何がだ？」

もっともな事を言う。

だがそれに対し、

「帰還命令だよ。最悪だな」

と言い返す。

「だが俺にとっては僥倖だ。夜桐」

まあ確かに不幸中の幸いだが…言ってもいいのか？ そのことを。

「そうかそうか。次ぎ会うまでに首を洗っているんだな綱吉」

絶対に理解してないだろお前と言われそんな位適当な返事を返す。

「遠慮しておきたいね」

確かに遠慮しておきたい。

「ハハハそうかい？まあいいや。じゃあな」

転移符を用いて転移した炎真。

悔しそうに炎真がいた場所を見つめ続ける綱吉。

言い表せないような感情を持ちながら。

チクシヨウ、歯が立たなかった。

殺す気で行かないと駄目なのか？

俺はどうすればいいのだろうか？

倒す事の出来る呪文は有るには有るが使いたくはない……。

下手すればあいつが死ぬ。

あいつの目は憎しみしかなかった。

俺たち一族の負の遺産という事だろう。

俺はどうすればいいのだろう

第28話：一族の負の遺産らしきもの…。（後書き）

雷の槍

綱吉が

「『雷の斧』があるんだから『雷の槍』もいけるんじゃない？」
というコンセプトを元に開発した魔法。

詠唱呪文は創った時のノリで

『雷の斧』の派生魔法だからこんな感じでいいやと手を抜き下記になった。

「来れ空翔ける稲妻、貫け『雷の槍』」

第29話：問われる、覚悟（前書き）

遅れてすみません。

第29話：問われる、覚悟。

——修学旅行三日目・夜——

今、木乃香の実家で所謂どんちゃん騒ぎをしている。

たぶん理解できないと思われるので、今に至るまでを略図で簡単に説明しよう。

1・刹那が木乃香の実家へ行く事を提案する。

2・ネギ少年が賛成する。

3・それじゃーレッツゴーと実家へ向かう。

4・詠春さんのストライクゾーンである巫女服姿の人たちが出迎えてくれる。

5・ネギ少年と明日菜はパニックに陥り、刹那はおたおたと説明する。

6・詠春さんの労いの後何故か居た伯父さんに捕まる。

7・皆の衆宴会じゃー！！
↑今ここ。

現実逃避終了ー

「で、だ。なんで居るんですか？」

「なんだ俺に会いたくなかったのか？」

「うん」

「即答かよ」

伯父さんのことはあまり好きじゃないんだよな。

強面だし、無表情だし。ポーカーフェイスではなく表情がないのだ。

「それでも昔よりは人間らしくなったんだぞ」

「当たり前のように人の心を読むのは止めてください」

「はん、そう言うなよ。お前の思ってることなんて俺には明日の天気を読むより容易いんだ。

むしろ勝手に聞こえてくると言った方が正しいんだから、仕方が無いだろ」

「仕方が無いって、さすがにそりゃあ無いですよ。

それよりも、明日の天気を読むのだって簡単じゃないはずなのに」

「ん？ 明日の天気はくもり、後、^{のち}雨だけど？」

「……………」

アンタが言つと洒落になんないから。的中率100%だから、うん。

「で、何で居るんですか？」

「ちょっとお前に渡したい物があつてな」

「渡したい、物？」

なんだ？ 何がある？ ほとんど譲ってもらつた気がするが？

「そう怪訝な顔するな。殴りたくなる」

「性格が180。ほど変わつてませんか？」

「呪いだ、呪い」

どんな呪いをうけたら性格が180。も変わるんだよ。

「カミサマ」

「舐めてるだろ」

「ぜんぜん。本当の事さ」

どうだか……。

「それで渡したいものって？」

「じゃんじゃじゃーん。フレームギアのもとー。わーぱちぱちぱちぱち」

棒読みでやるな棒読みで。

「フレイムギア？」

「そう。フレイムギアの元。ってかお前が持っている、その指輪フ
エイクだから。枷つきの」

なんてものを持たせてたんだこの人は。甥っ子を騙すなんて。

「気にするな。そのフエイクと枷は初代が作ったし、解き方は知ら
ん！」

「いはるな！！」

「多分、初代と同じ考え方のお前だったら解けるんじゃないのか？」

何故に疑問系なんですか。

「初代と同じ？」

「もしかしてお前って初代のコピーじゃねえの？若しくは代替品。
だってお前継承してないのにその強さは反則だぜ？」

「使える能力の多さってことですか？」

「そゆこと。継承すればお前より前の代の能力全て使えるけどな、
十全に」

まだ増えるのか……。まだ理解しきれてないのに。

「そう悲観するな。お前自身の精神世界に行けば自ずと解るはずだが」

「はずだが？」

「今は無理だな。お客さんがいらっしやったからな」

どういうことだろう。訳がわからない。

「ん？ああ悪い。先読みの眼だから」

「そんな便利なのがあるなら助けてくださいよ、いろいろと」

「無理。これで未来を見た奴には変えれない、し、変えさせれない」

うわ……使っても意味がない。

「そんなことはない。安心するぜ。いつ死ぬか解るから」

止めてください。物騒すぎます。

「クツクツクツそうかい？まあいいじゃないか。たまには、さ」

アンタは何時もだよ。

「たまには、ですか」

「そう。たまには酒を飲め」

「未成年です」

「うそだ！」

甥っ子の年齢ぐらい覚えておいて欲しかった。

「本当です」

「だよな」

——ガキインツ

「ッ!？」

何だ?! 何があった?!

「お? もうそんな時間か」

のんきに腕時計で時間を確認しないで下さいよ。

「なんの時間です?」

「この襲撃」

ここを? ここって

「ハアッ!？」

「いやだから、ここ。木乃香の魔力狙い」

「ナントコッタイ」

「早く追いかけるよ少年。お姫様が攫われたんだぜ？」

「いやいやいやいや。」

「伯父さんはどうするんだ？」

「石化されてる人を助ける。そしてヒーロー気取り」

駄目だこの伯父。早く何とかしないといろいろと面倒ごとが。

「と、言うのは冗談で、後始末とかかな。で、コレ枷つきだけど真作」

「フレイムギアの元はどうやって使えば？」

「覚悟の強さ、かな？」

覚悟、か。

「まあ覚悟は人それぞれだ。誰かを助けたい。マフィアを潰すとか
な」

俺にはどんな覚悟があるんだ。解らない。

「さあ行くのです、少年」

うわ気持ち悪いや。どこかのRPG風だし。RPGつってもRPG
7の方ではない。

「解ったよ伯父さん。俺の覚悟が何なのか知らないけど。木乃香を
攫った奴を――」

――ボウツ

「――倒して木乃香を取り返す」

「ああ、行つて来い」

「…………。ふう、楽じゃあないねえ全く。
あの様子だとアイツは無意識に覚悟を決めているって事か？
コイツは洒落にならねえな。そうだろ、ジョット」

▼
▼
▼
▼
▼

本山の山中に流れるせせらぎ。

その小川は下流にある湖の支流で、その流れが変わる場所に彼女ら
はいた。

着物を着た女、天ヶ崎千草。

彼女の式神の猿鬼とそれに抱えられた木乃香。ちなみに口を塞がれている。

そして白い髪少年、フェイト・アーウェルンクス。

「おおっ！？やるやないか新入り！！どうやって本山の結界を抜いたんや！？

最初からお前に任しとけば良かったわ」

「まあこれでお嬢様が手に入った。後はあの場所まで行けばウチらの勝ちや」

——バシャッ！

「そこまでだ！！お嬢様を放せ！！」

「……またアンタらか」

音をたてて3人が川に到着した。

「天ヶ崎千草！明日にはお前を捕えに応援が来るぞ、諦めて投降するがいい！！」

「ふふん、応援がナンボのもんや。あの場所に行きさえすれば……」

…。まあええ。

そんなに痛い目に遭いたい言うんなら、お嬢様の力の一端を見し
たるわ。

本山でガタガタ震えとつたら良かったと後悔するで」

「お嬢様、失礼を……………」

——ぱしっ

「んっ……………」

千草が木乃香に札を張り付けると、千草の式神に抱えられた木乃香
の体が光りだした。

「お嬢様っ！！」

「——オン。キリ、キリ。ヴァジャラ。ウーンハッタ」

川面に梵字が映しだされ、辺りを無数の光が照らし出す。

そこから——

《——むう？》

《ふーやれやれ。喚び出しかいな》

「なっ……………！！」

——無数の異形の者共が溢れんばかりに召喚された。

「ちよつとちよつと、こんなのアリなの!？」

「やろー、このか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな……!」

「な、何体いるか分からないよ……」

「あんたらはその鬼どもとでも遊んどきや。ガキやし、殺さんよーにだけ(・・)は言つとくわ。五体満足でいたかつたらお嬢様を取り返すなんて欲張りせんで、追って来んほうが身の為やで」

「ほな」

「まつ、待て!」

《グフフ》

千草たちは跳んでその場からいなくなる。

刹那は追おうとするが、周りの百鬼がそれを許さない。

「くっつ……!」

《何や何や、久々にこんな大所帯で喚ばれた思つたら……》

《相手はおばこい嬢ちゃん坊ちゃんかいな。》

《悪いな嬢ちゃん達。「殺すな」言われとるけど、喚ばれたからには手加減でけへんのや。》

《恨まんといてな》

「うつうつ……………」

「あ、明日菜さん？」

明日菜の体が震え、歯をガチガチと鳴らしている。

「せ、刹那さん……………こ、こんなの流石に私、ムリ……………！！」

その言葉で刹那はハツとする。

「（そうだ。どうも常人離れしているから忘れていたけど、明日菜さんは一般人なんだ……………！！）」

その様子を見たカモも危機感を覚える。

「（ヤベエ、このままじゃすぐにやられちゃう！）」

そういうことである。

幾ら常人離れした運動能力があるからといっても彼女は一般人として刹那たちには認識されている。

「兄貴、時間が欲しい。障壁を!!」

「OK! ラス・テル・マ・スキル・マギステル。
逆巻け春の嵐。我らに風の加護を。『フランス・パリエース・ウエンティ・ウエルテンティス風花旋風・風障壁』!!」

《うおおっ!?!》

3人を守るように、竜巻が吹き始めた。

——ゴオオオオオオオオオオオオオオ………!!!

「こ、これって!?!」

風の流れが竜巻の外と内を遮断したため鬼の姿が見えなくなり、明日菜は落ち着きを取り戻す。

「風の障壁です。ただし2、3分しか保ちません!!」

「よし、手短かに作戦立てようぜ!! どうする、コイツはかなりやばい状況だぜ!?!」

「…………『二手にわかる』これしかありません。私が鬼を引きつけます。その間にお二人はお嬢様を追ってください」

「ええっ!?!」

「そ、そんな刹那さん!!」

「任せてください。ああいう化け物の相手をするのが神鳴流の仕事ですから」

だから大丈夫、心配しないでくださいと、二人を諭すように刹那は笑う。

しかし、『はいわかりました』と頷けるほど、二人にとって刹那の存在は軽くなかった。

「じゃ……じゃあ私も残る——!!」

「ええっ!?!」

明日菜はただの中学生として認識されている。

いきなり化け物どもに囲まれて平静を保つことは出来ないし、それらと戦うなど想像もできない。

しかしそんな戦場に友達を置いていくことも、到底できなかった。

「ア、アスナさんっ」

「刹那さんをこんなところに一人で残して行けないよっ!!」

明日菜は涙目で、今にも泣き出しそうな声で。それでも刹那を、放っておけない。

ソレが一般人の反応である。

「……………いや、案外イイかもしれねえ！

どうやら姐さんのハリセンは召喚された化け物を送り還しちまう代物だ。

あの鬼達を相手にするには最適だぜ！？」

——ヒュボッ

「兄貴、姐さんへの魔力供給を防御とかの最低限に節約して何分保つ？」

——ヒュオオオオオ——

「術式が難しいけど……………１０分、いや１５分は頑張れるよ！！」

「１５分か……………いつもの１０倍、９００秒だな。

短いが仕方ねえ……………ん？ 兄貴、風の音がおかしくねえか？」

「え？ まだ障壁は保つはずだけど……………」

——ババババババッ……………！

「……………！？」

何か、布が風になびく音が上から聞こえる。そしてその音は、こちらに近づいている。

「な、何！？」

「敵!？」

「まさか!… この竜巻の中、吹き飛ばされずに降りてくるなんて」

「——あっ……………!!」

「え？ うそ……………!!」

「——ズドン!!!!!!」

落下してきたのは巨大な炎の塊、いや、炎を押し固めた中心に居たのは一人の男。

そう、額と両拳から橙の炎を燈し、見るものを引き込むような目をした男。

それは、ここにいるはずのないと思われていた者。

「大丈夫か？ お前達」

『僕を倒すのかい？ やめたほうがいい。近衛詠春もウルキオラも既に石になっているはずだよ。』

だから君に勝ち目はないよ。』

ウルキオラが石かもしれない。綱吉も石かもしれない。

→この式が刹那たちの頭の中では組み立てられていたのだった。

「ツナヨシさん………！！」

「おいカモ！今すぐに仮契約の陣造れるか？」

「?! そういうことか!! わかったぜ時渡の旦那!!」

「悪い刹那。そういうことだから二回連続でして貰う」

「ええええええ!!?!?!?」

「出来たぜ旦那!!」

「さて約束を果たすよ刹那」

「え? な、何のことですグムッ」

「バックティオー
仮契約ーッ」

「もういっちょだ、カモ！」

「あいさー!!」

「アーティファクトは？」

「ねねぎりまる？」

「おいおい……。流石だな祢々切丸は人外しか斬れない刀だ。今回にはもってこいだな」

「人外…ですか？」

「そう人外だ」

俯いてしまう刹那。

「出来たぜ！もういっちょ仮契約バクティオーーッ」

そんな刹那にかまわずにオコジヨは仮契約を行う。

▼▼▼▼▼

その竜巻の外では、

《オヤビン、これじゃ手出しできやせんぜ》

《安心せい、こんな大がかりな風は長く保たん。》

《……そろそろか。》

《ふん、待たせよってからに……。》

風が弱まり、鬼達が臨戦態勢になった時。

風の中から、鬼達に向けられたネギの掌が現れた。

《！！》

ヨウチスベスタルグリエンス
「雷の暴風！！」

ネギ少年が先陣を切って飛び出し、続いて刹那、明日菜、カモが飛んでいく。

《オヤビン！！ 逃がしちゃっただ！！》

《……20体は喰われたか。》

《やーれやれ、西洋魔術師にはわびさびってモンがなくてアカン》

「その意見には賛成だぜ百鬼」

《——む？》

竜巻が消えた小川に佇んでいたのは、額と両拳に炎を燈した男。

《ふっふっふ………たった一人で残るとは、勇ましいあんちゃんやな》

《でもちよつと舐め過ぎゆーか………無謀ちゃうんか?》

「無謀、か。悪いがたかがコレぐらいで無謀といえるような生き方はしてないのだから？」

なににせよ、俺は今怒っている。

この四倍以上はもってこないと憂さ晴らしにもなりやしないぞ、百鬼」

《な》

《なんやとワレエええええええええええ！！！！》

「さて、これより始まるは零崎。お前ら全員殺して解して並べて揃えて晒してやんよ。喜んで去ぬるがいい！！」

第29話：問われる、覚悟（後書き）

・「呪いだ、呪い」

どんな呪いをつけたら性格が180。も変わるんだよ。

「カミサマ」

「舐めてるだろ」

綱吉は造物主の存在を知りません。

調べてないし、かわりがないので。

狐さん風にいうなら縁がありませんから、だ。

・フレイムギア

通称F G。V Gの代替品。

・「そう。フレイムギアの元。ってかお前が持っている、その指輪
フェイクだから。枷つきの」

なんてものを持たせてたんだこの人は。甥っ子を騙すなんて。

「気にするな。そのフェイクと枷は初代が作ったし、解き方は知らん！」

フェイクに枷までつけて本物のようにしました。

何故なら、ジョットが作った指輪がオリジナルよりも能力値が高すぎたから。

・「今は無理だな。お客さんがいらっしやったからな」

どういうことだろう。訳がわからない。

綱吉君は原典の冒頭部しか知らされていません。

ウルキオラが情報を抑えています。

・「無謀、か。悪いがたかがコレぐらいで無謀といえるような生き方はしてないのだが？」

なににせよ、俺は今怒っている。

この四倍以上はもってこないと憂さ晴らしにもなりやしないぞ、百鬼」

ウルキオラの教育というなのイジメのせい。

・「さて、これより始まるは零崎。お前ら全員殺して解^{コロ}して並^{バラ}べて

揃^{ソロ}えて晒^{サラ}してやんよ。喜んで去^いぬるがいい!!」

調べたら、この世界に本があった。なんてこった赤松ワールド。

沢田綱吉のV Gの能力が全然解らねえ――!!
どうしまひよ?

第30話：目醒める覚悟（前書き）

この連載小説は未完結のまま約2ヶ月以上の間、更新されていません
→ やつちまつたなあオイ。と思って急いで投稿。
出来かけ。中途半端……。どないしよう

第30話：目醒める覚悟

死ぬ気の炎には色々な属性がある。そして属性ごとにそれぞれの効果も変わってくる。

例えば、綱吉がよく使う大空の属性は調和と言って周りと（を）、同調する（させる）効果を持つ。

そして、嵐には分解、雨には沈静、晴れには活性、雷には硬化、雲には増殖、霧には構築と。

又、炎同士を掛け合わせると相乗効果が起こるものもある。

雨の炎で嵐の炎をコーティングしたりとかだ。

つまり、だ。

炎を何乗にも掛け合わせると、微弱なものでも大きくなると言っていることである。

まさに、ちりも積もれば山となる、である。

「ソフィストリー・プレイリマーク」

「契約に従い我に従え、仲間の守り手。来れ、仲間を護りし覚悟の炎。」

荒々しく全てを洗い流し、何者にもとらわれず全てを包む大空と

なれ。」

「――『フレイムチェーンバースト
炎の連撃』」

《――グアアアアアアアッ！！！！》

数多の炎の矢が鬼達に降り注いだ。

「えーまだ居るのかよー」

《あたりまえや。そないな攻撃で全滅やなんて笑い話にもならんわ》

「もう笑い話じゃなくてもいいよ………。ハア………。
ああそうだ。知ってた？」

《何がや？》

「俺の使った魔法、アレ増殖するよ？」

《なんやと！？増殖する魔法やて！？初耳やで！？！？》

「ですよねー」

《チイツこないしとる場合やないで。こつなつたら一斉にかかって
■るしかないな》

「させるとでも？」

《あんちゃん魔法だけやなく近接格闘もこなせんのか!？》
インファイト

「フッフッフ出来ないと生き残れなかったから、うん」

《あんちゃん可哀相な奴やな……》

「うるせいやいつ」

鬼に慰められるのであった。

「さてと、とりあえず

ヴィジョン クリエイト
『幻想・造製

創造の理念を追求し、基本となる骨子を設定し、
構成された材質を創造し、製作に及ぶ技術を体感し、
成長に至る経験に共感し、蓄積された年月を裏返し、
あらゆる時空を超越し尽くし、ここに、空想を結び幻と為す』

《な、なんや日本刀か》

そう、綱吉の手に握られていたのは日本刀。

ただ――

「ただの日本刀なわけないだろ?こいつの名前は『雪片式式』
てめえら鬼や魔法使いにとっての天敵だぜ?」

《ふん、そないな刀がどないしたっちゅうんや?全然怖ないで》

「ほう言つたな？いくぜ『零落白夜』」

《な、なんや少し見てくれが変わっただけ――》

――普通の日本刀ではなく使い手の魔力を消費して全ての魔を絶つ日本刀だが。

「フンッ」

《何！？触れただけで還されるだど？！なんてやっかいな》

「行くぜ行くぜ行くぜ！！」

そう声を張り上げ鬼を切り裂いていく綱吉。そこへ

「ストップだ」

「ッ！？その声炎真か！」

炎真が現れる。

「さて綱吉。君を■しにきたよ」

そして笑いながら物騒な事を言う。

「なら俺はお前を倒す！！」

「何処を見て言っているのかな？かな？」

「なッ！？」

炎真は綱吉が目で追えないような速さで移動する。

「この速さで追いつけないようじゃてんで話しにならないよ、綱吉」

「そんなこと百も承知なんだよ!!」

炎真を斬るように雪片式を振り回す、が、全くあたらないどころか触れもしない。

「その刀かな。それは君には過ぎた物なんじゃないのかな？」

「過ぎた物なら追いつきゃあいいんだよ!!」
『ダウンロードインストール スタート
降霊・追体験・適用』

「

綱吉は零落白夜を解き、正眼に構えて言葉を紡ぐ。

「やはり君のその能力……危険だ。排除する!!」

その状態を危険と判断し妨害する為に殴りにかかったそのとき、

「残念。もう使いこなせる」

——シャンッ

鞘のないはずなのに抜刀の音があたりに響く。

「クッ!?これは魔力を根こそぎ持っていくのか?!」

「ご名答。すなわち【魔】を使うモノの天敵ということだ」

「ならば【魔】じゃなきゃいいんだろう?」

炎真はそう言って不敵に笑う。

「どういうことだ?」

綱吉はそんな炎真を訝しむ。

「気でも、炎ヒでもいいんだろう?こんな風にな」

——
ボウツ

炎真は嵌めていた指輪に、こんなことなんでもない、とでも言うように簡単に炎を燈した。

「その炎は……?死ぬ気の炎とまではわかるが……はじめ
てみる属性……」

ただ、燈した炎は綱吉の知識にもないもの。

「お前ら一族だけが炎を手に入れたと思ったのか? 使役できると
思ったのか?

表があれば必ず裏がある。世界はそういう風に創られているんだ。
驕るなよ?」

その炎は包み込むと言うよりは覆い込むような印象を持たせる。

「どうやって手に入れた?」

「お前は本当に知らないのか？そんな奴が十代目を襲名するとは滑稽だな」

驚愕の目で炎真を見る。

「なんだと！？」

「だってそうだろ？お前はこの力の出自を知らない。知らずに使っている。」

何故、炎が指輪から出るかもな。そんな奴が十代目を名乗る？ふざけているのか？」

「ふざけて「わざとだ。わざと教えなかった」伯父さん？！」

ウルキオラが綱吉の発言の途中に割り込んできた。

「9代目が何のようだ？」

そう会話している間にも炎真の指輪が変形しガントレットに為りつつあった。

「初代のバカ野郎の後始末にな」

「初代？ああ、俺たち夜桐一族を裏切ったジヨットのことが」

「そう、そのジヨットの後始末だ。真相を話にな」

「フン。アイツが人間じゃなくて化け物だったって話だろう？」

「実はな、化け物じゃなくて時間跳躍が出来たんだよ」

「「はい？」」

「タイムワープが出来たんだ。コイツの苗字がその名残、時渡なんだよ」

ウルキオラはそう、綱吉を指しながら言う。

「フン、ソレがどうした。そんなことが分かっても裏切ったことに変わりはない」

「そしてな、お前の一族は裏切られてない。心許ない奴らが流した噂」

「何！？そんなバカな事が有るわけがない！！」

「そうかそうか。なら存分にコイツと死合ってくれ。」

ああ、そうだついでにこれをてめえにやるよ、綱吉」

ウルキオラは小さいケースを綱吉に投げ渡す。

「これは？」

そのケースを開けると――

「新型コンタクトレンズ型ディスプレイとヘッドフォン。有効活用しろよ？あとはてめえの覚悟だけだからな。」

――が入っていた。

「覚悟もないのに死合わせるのか？まあいい。どうせこんな奴簡単に消せる。」

そしてクライアントの頼みである近衛詠春と桜咲刹那もな」

「……………、なんていった？」

「ん？」

「いま、なんていった？」

「聞こえなかったのか？ならもう一度言ってやる。
お前と近衛詠春と桜咲刹那は簡単に消せる」

「かんとんに、けせる？」

「ああ、簡単に消せるな。この指輪の力があればな」

そう言った炎真の指輪は完全にガントレットとなっていた。

「夜桐一族が指輪に吞まれた、か。知っていたけど目の当たりにすると辛いな……………」

とても悲しそうな瞳でウルキオラは呟く。

「……………炎真」

「どうした、綱吉」

「お前だけは……………お前だけは許さない！」

「許すも何もないだろ？というよりお前はここで死ぬ」

「……きれねえ。……きれねえよ。」

お前に殺されるなら……俺は、死んでも死にきれねえ！

「！」

「なにを言ってるんだ？ 覚悟のない奴はな、あっさりと死ぬんだよ……！」

吐き捨てるように炎真は叫んだ。

ただ、綱吉は真っ暗闇に一筋の光明を見出したような顔をしている。

そして、眼も死んではない。

「見せてやるぜ炎真！これが俺の覚悟の炎だ……！」

——ボウッ——ボウッ——ボウッ——ボウッ

ウルキオラから渡されたオリジナルの指輪が、これまでにない大きな炎を燈しながら輝きだした。

懐に入っていたF・Gもそれに反応して強烈な光を放つ

フレイム・ギア

そして、

【お前の覚悟、届いたぜ】

声が指輪から聞こえ、

初代、ジヨット・L・アルカディアの立体映像ホログラムが指輪から映し出された。

「ジヨット!？」

「え？」

「何故出てこれる!! かなり昔に封印されたはずだ!!」

【お前に力を貸してやりたいのは山々だ。なんせ勘違いされたままつてのが気に食わねえからな】

「ふざけるな!! 裏切ったのは事実だ!!」

【だが、故あってそっちに行けない。だから指輪の枷を外してやるよ。仮契約の方もな】

「ありがとう初代」

【なに、礼はアイツの勘違いを気づかせることで払ってくれ】

「任せる。必ず気づかせてやる」

【では、継承の儀で又、会おう】

そして、ジヨットの立体映像が消えるともう一度輝き、

「グローブが紅くなったと?！」

そう。輝きが収まると、

ライオンの頭部を模した指輪とリングがチェーンで繋がれた状態で中指に嵌められており、

グローブのカラーリングが黒と銀から紅と銀になったのだ。

「炎の変換効率も上がってるみたいだぜ、炎真。ここからは俺たちのターンだ！」

「ふザケるな！お前ゴトキに覚悟ナンザあるわけがナイだろ！」

炎真は暴走し当たり一帯に黒い球体を創り出していく。

その球体はどう見ても惑星にしか見えない。

「おい綱吉、暴走する前に決着をつけろ！！じゃないとここら一体が巻き込まれるぞ！！」

「クツ……もって後どれくらいだ？」

「最高でも2分弱だな。ってオイ気をつける！ソイツはブラックホールだ！！」

そんな会話をしている最中にも惑星は増えていく。

そしてその惑星がだんだんと小さく黒くなっていく。

そうブラックホールだ。

「大丈夫だ、問題ない。大空のリング・Ver?………
カンビオ
・フォルマ 形態

变化！！
」

第30話：目醒める覚悟（後書き）

ソラノホノオ
宇宙の炎

特性：膨張、収縮、重力操作、。

夜桐一族が代々受け継いできたリング、コスモリングでしか燈す事の出来ない炎。

因みに、このコスモリングは宇宙の炎を燈すものしか残されていない。

第31話：――覚醒――

「で、だ。とりあえず放つ前に一つ聞いておく。お前は誰だ？」

「・・・・・・・・。おや、ばれてしまいましたか」

綱吉は自身のグローブを変化させ終えたとき、突然近くの大木に向かって話しかけた。

「やはりジヨットの子孫と言うところでしょうか。ここまでそっくりだと双子か同一人物かと思わせますね」

その姿をみて一番驚いていたのはウルキオラだった。

「・・・・・・・・てめえ、生きてたのか」

「ええ。お久しぶりです。ウルキオラ」

どうやらこの二人は旧知の仲であるようだ。

「てえことはだ。アイツの暴走はお前の差し金であり仕業だな？ ジェyson・クロープ」

「いいえ。ただお膳立していただけですよ。まあ簡単に乗せられたあなたの子にも非はあるんじゃないですかね」

「お前！ 炎真になにをした！！」

「えーっとそうですね。君たち一族のあることないことを吹き込み

ましたね。それと炎の使いかたも教えましたね」

「……綱吉、こっちは俺がなんとかするからお前は夜霧の小僧を頼む」

「………わかった」

「ほう……ずいぶん聞き分けのいい子ですね」

「黙れ」

「嫌です」

「………輪廻眼」

「とか言いつつも六道輪廻の眼も使ってますよね」

「輪廻だからうそはついていないだろうが」

「そうですね」

と、軽口を叩きあっているが、二人から放たれる殺気がその場を満たしていく。

「ッチ 鈍ってねえのかよ」

「フッフ残念でしたね」

会話だけ聞くととても穏やかだがそんな空気はこの場にはない。

「まあどうでもいいけど、とりあえず……封印されるや」

「先読みの眼でも使えばいいじゃないですか」

「ほざいてろ！」

ウルキオラが、先制をしかけた。が、それをジェイソンは軽く避ける。

「もしかして、鈍りましたか？」

「解るか？」

「ええ。私を封印した時の貴方とは比べるのも阿呆らしくなるくらい落ちてますね」

「もし、俺が力を封印してるっていったら？」

「ダウト、ですね。あなた方一族の唯一の欠点が力の減衰ですからね」

「それも知っていたのか」

「調べるのは大変でしたっが」

ジェイソンの話はどうでもいいとでもいうように、ウルキオラは気で作った剣で斬りかかる。

それをジェイソンも同じく気で作った刀で防ぐ。そして、そこから何合も打ち合い切り結びあう。

突然、二人の空間が歪み、地面から火柱が立った。

「幻術、ですか。煩わしいですねっ」

その火柱をものともせずにジェイソンはウルキオラへ肉迫する。

「やっぱり効かねえか、ちくしょうめ」

「当たり前ですよ。っと向こうは決着がついたようですね。綱吉君の包容力とやらで」

包容力と聞くと、うーんとなるがあなたが間違えでもないから厄介である。

「そうかい。じゃあ俺はここらで隠居するか」

「何故です？」

「力はもう譲渡したからな」

「なん・・・だと・・・？」

その一言でジェイソンの顔が驚愕に染まる。

「そんな・・・だってまだ継承式は行われてないはず・・・。なぜだ？」

「元来、継承式の前に力を譲渡して、継承式で扱いかたを体に覚えさせてたんだよ。」

情報に踊らされたな、ジェイソン」

「くっ……まあいいでしょう。目的のうち二つは果たせそうですから」

といて振り返る。その視線の先には一条の光の柱が地より天へそびえ立っていた。

「あれは……スクナか？」

「ええ。クライアントとの契約内容の一つです」

「残りはなんだ？」

「貴方という存在の抹消。そして時渡一族の根絶といったところですかね」

「よかったな？ 最後以外成功しそうです」

「ええ。ですから。さようなら、旧友」

ジェイソンは空より取り出^イだした三叉の槍、通称『霧霞の棍棒』を袈裟懸けに一閃。

「『またな旧友』」

それをウルキオラは避けようと防^ゴうともせず受け入れ、左肩から右わき腹まで綺麗に裂かれ仰向けに地に伏した。

「伯父さん!？」

炎真を抱えながらウルキオラの元へ行こうとしていた綱吉は、その光景を見て急いで駆けつける。

「・・・ああ、つなよしか・・・。わるい、な。おおみえきつてこのざまだ・・・ゴフオツゴフオツ」

「喋っちゃダメだ伯父さん！ちょっと待ってる今からアンタに回復の「いい、んだ。これ、で。おまえ、は・・・そこにい、る、ジエ、イソンをたお、せ。それがたった、一つの、さえた、やりかた・・・」
「伯父さん？伯父さん？！ねえ伯父さんってば！！返事しろよウルキオラア！！！」

ウルキオラは綱吉に見取られながら絶命した。

「ふむ、やはりウルキオラも非情にはなりきれませんでしたか。全くもって残念ですね」

「・・・れ」

「はい？」

「・・・れよ、テメエ」

「今更怒っても仕方ないですよ？くっふっふー」

「それ以上喋んじゃねえ！ジエイソン・クローブ！！」

「嫌ですねえ」

「テムエは俺の大切な人を殺した！俺は怒ったぞ！ジェイソン・クロオオオブ！！」

と、綱吉の怒りに誘われたのか、懷から仮契約カードが飛び出し、アーティファクトを呼び出す。呼び出されたアーティファクトは綱吉に勝手に装備され形を変えXグロブと融合する。融合したXグロブは紅と銀のカラーリングから、紅と黒のカラーリングになり、グロブ中心のクリスタルもクリアメタリックブルーというわけのわからない色に変わった。

そして綱吉自身はというと、金髪碧眼となり髪は逆立ち眉毛も金色コジキに、全身から黄金色コガネイロの炎を出して、■ ■ ■ オ ■ ■ ■ オ ■ ■ ■ オ ■ ■ と雄叫びを上げた。

そう、見た目はもう超サスーパー。ヤ人である。

「ま、まさか初代しか至らなかった伝説の境地へただの偶然で辿り着いたとでも言うのですか？！」

「なんだか良くわからんが・・・力がわいてくるのだけは良くわかるぜ」

「・・・なんたる偶然。何たる異常。なんたる異分子。世界はなぜこんなにも理不尽なんだクフフフハハハハハハハハ」

「御託はいい。さあはじめようぜ幻術師！！」

「貴方はやはり此処で消さなければならぬようです、ね！」

ジェイソンは槍——霧霞の棍棒——を綱吉の顔面へ、特に目を狙い突き刺さす

「舐めるなよ、ジェイソン」

——はずだった。が綱吉が右掌でそれを受け止め炎で捻じ曲げる。

「なっ？ありえない！！先ほど死闘を演じた貴方のどこにこんな力が？！」

「言ったるうが。力が溢れてくるって、よ」

捻じ曲げた槍を手放し、ボディীবローを入れてジェイソンを突き飛ばして距離をとる。

「ごめん。伯父さん。後でしっかり供養するよ」

突き飛ばされたジェイソンは無様に地面に転がり、生えていた大木にあたり止った。

その隙に、ウルキオラを安全な場所へ移動させた。

「ケホツケホツ　さてそれができますかね！」

ジェイソンは起き上がると同時に捻じ曲げられた槍と同型の槍を連続で投げつける。

「で、き、る、さ」

狙うのは、綱吉の死角。厭らしいところを狙って投げる。投げる。投げる。

それを綱吉はグローブで弾いたり、曲げたりしていなした。

「まぐれでも伝説は伝説、ですか。これはどうやら私も真の力を解放しないといけませんね。コレだけは使いたくなかったんですが」

ハアアアアアアアア、と気合を入れ、顔の前に右手をかざし、ナニ力を掴む動作をする。そして、そこから仮面でも被るように顔の輪郭に沿ってまっすぐおろした。

すると、なんと上から段々と仮面が構築されていくではないか。仮面は顔をすっぽりと覆い隠し表情がわからなくなる。

「その姿は・・・一体・・・？」

「初代曰く『虚の仮面』だそうですね？ 智識に入っていないのですか？」

「は？ 何言ってるんだ？ 俺は・・・知らない・・・こともないのか？」

「まあいいでしょう。悩みながら地獄に落ちなさい」

先ほどのジェイソンとは比べ物にならない速さで綱吉のもとへ移動して顔をガシツと掴み——所謂アイアンクロ——虚化によって得られたふざけた贅力で地面へ倒す。

その衝撃で、地面に軽いクレーターができる。そしてそのクレーターの中心で立っていたのはジェイソンだけだった。

「鈍いぞ、戯け」

綱吉は倒される瞬間にグローブの炎による高速移動でジェイソンの手から逃れていたのだ。

「なに、ウォーミングアップですよ」

「だろうな。じゃないと俺は買い被っていた事になるからな」

「クッ今からは本気でいきますよ！」

「これはご丁寧にと、う、も！」

ふざけた贅力^{ジェイソン}VS人間の限界突破の熾烈を極める壮絶なる殴り合いが始まった。

そこには恥じも外聞もなく、誇りすら皆無であった。あるのはただのエゴ。

一方は、自分の計画の為。

もう一方は、遺言に則って。

二人の戦いはさらに激しくなっていく。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ」

「ダダダダダダダダダダダダダダダダアッ」

作品を間違えてしまったかのように。

これぞ真いいえ、のクロスオーバー！
違違います。います。

「さすが、伝説、ですね、ハアツハアツクツ・・・虚化しても抗うので精一杯とは・・・」

「ハアツクツハアツハアツ・・・伝説に、抗ってるだけ、充分じゃ、ねえか」

「それも、そうですね。そろそろ決着をつけましょうか」

「ああ、お前の、意見に、同意するぜ」

「行くぞ／行きます」

『フヘイト コンセブションパイラル
乖離する運命の螺旋』

『零地点突破・亜』

「なん・・・だと・・・？そんな技は情報になかったぞ？！」

「俺だって時渡一族の人間だ。言いたいことは解るな？」

「なるほど、開発力、ですか」

「そーゆーことだ。アンタの力使わせてもらっぜ」

『術式固定、掌握、魔力充填、「術式兵装Ver・XグローブFG改」』

『虚空炎壮』

グローブが又、色を変え、今度は白一色になった。

それに伴い炎も白身がかかった黄金色に変わった。

「それは、闇の福音の……。なるほど。私が負けるのも当たり前か」

ジェイソンはツナヨシが使った魔法に心当たりが有るのかしじみと呟いた。

『？ナツクル』

そんなジェイソンへ止めの一撃を与えて突き飛ばし、そこから

『？トルネード』

飛び蹴りへ繋げて、最後に

「あばよ。亡霊」

ジェイソンの顔をつかみ空中から地面へ突き落とした、瞬間に綱吉の背筋に悪寒が走った。

自分の超直感が警鐘を思いっきり打ち鳴らしていることを感じ、そこから飛び退く。

そのすぐ後に綱吉が今まで居た場所に白い光線が突き刺さった。

発射場所はスクナ。

「スクナ、か。用意しすぎることに越したことはない、な」

ガサゴソと自分のポケットをあさり、一粒のママを見つけた。

「……本当は伯父さんの為に用意したんだけどな。伯父さんちよっと一狩りしてくるよ。鬼神をね」

そのママをカリッと噛み飲み込んだ。

すると、綱吉の体中のあちこちにあった傷が塞がり先ほどのように力が又湧き出してきた。

「待つてろよ、木乃香、刹那、真名」

そう誰に聞かせるでもなく、自分に言い聞かせるように呟いた後、自身が出せる最高出力で、飛び立った。

第31話：——覚醒——（後書き）

遅れましてごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8382/>

神に殺された少年

2011年11月15日07時42分発行